光と風と夢

中島敦

見せた。 スティヴンスンは、南仏イエールの客舎で、突然、ひどい 喀 血かっけつ 口中を塞いで、口が利けなかったのである。 に襲われた。 一八八四年五月の或夜遅く、三十五歳のロバァト・ルゥイス・ 「恐れることはない。之が死なら、楽なものだ。」血が 駈付けた妻に向って、彼は紙切に鉛筆で斯う書いて

英の保養地ボーンマスでの三年の後、 う医者の言葉に従って、大西洋を渡った。米国も思わしくなく、 爾られ、 彼は健康地を求めて転々しなければならなくなった。 コロラドを試みては、とい 南

光と風と夢 航の後、一八八九年の終にサモアのアピア港に着いた。 パウモツ・タヒティ・ハワイ・ギルバァトを経て一 今度は南洋行が試みられた。七十噸の 縦帆船は、 活は快適で、島々の気候は申分なかった。自ら「咳と骨に過ぎな 年半に亘る マルケサス・ 海上の生

巡

ば 其処で便船を待合せて、一旦英国に帰るつもりだったのである。 墾や建築を暫く人手に委ねて、自分はシドニー迄出掛けて行った。 と考えていた訳ではない。 い」というスティヴンスンの身体も、先ず小康を保つことが出来 か りの土地を買入れた。 彼は此処で住んで見る気になり、アピア市外に四百エーカー 勿論、 現に、 まだ此処で一生を終えようなど 翌年の二月、 買入れた土地の開

しかし、

彼は、やがて、

在英の一友人に宛てて次の様な手紙を

海と島々と土人達と、島の生活と気候とが、私を本当に幸福にし れが辛いだけだ。それを別にすれば、寧ろサモアの方が好ましい。 る七・八人、米国にいる一人二人の友人と会えなくなること、そ 今は思いも寄らぬ。……私は悲しんでいるだろうか? シドニーでは到頭喀血をやって了った。 死ぬ時であろう。 英国に帰ることはないだろうと思っている。そして其の一度とは、 書かねばならなかった。「……実をいえば、 て呉れるだろう。私は此の流謫を決して不幸とは考えない……。 此処(ニュー・カレドニア)でさえ、 | 熱帯に於てのみ私は纔かに健康なのだ。 霧の深い英国へ帰るなど、 私は直ぐに風邪を引く。 私は、 最早一度しか 英国にい 亜熱帯

光と風と夢 6 は白人大工でなければ出来ないのである。それが出来上るまで、 の買入地には、 その年の十一月、彼は漸く健康を取戻してサモアに帰った。 土人の大工の作った仮小舎が出来ていた。 本建築

彼

達を監督して開墾に当った。其処はアピア市の南方三哩、マイル 峡谷断崖を含む・六百呎から千三百呎に亘る高さの台地である。 ヴァエアの山腹で、 スティヴンスンと彼の妻ファニイとは仮小舎に寝起し、 五つの渓流と三つの瀑布と、その他幾つかの

ばくふ 自ら土人 休火山

地に、 たる熱帯林や 渺 茫 たる南太平洋の眺望をもつ斯うした土 自分の力で一つ一つ生活の礎石を築いて行くのは、スティ

土人は此の地をヴァイリマと呼んだ。五つの川の意である。

ヴンスンにとって、 子供の時の箱庭遊に似た純粋な歓びであった。

意識 等の木は悉く自分の山から伐出され自分の眼の前で鉋を掛けられましたことごと を蘇らせて呉れる。此の小舎を組立てている丸木や板も、又、ょみがぇ 作上げた手工品を 卓 子 の上に置いて眺めた時の・新鮮な自尊心 こと。之も、幼い頃母の作った料理でなければ安心して喰べられ たものであり、 々の食物も、 野菜や果実を何時も喰べていること――之は、 もって其の製造の手伝をした椅子に掛け、 自分の生活が自分の手によって最も直接に支えられていることの (このオレンジはどの木から取った、 ―その敷地に自分が 一 杙 打込んだ家に住み、自分が鋸を みんな素性の知れたものであること――つまり、 其等の食物の出所も、 このバナナは何処の畠のと) みんなはっきり判っている 自分が鍬を入れた畠の 幼時始めて自力で

中で、 軽波べっし、・ た。 做な なかったスティヴンスンに、何か楽しい心易さを与えるのであっ 事のみを行う。」之が彼の新しい生活であった。 われまいとの懸念を忘れて、真に思う事のみを言い、 の生活を実験しつつある。「太陽と大地と生物とを愛し、富を 彼は今ロビンソン・クルーソー、或いはウォルト・ホイットマ 労働に汗ばんだ皮膚の下に血液の循環を快く感じ、人に嗤った 乞う者には与え、白人文明を以て一の大なる偏見と見み 明るい風と光との 真に欲する

る。 ダの下を見るともなく見ていると、 うとしている。遥か北方、森と街との彼方に、 六時少し前朝食。オレンジ一箇。卵二箇。喰べながらヴェラン 五時起床。美しい鳩色の明方。それが徐々に明るい金色に変ろ 耳をすませば、 但し、環礁の外は相変らず怒濤の飛沫が白く立っているらしどとう。しぶき 確かに其の音が地鳴のように聞えて来る。 直ぐ下の畑の 玉 蜀 黍 が二三 鏡のような海が光

に降りて行って畑に入ると、仔豚が二匹慌てて逃出した。

|れたと思うと、葉の茂みの中に、すうっと隠れて了った。直ぐ

いやに揺れている。おやと思って見ている中に、一本の茎が

本、

倒

光と風と夢 10 逞しく、美しいとさえ言っていいかも知れぬ。^{たくま} ぬ に去勢されて了ったものとは、 ものと思っていたが、どうして、 豚 0 悪戯には全く弱る。 欧羅巴の豚のような、ョーロッパ 全然違う。 南洋の豚は立派に泳ぐ。 実に野性的で活力的で 私は今迄豚は泳げ 文明のため

な黒牝豚が五百碼も泳いだのを、 くろめすぶた ャード なのになると、時に仔羊を襲って喰殺したりする。 ココナットの実を日向に乾かして割る術をも心得ている。 私は確かに見た。 彼等は怜悧

の近頃は、 六時から九時まで仕事。一昨日以来の「南洋だより」の一章を 毎日豚の取締りに忙殺されているらしい。

事と道 拓きに従っている。斧の音。 書上げる。 直ぐに草刈に出る。土人の若者等が四組に分れて畑仕 煙の匂。 ヘンリ・シメレの

監督で、 しくない立派な青年だ。 イ島の 仕事は大いに捗っているようだ。ヘンリは元来サヴァイ

見付けて、 生垣の中にクイクイ(或いはツイツイ)の 叢 生 している所を 退治にかかる。この草こそ我々の最大の敵だ。 恐ろし

岩にくっつくように、 忽ち葉を閉じて了う。 ときは何の反応も示さないのに、 く敏感な植物。 狡猾な知覚――風に揺れる他の草の葉が触れたこうかつ 縮んでは鼬のように噛みつく植物、 根で以て執拗に土と他の植物の根とに、 ほんの少しでも人間がさわると

かる。 からみ付いている。クイクイを片付けてから、 棘と、弾力ある吸盤とに、大分素手を傷められた。とげ 野生のライムにか

食後、

詩を纏めようとしたが、巧く行かぬ。

銀 笛

を吹く。

犀 果・ビスケット・赤葡萄酒 十時半、ヴェランダから法螺貝が響く。 昼食 冷肉・

斧を手に、 時から又外へ出てヴァイトリンガ河岸への径を開きにかかる。 其の葉の隙から時々白く、殆ど銀の斑点の如く光って見ばんてん 独りで密林にはいって行く。頭上は、 重なり合う巨木、

える空。

地上にも所々倒れた巨木が道を拒んでいる。

の多い稚木の茎は、斧の一振でサクリと気持よく切れるが、しなっかかぎ る蘭類。 絡みつき、輪索を作る 蔦 葛 毒々しい触手を伸ばした羊歯類。 類の氾濫。総状に盛上 巨大な白星海芋。 汁気

やかな古枝は中々巧く切れない。

帰途、

の世界の、 静 がだ。 何という寂しさ! 白昼の大きな沈黙の、 私の振る斧の音以外には何も聞えない。 豪華な此の緑 何という恐

ろしさ!

魂でもあろうか? が聞えた。ゾッと悪寒が背を走った。 突然遠くから或る鈍い物音と、 笑声は鳥の声? 続いて、 此の辺の鳥は、 はじめの物音は、 短い・ 疳 高い笑声とかんだか 妙に人間に 何かの木

鋭 似た叫をするのだ。 い鳥共の鳴声で充たされる。しかし、今の声は、 日没時のヴァエア山は、 子供の喚声に似た、 、それとも少し

違っている。 結局、 音の正体は判らずじまいであった。

メロドラマである。 弾丸の様に其の思いつきが(又、その中の情

ふと一つの作品の構想が浮んだ。この密林を舞台とした

光と風と夢 14 景の一つが)私を貫いたのだ。巧く纏まるかどうか分らないが、

とにかく私は此の思いつきを暫く頭の隅に暖めて置こう。

雞が

五時、 夕食、ビーフシチウ・焼バナナ・パイナップル入クラレ

をかえす時のように。

教授だ。ヘンリが毎日毎日、此の 憂 鬱 な夕方の勉学に、どうし 食後ヘンリに英語を教える。というよりも、サモア語との交換

好むのは、 サモア人だのに。サモア人は自ら強いることを好まない。 等数学だ。)享楽的なポリネシア人の中でも特に陽気なのが彼等 て堪えられるか、不思議でならぬ。 歌と踊と美服(彼等は南海の伊達者だ。)と、 (今日は英語だが、明日は初 彼等の

水浴と

て、 りるなどという面倒な事はせずに、皆貰って了うのだから、従っ れているのはタヒティから借用した言葉だ。サモア人は元々、借 ないことになっている。サモア人の底抜の陽気さは、彼等の国語 訪ねられた村では必ず彼等をカヴァ酒や踊で歓待しなければなら 者が大勢集まって村から村へと幾日も旅を続けて遊び廻ること。 て「貰う」という言葉が幾通りにも区別されているのだ。もう一 に「借財」或いは「借りる」という言葉の無いことだ。近頃使わ カヴァ酒とだ。それから、談笑と演説と、マランガ――之は、若 借りるという言葉も無いのである。貰う――乞う― ·魚だとか、タロ芋だとか、亀だとか、筵だとか、それに依っ という言葉なら、実に沢山ある。貰うものの種類によって、 -強請す

光と風と夢 16 いう、 食物携帯で遊びに行き、 人達と一緒に一日中飲んだり歌ったりして楽しく過すのだ。 いる土人の囚人の所へ、 つの長閑な例のどか とぼけた明るさだろう! 奇妙な囚人服を着せられ道路工事に使役されて 工事最中の道路の真中に筵を敷いて、 日曜着の綺羅を飾った囚人等の一族が 所で、うちのヘンリ・シメレ君

何と

飲

囚

もの、 ネシア人としては異数のことだ。 は斯うした彼の種族一般と何処か違っている。 エレと来ては、 料理人のポールなど、遥かに知的に劣っている。 組織的なものを求める傾向が、 之は又典型的なサモア人だ。元来サモア人は体格 彼に比べると、 この青年の中にある。 その場限りでない 家畜係のラファ 白人ではあるが、 ポ IJ

がいいが、ラファエレも六呎四吋位はあろう。

身体ばかり大きい

白の鶴が珊瑚屑の塚の上に立っている。之こそは父の魂だと、 墓の前に佇んでいた。ふと気がつくと、何時の間にか、一羽の雪 なく、生きた人間である。」という意味だ。)二三日前ラファエ ポリネシア人が「彼は人だ」という時、それは、「彼が幽霊では く怖がっている。夕方一人でバナナ畑へ行けないのだ。(一般に、 う思いながら見ている中に、鶴の数が殖えて来て、中には黒鶴も スの如くアキレスの如き巨漢が、甘ったれた口調で、 くせに一向意気地がなく、のろまな哀願的人物である。ヘラクレ 「パパ、パパ」と呼ぶのだから、やり切れない。彼は幽霊をひど が面白い話をした。彼の友人の一人が、死んだ父の霊を見たと 夕方、その男が、死んでから二十日ばかりになる父の 私のことを

光と風と夢 18 三毛、 上には、今度は白猫が一匹いる。やがて、 交っていた。その中に、 と、 何時か彼等の姿が消え、その代りに塚の 幻のように音も無く、 白猫の周 りに、 灰色、

堅く信じている………… 云 々 声一つ立てずに忍び寄って来た。その中に、其等の姿も周囲 十二月××日 闇の中へ融去って了った。鶴になった父親の姿を見たと其の男は あらゆる毛色の猫共が、 | |の |タ

午前中、 稜 鏡 羅針儀を借りて来て仕事にかかる。 この器械にプリズム

私は一八七一年以来触れたことがなく、又、それに就いて考えた こともなかったのだが、兎に角、三角形を五つ引いた。エディン

な学生で私はあったか! ブラッキイ教授やテイト教授のことを、 バラ大学工科卒業生たるの誇を新たにする。だが、何という怠惰 ひょいと思出した。

のに、 怠惰と時間の空費とを悼むのだ。之は一体どうした訳か。 斧や鎌を揮って六片分も働くと、 午後は又、 家の中で机に向って二十磅稼いでも、愚かな良心は、己のポンド 植物共のあらわな生命力との無言の闘争。こうして 私の心は自己満足でふくれ返る

でも知っている。色々な形の・多くの快楽を。 いうやつは解らぬ。それは自意識以前のものだ。 働きながら、ふと考えた。俺は幸福か? と。 (どれも之も完全 が、 しかし、 快楽なら今 幸福と

19 なものとてないが。)其等の快楽の中で、私は、 「熱帯林の静寂

光と風と夢 20 蠢き、 植 的な不気味さ。 ずゾッとしているのだ。 誠 神経を逆撫する荒っぽい残酷さが、 を投じた者の感じねばならない肉体的な嫌悪というやつだろうか。 も一方、 生活を、 の中で唯一人斧を揮う」この伐木作業を、 に、 物共の生命が私の指先を通して感じられ、 まつわるものの、 私は、 歌の如く、 正直な所を云えば、 私自身の荒廃の感じ。 他の如何なる環境とも取換えたく思わな 情熱の如く」此の仕事は私を魅する。 本質的にそぐわない環境の中へ強いて身 いやらしさ。 血に塗れているような自分を感じる。 私は今、 何時も私の心を押しつける。 絶えざる殺戮の残酷さ。 或る強い嫌悪の情で、 周囲の空寂と神秘との迷信 高い位置に置くものだ。 彼等のあがきが、 現在 絶え 私 が 0

には歎願のように応える。

てのける訳だ。

夢の中でも、

私は、

強情な植物共の蔓を引張り、

ファニイの中耳炎。まだ痛むらしい。

脱出して、 大工の馬が 雞 卵 十四箇を踏みつぶした。 昨夕は、うちの馬が 隣(といっても随分離れているが)の農耕地に大きな

穴をあけたそうだ。

夜、 なって横たわった儘何時間も、 閉じた瞼の裏に、私は、 た雑草の茂み、 身体の調子は頗る良いのだが、肉体労働が少し過ぎるらしい。 蚊帳の下のベッドに横になると、背中が歯痛のように痛い。ゕゃ その一本一本を見る。 近頃毎晩ハッキリと、 昼の労働の精神的 つまり、 私は、 限りない、生々し 後 誦 くたくたに 誦 をやっ

光と風と夢 恐ろしい暑さ、突然の微風、近くの森から聞える鳥の声、 螫され続ける。 蕁 麻 の棘に悩まされ、シトロンの針に突かれ、いらくさ とげ 足許でヌルヌルする粘土、どうしても抜けない根、 蜂には火の様に 誰か が

生活を夢の中で、もう一ぺん、し直すのである。

ふざけて私の名を呼ぶ声、笑声、

口笛の合図………大体、

昼の

十二月××日

昨夜仔豚三頭盗まる。

今朝巨漢ラファエレが、おずおずと我々の前に現れたので、こ

の事に就いて質問し、 但し、之はファニイがやったので、私は余り斯んな事を好ま やまをかけて見る。全く子供欺しのトリッ

つかまえて呉れるから。」

光と風と夢 三十分後、ラファエレは心配そうな顔をして、 又 我々の所へ

来る。さっきの魔物の話は本当かと念を押す。

よ。 じきに其の男は病気になるだろうよ。 豚を盗った酬さ。 」

「本当だよ。盗った男が今晩寐ると、魔物も其処へ寐に行くんだ

く今晩あたり其の仔豚の 饗 宴 にあずかるであろうことも。但 幽霊信者の巨漢は益々不安の面持になる。彼が犯人とは思わな 犯人を知っていることだけは確かのようだ。そして、恐ら

し、ラファエレにとって、それは余り楽しい食事ではなくなるだ

詩は、 な場面が、紙芝居の絵のように次から次へと現れて来て仕方がな 之を作品中の島の名前に使うつもり。 ている時は、決して、こんな興奮に悩まされることはないのだが。 んだような工合で、今執筆中の「南洋だより」のような紀行文な いメロドラマに堕する危険も多分にありそうだ。 何か電気でも孕 ようかと思う。ウルは森。ファヌアは土地。美しいサモア語だ。 醗 酵 して来たようだ。 此 ゆっくり書いていられなくなる。 の間、 非常に良い叙事詩になるかも知れぬ。実に下らない甘ったる いきぬきの為の娯楽の詩だから、話にならないが)を書い 森の中で思い付いた例の物語、どうやら頭の中で大分 。題は、 「ウルファヌアの高原林」とつけ 未だ書かない作品中の色々 随筆や詩(もっとも、 私の

と海との彼方から満月が出ると、此の地には珍しい寒さが始まっ 夕方、 巨樹の梢と、 山の背後とに、壮大な夕焼。やがて、 掛蒲団を探す。 低地

誰一人眠れない。皆起出して、

何時頃だっ

巓に在った。丁度真西だ。鳥共も奇妙に静まり返っている。 たろう。——外は昼のように明るかった。月は正にヴァエア山

の裏の森も寒さに疼いているように見えた。 六十度より降ったに違いない。

ヴォア荘から、家財道具一切を纏めて、ロイドがやって来た。ロ れど、久しく夫から脱れて欧洲に渡り、 の母親であった。 二人の子をかかえて自活していたのである。 ニイは当時、戸籍の上では未だ米国人オスボーンの妻であったけ ニイに会った時、 イドはファニイの息子で、最早二十五歳になっていた。 それから三年の後、スティヴンスンは、其の時カリフォルニア 十五年前フォンテンブロオの森でスティヴンスンが始めてファ 明けて一八九一年の正月になると、旧宅、ボーンマスのスケリ 娘はイソベル、男の児はロイドといった。ファ 彼女は既に廿歳に近い娘と九歳になる男の児と 雑誌記者などをしながら、

に帰っていたファニイの後を追うて、大西洋を渡った。父親から

光と風と夢 28 着 れ は の身体を気遣っていた。)をも斥けて、 勘当同様となり、 いた時は、殆ど瀕死の有様だった。しかし、 に劣らず最悪の経済状態とを以て彼は出発した。 友人達の切なる勧告(彼等は皆スティヴンス 最悪の健康状態と、 兎に角どうにか頑 果して加州

に

を待って漸く結婚した。 長男を挙げていたから、 張り通して生延びた彼は、 歳年上の四十二。前年娘のイソベルがストロング夫人となって 世の辛酸を嘗めつくした中老の亜米利加女と、坊ち 彼女は既に祖母となっていた訳である。 時にファニイは、スティヴンスンより十 翌年、ファニイの・前夫との離婚成立

活が始まった。 我 儘 で天才的な若いスコットランド人との結婚生^{わがまま} 夫の病弱と妻の年齢とは、しかし、二人を、やが

や

ん育ちで、

彼女であった。ボーンマスにいた頃、夫の身体の為とはいえ、

彼女が、マネージャアの分を超えて批評家の域に入ろうとする時 秀であった。が、時に、優秀すぎる憾がないではなかった。 多分に備えていたファニイは、彼のマネージャアとして確かに優 のに変えて了った。スティヴンスンに欠けている実際家的才能を 夫婦というよりも寧ろ、芸術家と其のマネージャアの如きも 殊に、

経なければならないのである。三晩寐ないで書上げた「ジィキル であった。 とハイド」の初稿をストーヴの中に叩き込ませたのは、ファニイ 事実、スティヴンスンの原稿は、必ず一度はファニイの校閲を 結婚以前の恋愛詩を断然差押えて出版させなかったの

光と風と夢 には、 確かに、ファニイの才能に就いて幾分誤算をしていた所があった。 実際眼の前で、 めに蒙らねばならぬ変化を充分冷静に観察できた筈だのに、今、 ためにスティヴンスンはすっかり変って了った、 な眼をした亜米利加女が、でしゃばらねばならぬのか。 な男だ)が真先に憤慨した。 直情径行のW・E・ヘンレイ(ガルバルジイ将軍を詩人にした様 であった。 古い友達の誰彼を、 赤髯詩人も、あかひげ 我慢がならなかったのである。スティヴンスンの方でも、 之にはスティヴンスンの友人達も大分気を悪くした。 自己の作品の中に於てなら、友情が家庭や妻のた 最も魅力ある友が一婦人のために奪い去られるの 頑として一切病室に入れなかったのも、 何の為に、あの色の浅黒い・隼の様はやぶさ と。 此の豪快な あの女の 彼女

芸術的な

彼も其

のに義父が筆を加え、それを母親が批評するという、妙な一家が 此の青年も母親に似て、ジャア 息子の書いたも

何時か自分

31

光と風と夢 32 リマで一緒に暮らすようになってから、 出来上った。今迄に父子の合作は一つ出来ていたが、今度ヴァイ 「 退 潮 」なる新し

い共同作品の計画が建てられた。

花とに囲まれた・暗緑色の木造二階建、 四月になると、 愈 々 屋敷が出来上った。芝生とヒビスカスのいょいょ 赤屋根の家は、ひどく土

人達の眼を驚かせた。スティヴロン氏、

或いはストレーヴン氏

、物語の語り手を意味する土語)が、富豪であり、 犬 酋 長 (彼の名を正確に発音できる土人は少かった) 或いはツシタラ

であることは、最早疑いなきものと彼等には思われた。彼の豪壮 (?)な邸宅の噂は、やがてカヌーに乗って、遠くフィジー、ト

ンガ諸島あたり迄喧伝された。

費に三千磅も使った彼は、いやでも書捲くらざるを得なかったのポンド 疲れないようになった。原稿執筆は、毎朝決って五時間位。 ロング夫人が長男のオースティンを連れてヴァイリマに合流した。 に暮らすことになった。それと共に、ロイドの姉イソベル・スト やがて、スコットランドからスティヴンスンの老母が来て一緒 スティヴンスンの健康は珍しく上乗で、伐木や乗馬にもさして

兀

である。

八九一年五月 × 日

域の方は先日行って見たので、今日はヴァエア河の上流を探る。 自分の領土(及び其の地続き) 叢 林の中を大体見当をつけて東へ進む。 そうりん 内の探険。 ヴァイトゥリンガ流

漸く河の縁へ出る。

床の上に樹々が低く密生して馬は通れないので、 に洞があったりして、 最初河床は乾いている。ジャック(馬)を連れて来たのだが、 いで置く。 乾いた川筋を上って行く中に、谷が狭くなり、 横倒しになった木の下を屈まずにくぐって 叢林の中の 木に 所々 河

北へ鋭く曲る。 水の音が聞えた。 暫くして、峙つ岩壁にぶつか

歩けた。

が ので、 る。 鳴った様な、或いは、 ぐ地下に潜って見えなくなって了う。 岩壁は 攀 登 れそうもない 円天井の下を暫く行くと、また水が無くなる。地下の 熔 岩 の洞 廻るような音がした。それも、巨大な水車が直ぐ足許でゴーッと 強くなる度に、 途端に何か音がしたように思って耳をすます。確かに水車の 水が其の壁面を簾のように浅く流れ下っている。 水路に沿って行く。今度は水が多い。 ミモザの花。 木を伝って横の堤に上る。青臭い草の匂がむんむんして、 | 夾||竹||桃||、枸櫞樹、たこの木、オレンジ。其等の樹々のきょうちくとう|| シトロン 静かな山全体が揺れるように感じた。地震だ。 羊歯類の触手。 遠雷の様な音が、二三回。そして、その音 身体中を 脈 搏 が烈しく打 恐ろしく冷たく澄ん 其の水は直

った。

ら、 ても、 穴の廊下に潜り込むのだ。 漸く繁みが浅くなり、 樹 々に埋れた井戸の底から仲々抜出られぬ。 空が葉の間から透けて見えるようにな 私は其の廊下の上を歩く。 余程行ってか 何時迄行っ

岩の崖に出くわす。 0) 様子をうかがって、巧くやり過ごす。 ないが、 中を、 ふと、 先方では所有主を見知るまいから、頗る危険だ。 指ぐらいの小魚の影がすいすいと走る。ざりがにもいる 牛の鳴声を聞きつける。 うま 浅い美しい滝がかかっている。 確かに私の所有する牛には違い 暫く進むと、 下の水 溜 々たる熔 立停り、

が不思議にルビイの様に紅い。

朽ち倒れ、

半ば水に浸った巨木の洞。

渓流の底の一枚岩

う。 と拡がる其の影の巨きさ! り茂っている。 ていた) 々の嶺の中には、 スの様に、 本の素晴らしい巨樹を見付けた。 て行く。河床らしいものもなくなり、山頂に近い台地に出る。 徨 すること暫し、台地が東側の大峡谷に落ちこむ縁の所に、 は層々纍々と盛上つて、 やがて又も河床は乾き、いよいよヴァエア山の嶮しい面を上っ 巨幹と数知れぬ其の従者共(気根)とは、地球を担うアトラ に高く向い合い、 怪鳥の翼を拡げたるが如き大枝の群を支え、一方、枝 枝々の群は、一つの途方もなく大きな円蓋だ。そ 羊歯・蘭類がそれぞれ又一つの森のように叢が 東の方数哩の谿から野にかけて 蜿 蜒・かた マイル たに 明るい西空(既に大分夕方に近くなっ 誠に、 榕 樹 だ。 高さは二百呎もあろ^{ガジマル} 何とも豪岩な観ものであっ

3

見ると、ジャックは半狂乱の態だ。独りぼっちで森の中に半日捨 もう遅いので慌てて、 帰途に就く。 馬を繋いで置いた所へ来て

て置かれた恐怖の為らしい。ヴァエア山にはアイトゥ・ファフィ

ネなる女怪が出ると土人は云うから、ジャックはそれを見たのか とで宥めて、連れ帰った。 も知れぬ。 何度もジャックに蹴られそうになりながら、漸くのこ

五月×日

クラックストン師来訪。「壜の魔物」をサモア語に訳して、 ボットル・イムプ 午後、ベル(イソベル)のピアノに合せて「銀」「笛」を吹く。

オ・レ・サル・オ・サモア誌に載せ度き由。欣んで承諾。 短篇の中でも、ずっと昔の「ねじけジャネット」や、この寓話な 自分の

語の語り手)となるのだ。

土人達も喜ぶかも知れない。

之で 愈 々 私は彼等のツシタラた。 南海を舞台にした話だから、

案外

(物 作者の最も好きなものだ。

寝に就いてから、 雨の音。 海上遠く微かな稲妻。

五月××日

の地に於ては頗る大問題なり。 街へ下りる。 殆ど終日為替のことでゴタゴタ。 銀の騰落は、 此

午後、 港内に碇泊中の船々に弔旗揚がる。土人の女を妻とし、

40 ンが死んだのだ。 サメソニの名を以て島民に親しまれていたキャプテン・ハミルト

光と風と夢 の家のバルコニイに女達(土人の)が沢山いて唱っているのだっ 夕方、 ウの角を曲った時、 米国領事館の方へ歩いて見た。 前方から讃美歌の合唱の声が聞えた。 満月の美しい夜。 マタウ 死者

未亡人になったメァリイ(矢張、サモア人だが)が、 私を請じ入れて 家の入

自分 横 人の牧師が立上って、 口の椅子に掛けていた。 たわっている故人の遺骸を私は見た。 の隣に掛けさせた。 話を始めた。 室内の 卓 子の上に、シーツに包まれて 私と見知越しの彼女は、 長い話だった。 讃美歌が終ってから、 灯明の光が扉

や窓から外へ流れ出していた。

褐色の少女達が沢山私の近くに坐

五.

月××日

私を中に案内した。故キャプテンの指は胸の上に組まれ、 っていた。恐ろしく蒸暑かった。 牧師の話が終ると、メアリイは 其の死

顔は穏かだった。今にも何か口をききそうであった。之程生々し

た・美しい 蝋 細 工 の面を未だ見たことがない。 一礼して私は表へ出た。月が明るく、オレンジの香が何処から

な羨望の念を私は覚えた。 乙女等の唄に囲まれて静かに眠っている故人に対して、一種甘美 か匂っていた、既に此の世の戦を終え、こんな美しい熱帯の夜、

南洋だより」は、 編 輯 者 並びに読者に不満の由。 曰く、^んしゅうしゃ

光と風と夢 42 筆 0) ことを書いていればいいのであって、 行き方なのだ。 あ の麗筆に係る南海の猟奇的冒険詩に有之候』 も 『南洋研究の資料蒐集、 者 うのか? やり切れないことには、ファニイ迄が亜米利加の編ァメリカ あ 者と同意見なのだ。 人口減少現象や、 の るべ なければ、」と云うのだ。 の主観や情緒を抑えて、 原稿を書く時、 読者 「宝島」の作者は何時迄も海賊と埋もれた宝物 の R 布教状態に就いて考察する資格が無いとでも 頭に浮べていた模範は、 • 「精確な観察よりも、華やかで面白い話を L . S 或ひは科学的観察ならば、 即物的な観察に終始した・ああいう ・氏に望む所の 南海 の殖民事情や、 十八世紀風の紀行文、 冗談ではな ものは、 \ \ \ 固よりそ 他に 土着民 私が

0)

か

くても知っている。)豚が三十匹余り。

馬八頭、

(ここ迄は聞か

な

家鴨と雞とは随処に出没

ン紙 ないのだ。 用 の形容詞の絶滅。 大体、 の編輯者にもファニイにもロイドにも、 最近の私の文体は、 私は近頃、 従来の自分の極彩色描写が段々厭になって来いる。 次の二つを目指している積りだ。一、 視覚的描写への宣戦。 未だに此の事が解ら ニューヨーク ・ サ 無

ら、 イソベルという一層 叮 嚀 な筆記者が殖えたのは、 難破船引揚業者」は順調に 進一捗 家畜の宰領をしているラファエレに、 乳牛三頭、犢が牝牡各一頭ずつ、 捗 しつつある。 現在の頭数を聞いて見た 大いに助か ロイドの他に る。

扈している由。 するので殆ど無数という外はなく、 野良猫は家畜なりや? 尚、 別に夥しい野良猫共が跋ょががだだ。

五月××日

吹かれながら、 街に、 真昼の大天幕の下、土人の男女の 喧 騒 の中で、 島巡りのサーカスが来たというので、 曲芸を見る。 これが我々にとっての唯一の劇場だ。 一家総出で見に行 生温い風 に

我 々のプロスペロオは球乗の黒熊。 ミランダは馬の背に乱舞し

フラ、帯っ。ゴットでつつ火の輪を潜る。

夕方、帰る。何か心怡しまず。

だ。 わ言を言っている。時々、脅された鼠の様な声を立てる。 へ行った。パータリセは睡っている者のように見えたが、 んですか。」とミタイエレが言う。直ぐにロイドと、彼等の寝室 の中にいる家族の者に逢いに行く。」といって聞かないのだそう に変な事を言出して気味が悪い、と言った。何でも、「今から森 者で英語は皆目判らず、サモア語も五つしか知らない。)が、急 戸外労働から室内給仕に昇格した十五・六歳の少年、 の少年召使)がやって来て、一緒に寐ているパータリセ(最近、 昨夜八時半頃ロイドと自室にいると、ミタイエレ(十一・二歳 「森の中に、あの子の家があるのか?」と聞くと、「あるも ワリス島の 何かう

45

身体に

光と風と夢 る外、 やって抑え付けられた儘時々何か呟き、時に、怒った子供の様に ぜんまいの弛んだ機械玩具のような奇妙なのろさであった。)ロ 泣いた。 彼をベッドに(シーツや縄で)括り付けた。パータリセは、そう アリック少年とラファエレとサヴェアとがやって来た。サヴェア 逃出そうとした。今度は猛烈な勢なので、やむを得ず、みんなで イドと私とが彼をつかまえてベッドに寐かしつけた。暫くして又 扉に向って走った。(といっても、其の動作は余り速くなく、 彼は起上り、頭を低く下げ、 「家の者が呼んでいる」とも言っているらしい。その中に 彼の言葉は、「ファアモレモレ (何 卒)」が繰返され 前へつんのめるような恰好

はパータリセと同じ島の生れで、彼と自由に話が出来るのだ。

々は彼等に後を任せて部屋に戻った。

は縛をすっかり脱し、巨漢ラファエレにつかまえられている。必ぃホョレめ 死の抵抗だ。五人がかりで取抑えようとしたが、 アリックが私を呼んだ。急いで駈付けると、パータリセ 狂人は物凄い力

高く跳ね飛ばされて了った。午前一時頃迄かかって、 ロイドと私とが片脚の上に乗っていたのに、二人とも二呎も 到頭抑えつ

ない。 け、 得ない。 鉄の寝台脚に手首足首を結びつけた。厭な気持だが、やむを まるで、ライダー・ハガードの世界だ。(ハガードといえ 彼の弟が土地管理委員としてアピアの街に住んでいる。) 其の後も発作は刻一刻と烈しくなるようだ。何のことは

め

光と風と夢 たことがある。」と。 ている者がある。それは女で、其の女は之を悪い目的の為に使っ と心配した。自分のほかに、もう一人、此の島で此の秘法を知っ 二時頃、 中 木の葉を数枚持って来、 秘薬を持って来よう」と言って、出て行った。 に其の汁を垂らし、(ハムレットの場面?)鼻孔にも詰込んだ。 ラファエレが「狂人の工合は大変悪いから、 位、 今朝ラファエレに聞くと、 訳なく出来る劇毒薬で、 狂人は熟睡に陥った。それから朝迄発作が無かったらし それを噛んで狂少年の眼に貼付け、 「あの薬は使い方一つで、一家鏖 昨夜は少し利き過ぎなかっ やがて、 自分の家の家伝の 見慣れ 耳の た

か

入港中の軍艦の医者に今朝来て貰ったが、パータリセを診て、

のだと。

家の死んだ一族が多勢、 夜(そこが彼等の住居である)へと逃げて行かねばならなかった 々は死者の霊と、 叢 林の中で少年に会い、彼の額を打ったに違いないと。又、そうりん 土人達は皆パータリセの 者に接吻した。この狂的接吻には、 朝食の時、 異常なしという。少年は、今日は仕事をするのだと言って聞かず、 へ呼んだのだと。又、 皆の所へ来て、昨夜の謝罪のつもりだろうか、 昨夜一晩戦い続け、 最近死んだパータリセの兄が其の日の午後 かきわごと 森の中から寝室へ来て、少年を幽冥界 言を信じているのだ。パータリセの 一同少からず 辟 易。 竟に死霊共は負けて、 家中の 暗い かし、

六月×日

光と風と夢 とは凡そ縁の遠い)が思わず涙をこぼした。 友人! コルヴィンの所から写真を送って来た。ファニイ(感傷的な涙 何と今の私に、それが欠けていることか! (色々な

がらも、 会話の中に頭註や脚註の要らない仲間。ぞんざいな言葉は使いな 意味で)対等に話すことの出来る仲間。 ィ・ジェイムズ、思えば俺の青春は豊かな友情に恵まれていた。 ン、バクスター、W・E・ヘンレイ、ゴス、少し遅れて、ヘンリ 活動的な日々との中で、足りないものは、それだけだ。コルヴィ 心の中では尊敬せずにいられぬ仲間。この快適な気候と、 共通の過去を有った仲間。

みんな俺より立派な奴ばかりだ。ヘンレイとの 仲 違 いが、今、

た痩せっぽちの俺とが、一緒に秋のスコットランドを旅した時の、 あの二十代の健かな歓びを思っても見ろ。 っているとは、さらさら思わない。しかし、 最も痛切な悔恨を以て思出される。 顔と横隔膜とのみの笑ではなく、頭から踵に及ぶ全身の笑」が、 道理から云って、 あの男の笑い声 理窟なんか問題じゃ 此方が間違 蒼ざめ

来る。 ていると、 今も聞えるようだ。不思議な男だった、あの男は。あの男と話し で、ランプを手に入れたアラディンであるような気がして来たも 話している中に、 世の中に不可能などというものは無いような気がして 何時か此方迄が、 富豪で、 天才で、王者

昔の

懐かりし

の一つ一つが眼の前に浮かんで

先日から掛かっているサモア紛争史、 来て仕方がない。 無用の感傷を避けるため、 或いは、 仕事の中に逃れる。 サモアに於ける白

人横暴史だ。

かし、 英国とスコットランドとを離れてから、もう丁度、 冱

五

年になるのだ。

サモアに於ては古来地方自治の制、 極めて鞏固にして、きょうこ

通常、 者の存在に脅されざるを得ず。 あるを常とす。されば、 功績により)得たる者、推されて王位に即くなり。 五つの称号の全部、もしくは過半数を(人望により、或いは 名誉の称号、 来此の諸島には、 の政治は悉く、各地方のフォノ(会議)によって決定せられ 名目は王国なれども、王は殆ど政治上の実権を有せず。 多くは、王の他に、一つ或いは二つの称号を保持する者 五つの称号を一人にて兼ね有する場合は極めて稀にしまれ 王は世襲に非ず。又、必ずしも常置の位にも非ず。 其の保持者に王者たるの資格を与うべき・ 王は、絶えず、他の王位請求権保持 かかる状態は必然的に其の中 而して、

に内乱紛争の因由を蔵するものというべし。 ・B・ステェア「サモア地誌」

号「ツイアトゥア」の持主マターファとは、代る代る副王の位に 即 即くべく定められ、先ず始めにタマセセが副王となった。 「タマソアリィ」の三つを有つ大酋長ラウペパが推されて王位に いた。「ツイアアナ」の称号を有つタマセセと、もう一つの称 一八八一年、五つの称号の中、「マリエトア」「ナトアイテレ」

会議及び其の実権者、ツラファレ(大地主)達が王を操っていた 其の頃から丁度、白人の内政干渉が烈しくなって来た。 以前は、

ある。 領事 経営に係る南海拓殖商会であった。 ヌウ岬から其の附近一帯の広大な土地が独逸商会の農場で、 商会の支配人が独逸領事を兼ねたこともあり、又其の後、 此 (此の男は若い人道家で、商会の土人労働者虐待に反対した と衝突して之を辞めさせたこともある。 今は、アピアの街に住む極く少数の白人が之に代ったので の商会は正しく小人国のガリヴァアであった。曾ては此のまさ 元来アピアには、 併し、 ココア、パイナップル等を栽培していた。 最も権力のあるのは領事達ではなくて、 英・米・独の三国がそれぞれ領事を置い 島の白人貿易商等の間に在っ アピアの西郊 独逸人の 千に近い 自国の

労働者は、主に、サモアよりも更に未開の他の島々や、

或いは遠

処

えられ、

或いは殺された。

一方、遥かに久しい以前から食人の習

光と風と夢 56 悲鳴が日毎に聞かれた。 くアフリカから、 過酷な労働が強制され、 奴隷同様にして連れて来られたものである。 脱走者が相継ぎ、 白人監督に答打たれる黒色人褐色人の しかも彼等の多くは捕

慣を忘れている此の島に、 い人間が島民の子供を取って喰うと。サモア人の皮膚は浅 褐色だから、 アフリカの黒人が恐ろしいものに見えたのであ 奇怪な噂が弘まった。外来の皮膚の黒

ろう。 ことが許されぬのは、 た商会の農場は、 島民の、 商会に対する反感が次第に昂まった。 土人の眼に公園の如く映り、 遊び好きな彼等にとって不当な侮辱と思わ 其処へ自由に入る 美しく整理され

れた。 喰べもせずに、船に載せて他処へ運んで了うに至っては、土人の 折角苦労して沢山のパイナップルを作り、それを自分達で

夜、 農場へ忍び入って畑を荒すこと、之が流行になった。之は、

大部分にとって、全く愚にもつかぬナンセンスである。

した。 独逸領事と結んでラウペパ王に迫り、 商会内の私設監獄にぶち込んだばかりでなく、此の事件を逆用し、 ロビンフッド的な 義 侠 行為と見做され、島民一般の 喝 采 を博 勿論、商会側も黙ってはいない。犯人を捕えると、直ぐに 賠償を取るのは勿論、更に

彼等は英国に縋ろうとした。そして、全く莫迦莫迦しいことに、 るに至った。 王を始め島民達は、此の圧迫に堪えられなくなった。

脅迫によって勝手な税法(白人、殊に独人に有利な)に署名させ

光と風と夢 58 逸領事とは、直ちにラウペパをムリヌウの王宮から逐い、代りに、 旨を申出そうとしたのだ。 の相談は、しかし、 副王以下各大酋長の決議で「サモア支配権を英国に委ねたい」 直ぐ独逸側に洩れた。 虎に代うるに狼を以てしようとする 激怒した独逸商会と独

は 逸側と結んで、王を裏切ったのだとも云われる。 独逸の方針に反対した。 紛争が続き、 結局、 独逸は(ビスマル 兎に角英米二国

従来の副王タマセセを立てようとした。一説には、タマセセが独

ク流 の遣り方だ)軍艦五隻をアピアに入港させ、 其の威嚇の下に

クー・デ・タを敢行した。タマセセは王となり、

ラウペパは南方

逸軍艦の砲火の前に沈黙しなければならなかった。 の山地深く逃れた。島民は新王に不服だったが、 諸所の暴動も独

ると、 が独逸の陣営に出頭しなければ、更に大きな 災 禍 が此の島に起 秘かに前の副王候補者であったマターファに会見し、之に後事を 直ぐに自己犠牲を覚悟した。其の夜の中に彼はアピアの街に出て、 貴族にふさわしい一片の道義心を失ってはいなかったラウペパは、 るであろう」 云 々。 意志の弱い男ではあったが、 0) れねばならぬ。但し、 独兵の追跡を逃れて森から森へと身を隠していた前王ラウペパ ラウペパは、 独逸艦長が保証していることを、マターファは附加えた。 マターファは、ラウペパに対する独逸の要求を知ってい 或夜、 彼の腹心の一

一

長

か

ら

使

が

来

た

。 ほんの暫くの間、 艦上に於ては前王として出来る限り厚遇す 独艦に乗って何処かへ連去ら 「明朝中に貴下 尚、 此 の島の

光と風と夢 館に出頭した。 ラウペパは信じなかった。 アの地を踏めまいと。 マターファに渡した。二人は涙の中に別れ、 其の午後、彼は独艦ビスマルク号に載せられ、 彼は、 彼は覚悟していた、 全サモア人への訣別の辞を認めて、 ラウペパは独逸領事 自分は二度とサモ

の前に自らを投出す。 「……我が島々と、 余は、 貴きサモアの血が、我故に再び流されることを望ま 我が全サモア人への愛の為に、 彼等は、 その欲するままに余を遇するであ 余は独逸政府

処へともなく立去った。

彼の訣別の辞は悲しいものであった。

何

未だにそれが解らぬのだ。 ぬ。しかし、 (余に対し、 又 余の犯した如何なる罪が、 余の国土に対し)斯くも憤らしめたか、余には ……」最後に彼は、 彼等皮膚白き者をして、 サモアの各地方の

よ。アアナよ。サファライよ……」島民は之を読んで皆涙を流し 名前を感傷的に呼びかけている。「マノノよ、さらば、ツツイラ

スティヴンスンが此の島に定住するより三年前の出来事である。

知らぬ間に、 擁立する独逸と、之に対立する英米(彼等は別にマターファに好 ファに集まっていた。一揆が相継いで起り、マターファは自分の 新 王タマセセに対する島民の反感は烈しかった。 自然推戴の形で、 叛軍の首領になっていた。 衆望はマター 新王を

意を寄せていた訳ではないが、独逸に対する対抗上、事毎に新王

光と風と夢 62 頃から、マターファは公然兵を集めて山岳密林帯に 立 籠 った。 米が之に抗議し、三国の関係は、 独逸の軍艦は沿岸を回航して叛軍の部落に大砲をぶち込んだ。 ファは度々王の軍を破り、ムリヌウから王を追うてアピアの東 かなり危い所まで行った。マタ

持する政府は完全に潰えた。 よって仆されたのだから。タマセセ王は海上に逃亡し、ピメ゚ 多数の独逸兵が戦死し、 了った。 今迄 半 の陸戦隊はファンガリィの峡谷でマターファ軍のために惨敗した。 方ラウリイの地に包囲した。タマセセ王救援の為に上陸した独艦 ~半 神・ の如く見えた白人が、彼等の褐色の英雄に 軍艦を用いて島全体に頗る過激な手段を 島民は欣んだというより寧ろ自ら驚 独逸の支 いて

憤激した独逸領事は、

が の中、 作家的手腕を揮って人々を驚かせた。かの歴史的な大惨禍、一八 隻と対峙し、 各国はそれぞれ軍艦をアピアに急航させて、 八九年の大 颶 風 が襲来したのである。 加えようとした。再び、英米、殊に米国が正面から之に反対し、 一八八九年の三月、アピア湾内には、 隻に過ぎなかった。 まる一昼夜続いた後、 々 と機を窺っていた。方に一触即発のこの時、たん うかが まさ 大破損を受けながらも兎に角水面に浮んでい 市の背後の森林にはマターファの率いる叛軍が虎視 最早、 前日の夕方迄 碇 泊 していた六隻の軍艦 敵も味方もなくなり、 米艦二隻英艦一隻が独艦三 想像を絶した大暴風雨 事態は更に緊迫した。 白人も土人も たのは、 天は絶妙な劇

団となって復旧作業に忙しく働いた。市の背後の密林に潜んで

僅 か

此

の年、遠くベルリンで、サモアに関する三国の協定が成立し

光と風と夢 此の惨禍は、 の看護に当った。今は独逸人も彼等を捕えようとはしなかった。 た叛軍の連中迄が、 対立した感情の上に意外な融和を齎した。 街や海岸に出て来て、死体の収容や負傷者

た。 員会の上に立つべき政務長官と、 人から成る政務委員会が之を扶けるという形式になった。この委 その結果、サモアは依然名目上の王を戴き、 全サモアの司法権を握るべきチ 英・米・独三国

の賛成が絶対必要と定められた。 から派遣されることとなり、又、 ーフ・ジャスティス(裁判所長) と、この二人の最高官吏は欧洲 爾じ 後ご 王の選出には政務委員会

同じ年(一八八九年)の暮、二年前に独艦上に姿を消して以来

悴 した姿で戻って来た。サモアから 濠「洲 へ、濠洲から独領い まるで消息の知れなかった前々王ラウペパが、ひょっこり 憔

彼の帰って来たのは、 傀 儡 の王として再び立てられる為であっ シアへと、 盥 廻 しに監禁護送されて来たのである。しかし、たらいまわ 西南アフリカへ、アフリカから独逸本国へ、独逸から又ミクロネ

には、ファンガリィの峡谷に於ける独逸水兵の血潮が釁られてい から云っても、当然マターファが選ばるべきだった。が、彼の剣 もし王の選出が必要とあれば、順序から云っても、人物や人望

る。 ア自身も別に強いて急ごうとしなかった。いずれは順が廻って来 独逸人は皆マターファの選出に絶対反対であった。マターフ

光と風と夢 の方は又ラウペパで、 ると楽観的に考えてもいたし、又、二年前涙と共に別れた・そし て今やつれ果てて帰って来た老先輩への同情もあった。ラウペパ 始めは、実力上の第一人者たるマターファ

に、 たからである。 絶えざる不安と恐怖とのために、すっかり覇気を失って了っ

に譲るつもりでいた。元々意志の弱い男が、二年に亘る流浪の間

仲の良かった二人が大変驚いたことに)王とマターファの間の不 策動と熱烈な島民の党派心とである。政務委員会の指図で否応な にラウペパが即位させられてから一月も経たない中に、(まだ 斯うした二人の友情を無理やりに歪めて了ったのが、 白人達の

和の噂が伝えられ出した。二人は気まずく思い、そして、又実際'

まずいものに成って行ったのである。 奇妙な、 いたましいコースをとって、二人の間の関係は本当に気

禍なことに、彼等白人は悉く――ゎざゎぃ る迄—— の・土人の扱い方に、腹が立って堪らなかった。サモアにとってたま 此 の島に来た最初から、スティヴンスンは、 - 金 儲 の為にのみ来ているのだ。これには、英・米・^{かねもうけ} 政務長官から島巡り行商人に至 此処にいる白人達

達を除けば) ら腹を立てた。植民地常識から考えれば、之は、呆れる方がよっ ているという者が無いのだ。スティヴンスンは初め呆れ、それか 此の島と、 島の人々とを愛するが為に此処に留まっ

独、

の区別はなかった。

彼等の中誰一人として(極く少数の牧師

光と風と夢 を以て酬いられたに過ぎなかった。大小説家の驚くべき政治的無むく ぽどおかしいのかも知れないが、 タイムズに寄稿し、 無恥。 土人の惨めさ、等々。 島の此の状態を訴えた。白人の横暴、 彼はむきになって、 しかし、 此の公開状は、 遥かロンド

冷笑

ゝといすぐられる所でなく、何か莫迦莫迦しいような不愉快さを初版を求めて古本屋を漁っていると聞いた時も、彼は真実、虚栄、 **** 知、 着の人間を愛することから始めよ、という自分の考が間違ってい るとは、どうしても思えなかった。 感じていた)政治的実際に疎いのは事実だったが、 ンスンのこととて、(曾て大宰相グラッドストーンが「宝島」のかっ 云々。「ダウニング街の俗物共」の軽蔑者たるスティヴゥんぬん 此の島に於ける白人の生活と 植民政策も土

政策とに対する彼の非難は、アピアの白人達(英国人をも含めて)

と彼との間に溝を作って行った。

は、 に愛着をもっていた。サモアの族長制度も之に似た所がある。 スティヴンスンは、 始めてマターファに会った時、その堂々たる体躯と、 故郷スコットランドの 高 地 人 の氏族制度 威厳の

マターファはアピアの西、七哩のマリエに住んでいる。 彼は形

ある風貌とに、真の族長らしい魅力を見出した。

多くの人望と、より多くの部下と、より多くの王者らしさとを有 の上の王ではなかったが、公認の王たるラウペパに比べて、より

て一度も反抗的な態度を執ったことがない。白人官吏が自ら納税 っていた。彼は、白人委員会の擁立する現在の政府に対して、

光と風と夢 70 わらず、 られ、憚られ、憎まれるようになっていた。彼が秘かに弾薬を集はばか あれば何時でも大人しく 裁「判「所「長 の召喚に応じた。にも拘がれば何時でも大人しく 裁「判」所「長 の召喚に応じた。にも拘か を怠っている時でも、彼だけはちゃんと納めたし、部下の犯罪が めているなどと政府に密告する者も出て来た。王の改選を要求す 何時の間にか、彼は現政府の一大敵国と見做され、恐れ

リスチャンであった。独身で、今は六十歳に近いが、二十年来、 は一度も、 る島民の声が政府を脅していたことは事実だが、マターファ自身 まだ、そんな要求をしたことはない。 彼は敬虔なク

ることに就いて言っているのだ)、それを実行して来た、と、 「主のこの世に生き給いし如く」生きようと誓って(婦人に関す

ら言っていた。夜毎、島の各地方から来た語り手を灯の下に集め

て円座を作らせ、彼等から、古い 伝「説 や古譚詩の類を聞くの

彼の唯一つの楽しみであった。

六

八九一年九月×日

書かれていた。」「頭の無い蜥蜴が 酋 長 が 紅く染まった。」「アピア湾で捕れた怪魚の腹に不吉な文字が 近頃島中に怪しい噂が行われている。「ヴァイシンガノの河水 長会議の壁を走った。」

る。 「夜毎、アポリマ水道の上空で、雲の中から物凄い 喊 声 が聞え ウポル島の神々と、サヴァイイ島の神々とが戦っているのだ

光と風と夢 ない。全く今の政府はひどい。 莫 大 な(少くともポリネシアにない。全く今の政府はひどい。 茣 大 な (少くともポリネシアに と、白人達の政府とを倒すであろうと期待しているのだ。無理も 考えている。彼等は、マターファが何時かは立上って、ラウペパ 」………土人達は之を以て、来るべき戦争の前兆と真面目に

ダルクランツも個人としては厭な男ではないが、役人としては全 民の感情を害ってばかりいる。税ばかり取立てて、道路一つ作ら く無能だ。 ないでノラクラしている役人共ばかりだ。 裁 判 所 長 のツェ に対しても、王に対しても、島に対しても、一文の金も出さぬ。 しては)給料を貪りながら、何一つ――全く完全に何一つ――し 着任以来、土民に官を授けたことが一度もない。アピアの街 政務長官のフォン・ピルザッハに至っては、事毎に島

あり、やはり目と耳と若干の知能とを有っているのだ、という事 島でも中流以下の、みすぼらしい建物(小舎?)なのである。 ことだ。しかも、ラウペパ王の住居は、その官邸の直ぐ向いの、 に堂々たる官邸を建てることを提案し、 を忘れている。政務長官の為した唯一のこと、それは、自分の為 彼等は、自分等がサモアにいること、又、サモア人というものが 既にそれに着手している

警察署長(瑞一典 人)の俸給……………一四○弗 政務長官の俸給…… 裁 判 所 長 の俸給……チーフ・ジャスティス ------五〇〇弗四一 五弗

先月の政府の人件費の内訳を見よ。

裁判所長秘書官の俸給…………………一〇〇弗 サモア王ラウペパの俸給……………… 九五弗

だ。 一 斑 推して 全善豹 を知るべし。之が新政府下のサモアなのいっぱん ぜんぴょう

然 ドン・キホーテの観があるそうな。之は、アピアの一英人のら 植民政策に就いて何一つ知りもせぬ文士のくせに、 無智な土人に安っぽい同情を寄せるR・L・S・ 氏は、 出しゃばっ

先ず、 知らないことを誇ともしている。 感謝しよう。実際私は政治に就いて何一つ知らないし、又、 植民地、 或いは、 半植民地に於

言葉である。あの奇矯な義人の博大な人間愛に比べられた光栄を、

しても、 何が常識になっているか、をも知らぬ。 私は文学者だから、心から納得の行かない限り、そんな 仮たとえ 知っていたと

常識を以て行為の基準とする訳には行かない。

(或いは芸術家を) 本当に、 直接に、心に沁みて感じられるもの、じか 行為にまで動かし得るのだ。所で、今の私に それのみが私を、

其の「直接に感じられるもの」とは何か、といえば、そ

著 を以て、 「私が最早一旅行者の好奇の眼を以てでなく、一居住者の 此の島と、島の人々とを愛し始めた」というこ

とって、

とである。

兎に角、 目前に危険の感じられる内乱と、 何とかして防がねばならぬ。しかも、斯うし 又 それを誘発すべ

75 き白人の圧迫とを、

た事柄に於ける私の無力さ!

私は、

まだ選挙権さえ有っていな

光と風と夢 アピアの要人達と会って話して見るのだが、 彼等は私を真面

目に扱っていないように思われる。辛抱して私の話を聞いて呉れ

私が立去ったあとでは、屹度舌でも出しているに相違ない。 実は、文学者としての私の名声に対してのことに過ぎな

るのも、

自分の無力感が、いたく私を噛む。この愚劣と不正と 貪 慾 と

が日一日と烈しくなって行くのを見ながら、それに対して何事を も為し得ないとは!

九月××日

マノノで又新しい事件が起った。全く、こんなに騒動ばかり起

出て来た。彼等は六ヶ月禁錮の宣告を受け、直ぐ牢に繋がれるこ 判 所 長 が官費でフィジーへ大名旅行中だったので、長官のピ・ジャスティス 者の家を襲って焼払ったのだ。島は大混乱に陥った。丁度、裁・テーフ す島はない。小さな島のくせに、全サモアの紛争の七割は、此処 人等は、犯人達が街を通って牢へ連れて行かれる途中で、大声に とになった。彼等に附添って一緒に来た、他の アピア迄出頭するように命じた。犯人達は男らしく自らアピアへ 勇気だけはあると見える)暴徒に説いた。そして、犯人等に自ら ルザッハが自らマノノへ赴き、独りで上陸して(此の男も感心に から発生する。マノノのマターファ側の青年共が、ラウペパ側の 剽悍なマノノひょうかん

呼びかけた。「いずれ助け出してやるぞ!」実弾の銃を担った三

光と風と夢 厳重な警戒が張られた。日夜の心配に堪えられなくなった守衛長 中に救助破獄が行われるだろうと固く信じられている。 丈夫だ。」と答えた。それで話は終った訳だが、一般には、 十人の兵に囲まれて進んで行く囚人等は、 「それには及ばぬ。

監獄

では

近い

カがサモア政府に寄贈することになったので、 大 颶 風 で湾内に沈没したままになっている軍艦二隻をアメリ を得た。それで、 碇 泊 中のアメリカ軍艦へ行ってダイナマイト 爆破して了ったらどうだろうと。彼は政務長官に之を話して賛成 を貰おうとしたが拒絶され、やっと、難破船引揚業者(前々年の マイトを牢の下に仕掛け、 (若い瑞典人) は、遂に、 襲撃を受けた場合、 乱暴極まる措置を思いついた。ダイナ 其の引揚作業のた 暴徒も囚人も共に

病と破廉恥とが野蛮に臨む文明の典型的な姿態である。白人は皆 の事が一般に洩れ、この二三週間、 こんな事に賛成なのだ、と、土人等に思わせてはならない。 に禁錮を流罪に変更するのも随分目茶な話だ。 服罪している者を爆破しようというのは勿論言語道断だが、勝手 人達をカッターに乗せてトケラウス島へ移して了った。大人しく り大騒ぎになりそうなので、怖くなった政府では、 め目下アピアに来ている。)から、それを手に入れたらしい。 流言が頻りに飛んでいる。 斯うした卑劣と臆 最近、突如囚 余

此 の件に就いての質問書を、 早速、 長官宛に出したが、 未だに

返辞がない。

光と風と夢 80 抜け。 大嫌いだが、土人達がダイナマイトで吹飛ばされるのを黙って見 十月×日 長官よりの返書、漸く来る。子供っぽい 傲 慢 と、 ごうまん 要領を得ず。 直ちに、再質問書を送る。こんないざこざは 狡猾な言

ている訳には行かない。 島 民はまだ静かにしている。之が何時迄続くか、私は知らぬ。

だそうだ。之が文明人のやることか? サモア人は概して 慇 懃いんぎん ら。」と云った。一人の威張りくさった白人の酔漢がヘンリに向 白人の不人気は日毎に昂まるようだ。穏和な、我がヘンリ・シメ い山刀を振上げて、「貴様の首をぶった切るぞ」と嚇しつけたのい山刀を振上げて、「貴様の首をぶった切るぞ」と嚇じ レも今日、「浜(アピア)の白人は厭だ。むやみに威張ってるか

て)彼等自身の名誉観を有っており、そして、少くともダイナマ (常に上品とはいえないにしても)穏和で、 (盗癖を別とし

イト長官ぐらいには開化している。

スクリブナー誌連載中の「難破船引揚業者」第二十三章書上げ。

十一月××日

光が点々と地上一面に散り敷かれていて美しい。 封書、 東奔西走、すっかり政治屋に成り果てた。喜劇? 暗夜の急ぎ路。この島の森の中を暗夜に通ると、 種の菌類が 秘密会、 青白い

発光するのだという。

長官への質問書が署名人の一人に拒まる。その家へ出掛けて行

成

って説得、 昨日、 ラウペパ王を訪問す。 成功。 俺の神経も、 低い、 何と鈍く、 惨めな家。 頑強になったものだ! 殆ど竣工の 地方の寒村にだ

って此の位の家は幾らでもある。丁度向い側に、

った政務長官官邸が聳え、王は日毎に此の建物を仰いでおらね。そび

ばならぬ。 まぬようだ。乏しい会談。しかし、この老人のサモア語の発音― 彼は白人官吏への気兼から、 我々に会うことを余り望

十一月××日 殊に、 その重母音の発音は美しい。 非常に。

史を書くことのむずかしさ。殊に、 難破船引揚業者」漸く完成。「サモア史脚註」も進行中。 登場人物が悉く自己の知人なことごと 現代

も税を納めない。

る時、その困難は倍加す。

が出る。 先日のラウペパ王訪問は、 何人も領事の許可なくして、又、 果然、 大騒を惹起す。 許されたる通訳者なし 新しい布告

斯くて余は公然独逸帝国に対する敵となり終れるものの如し。ガ 長官より会談の申込あり。 懐柔せんとなるべし。 断る。 には、

王と会見すべからず、

と。

聖なる 傀 儡

何時もうちに遊びに来ていた独逸士官達も、 出帆に際し挨拶に来

られぬ旨を言いよこした。

刺戟して、 政府が街の白人達に不人気なのは面白い。徒らに島民の感情を政府が街の白人達に不人気なのは面白い。いたず 白人の生命財産を危険に曝すからだ。 白人は土人より

84 農場では七十人の人夫が一時に斃れたと。 インフルエンザ 猖 街のダンス場も閉じた。ヴァイレレ

十二月××日

つきり。 昨日の正午から昨日の夕刻迄うち中総出で、この植付にかかり 一昨日の午前、ココアの種子千五百、 みんな泥まみれになり、ヴェランダは 愛 蘭 土アイルランド 続いて午後に七百、届く。

が 如し。 粘土塊をふるって土を籠に入れる。オースティン少年と下婢のフゕュ れヴェランダへ運ぶ。ロイドとベル(イソベル)と私とが、石や 裏の森の小舎で此の籠を編む。 ココアは始めココア樹の葉で編んだ籠に蒔く。十人の土人の土人 四人の少年が土を掘って箱に入 泥炭沼の

品ではない。 近いので、 もなければ無意味だ。 の如くに疲れて了った。今朝もまだ疲れが抜けないが、 ァアウマとが其の籠をファニイの所へ持って行く。ファニイが一 つの籠に一つの種子を埋め、それをヴェランダに並べる。一同綿 急いで「サモア史脚註」第五章を書上げる。 唯、急いで書上げて急いで読んで貰うべきもの。 郵船日も 之は芸術

政務長官辞任の噂あり。 あてにはならぬ。領事連との衝突が此

の噂を生んだのだろう。

八九二年一月×日

醎 暴風の気味あり。 戸をしめランプを点ける。 感冒が中々抜

光と風と夢 86 けぬ。 ン家の歴史を書始めた。大変楽しい。曾祖父と、 らゆるイズムの中で最悪なのは、 此 の間から休養をとる意味で、 リュウマチも起って来た。 或る老人の言葉を思出す。 曾祖父の頃からのスティヴンス リュウマティズムだ。」 祖父と、其の三

あ

今更ながら私は誇に充たされる。 題は何としよう? 「スティヴ

北スコットランドの海に灯台を築き続けた其の貴い姿を思う時、

人の息子(私の父をも含めて)とが、相次いで、

黙々と、

霧深き

家」「北方の灯台」「家族史」「灯台技師の家」? ンスン家の人々」「スコットランド人の家」「エンジニーアの一 祖父が、凡そ想像に絶する困難と闘ってベル・ロック暗礁岬のまょ

灯台を建てた時の詳しい記録が残っている。それを読んでいる中

海鳥 を灼かれるような気がした。 時だけ姿を見せる・此の魔の岬と、 く、今から八十五年前北海の風波や海霧に苦しみながら、干潮の ドとは丁度地球の反対側なのだ。 ランド、バラヘッド、カークウォール、ラス岬、 ヒースの茂み。 かのような気がして来る。自分は自分が思っている程自分ではな 私 確かにそう思えて来る。風の激しさ。水の冷たさ。艀の揺れ。 の今いる所は、 の叫。そういうもの迄がありありと感じられるのだ。突然胸 何だか自分が(或いは未生の我が)本当にそんな経験をした 湖。 朝夕聞慣れたエディンバラ城の喇叭。 南緯十三度、西経百七十一度。 たるスコットランドの山々、 実際に戦ったことがあるのだ、 鳴ぁ 河^走 呼あ ! スコットラン

+

朝夕の霧の中から浮び上る丘々や、その上に 屹 然として聳える朝夕の霧の中から浮び上る丘々や、その上に 屹っぜん 古城郭から、 スンは、一万哩彼方のエディンバラの美しい街を憶い出していた。 「灯台技師の家」 遥か聖ジャイルス教会の鐘楼へかけての崎嶇たるシ の材料をいじっている中に、何時かスティヴン

暁毎に何時も烈しい咳の発作に襲われて、寐ていられなかった。 幼 い頃からひどく気管の弱かった少年スティヴンスンは、冬の

ルウェットが、ありありと眼の前に浮かんで来た。

まだ夜のままで、所々に街灯がぼうっと滲んで見える。やがて車 黙って、 に残る最初の此の都の印象だった。 い息を吐き吐き通って行く。………之がスティヴンスンの記憶 の軋る音がし、窓の前をすれすれに、 に腰掛ける。カミイも少年と並んで掛け、咳の静まる迄、互いに じっと外を見ている。硝子戸越に見るヘリオット通りは

ガラスど 市場行の野菜車の馬が、白

起上り、

乳母のカミイに扶けられ、毛布にくるまって窓際の椅子

を継いで、有名なベル・ロックの灯台を建設した。ロバァトの三 は北英灯台局の最初の技師長であり、その子ロバァトも亦其の職 ていた。 エディンバラのスティヴンスン家は、 小説家の曾祖父に当るトマス・スミス・スティヴンスン 代々灯台技師として聞え

光と風と夢 90 成者として、当時、灯台光学の泰斗であった。 力して、スケリヴォア、チックンスを始め、幾つかの灯台を築き、 の職を襲った。小説家の父、トマスは、 人の息子、アラン、デイヴィッド、トマス、もそれぞれ次々に此 廻転灯、 彼は其の兄弟と協 総光反射鏡の完

多くの港湾を修理した。

彼は、

有能な実際的科学者で、

忠実な大

英国 定的な考を抱き、ケルト的な 憂 鬱 を以て、絶えず死を思い無常 董と向日葵との愛好者だった。彼の息子の記す所によれば、っとう ひまわり マス・スティヴンスンは、常に、 教のキケロといわれるラクタンティウスの愛読者で、 の技術官で、 敬 虔 なスコットランド教会の信徒で、 自己の価値に就いて甚だしく否 か の 基*

を観じていたという。

たが、夜になると一変して 賭 博 者 となり、 悪した。プレスビテリアンの中心たる此の都が、彼には悉く偽善 した。 は考えた。彼は、通い慣れた教会の代りに、下町の酒場へ通い出 こそエディンバラ上流人士の象徴だと、二十歳のスティヴンスン って活躍した。大分久しい後に漸く顕れて処刑されたが、この男。ようやあらわ ブロディなる男がいた。 の府と見えたのである。十八世紀の後半、此の都にディーコン・ 高貴な古都と、 青年期のロバァト・ルゥイス・スティヴンスンは激しく嫌 息子の文学者志望宣言(父は初め息子をもエンジニーアに 其処に住む宗教的な人々(彼の家族をも含めて) 昼間は指物師をやり市会議員を勤めてい きょうあく 悪 な強盗とな

仕立てようと考えていたのだが)は、どうにか之を認め得た父親

光と風と夢 92 息 も、 0) の淵に陥っていることを悟れない程、 救の言葉を受付けようとしない程、 子 の憤激の中に、 その背教だけは許せなかった。 親子の衝突が屡々繰返された。 父親の絶望と、 成人になっている息子を見 未だ子供であり、 母親の涙と、 自分が破滅 しかも父

て、 な形となって顕れた。 父親は絶望した。 此の絶望は、余りに内省的な彼の上に奇妙 幾回かの争の後、 彼は独り跪き、 彼は最早息子を責めよう

とせず、 つ神に詫びた。息子の方では、科学者たる父が何故こんな愚かし 己の至らざる故に倅を神の罪人としたことを自ら激しく責め、 所行を演ずるのか、どうしても理解できなかった。 ひたすらに我が身を責めた。 泣いて祈り、 且.

それに、 彼は、父と争論したあとでは何時も、 「どうして親の

こん

光と風と夢 94 迄が、 だ自分に残っており、(ということは、 供っぽいヒステリックな拗ねたものとなり、 リディキュラス なものになっているのだ。父に対する甘えが未 自分が未だ本当に成人で 議論の内容そのもの

なく)それが、「父が自分をまだ子供と視ていること」と相俟っ の姿を現すのだろうか? 対置されて其の 末 元来くだらない未熟な借物であって、それが、父の素朴な信仰と て、こうした結果を齎すのだろうか? それとも、自分の思想が · 末梢的 な装飾部分を剥去られる時、 其の頃スティヴンスンは、父と衝突し その本当

たあとで、何時も決って、この不快な疑問を有たねばならなかっ

ボーン夫人であることが第一の難点だったのである。 我 儘 なーかがまま を差しのべた。ファニイは米国から未見の舅に自分の写真を送り、 の昼食にも事欠きながら病と闘っていることを 人 伝 に聞いたト なった。一年の後、何千哩隔てた海と陸の彼方で、息子が五十仙 マス・スティヴンスン氏は、流石に堪えられなくなって、救の手 子供迄養う決心をして、英国を飛出した。父子の間は音信不通と 人息子は、 とよりも、実際はどうあろうと兎に角彼女が戸籍の上で現在オス とっては、ファニィが米国人であり、子持であり、年上であるこ 子の間は再び嶮しいものとなった。トマス・スティヴンスン氏に スティヴンスンがファニイと結婚する意志を明かにした時、父 年歯三十にして初めて自活――それもファニイとそのとし

書添えて言った。 「実物よりもずっと良く撮れております故、

光と風と夢 して此の通りとお思い下さいませぬよう。」 スティヴンスンは妻と義子とを連れて英国に帰って来た。 意外

元来、 通俗的な意味で安心の出来ない所があるのを感じていた。 彼は倅の才能は明らかに認めながらも、 何処か倅の中に、 此の不

なことに、トマス・スティヴンスン氏は倅の妻に大変満足した。

ファニイによって、(初めは反対した結婚ではあったが)息子の 倅が幾ら年齢を加えても決して消えなかった。それが、今、

花のような精神を支えるべき、生気に充ちた 強善靱 な支柱を。 為に実務的な確実な支柱を得たような気がした。美しく・脆い・

連日、 棋である。その中に疲れて来ると、スティヴンスンが盤の縁を叩 ヴンスンの身体は例によって悪かった。或日エドモンド・ゴスが しゃべってはいけない」と医者に禁じられているので、無言の将 の上に起上って待っている。将棋をするのだ。「病人は午前中は、 食を済ますと、二階の病室に上って行く。スティヴンスンは寝床 年は、父のスティヴンスン氏とも良く話が合った。毎朝ゴスは朝 訪ねて来た。スティヴンスンより一つ年上の・この博識温厚な青 い起すことが出来る。それは、アバディーン地方特有の東北風が 山荘に過した一八八一年の夏を、スティヴンスンは今でも快く思 い不和の後、一家 雨と雹とを伴って 吹 荒 む 沈 鬱 な八月であった。 —両親、 妻、ロイドと揃ってブレイマの

光と風と夢 98 る。 画いていた或る地図から思いついた海賊冒険譚を、 位置を巧く、しつらえる。ディナーの時間迄ステイヴンスンは独 いた。ディナーの時になると、ステイヴンスンは階下に下りて来いた。ディナーの時になると、ステイヴンスンは階下に下りて来 りで寐たまま、休んでは書き、書いては休みする。 いて合図する。すると、ゴスなり、ファニイなりが彼を寐かせ、 何時でも書きたい時に寐たなりで書けるように、 ロイド少年の 彼は書続けて 布団の

れる。 外では雨風の音が烈しく、隙間風に 燭「台 の灯がちらちらと揺 なると、 午前中の禁が解かれているので、今度は 饒 舌じょうぜつ 一同は思い思いの姿勢で、 彼は其の日書溜めた分を、 熱心に聞きとれている。 みんなに読んで聞かせる。 舌である。 読終る 夜

と、てんでに色々な註文や批評を持出す。一晩毎に興味を増して

かな俊才の蝕まれた肉体は、果して何時迄もつだろうか? 今幸がな俊才の蝕まれた肉体は、果して何時迄もつだろうか? 今幸 暗然たる気持で此の幸福そうな 団 欒 を眺めていた。「此の華や で済むだろうか。」と。 福そうに見える此の父親は、一人息子に先立たれる不幸を見ない 持とう」と言出した。ゴスはゴスで、又、別の事を考えながら、 来て、父親までが、「ビリィ・ボーンズの箱の中の品目作製を受

だ。息子が最後に英国を離れる三月前に、彼はエディンバラで死 しかし、トマス・スティヴンスン氏は其の不幸を見ないで済ん

んだ。

Ī

八九二年四月×日

訪ねて来た。アピア市の巡査ではない。 所 謂 叛乱者側(マター だ? などと云う。王との会見には領事連の諒解が必要だから、 ファ側の者をアピア政府の官吏は、そう呼ぶ。)の者だ。マリエ いから日時を指定せよと言う。この木曜に会食しようと約束する。 と私がいうと、そんな事は構わぬ、といい、また昼食を共にした 食。老人、今日は中々愛想がいい。何故自分を訪ねて呉れないん 王が帰ると間もなく、巡査の 徽 章 のようなものを佩けた男が 思いがけなくラウペパ王が護衛を連れて訪ねて来た。うちで昼

て来たのだ。私も今ではサモア語が読める。 からずっと歩き通して来たのだという。マターファの手紙を持っ 彼の自重を望んだ先日の私の書簡に対する返辞のようなもの 会い度いから来週の月曜にマリエへ来て呉れという。 (話す方は駄目だが 土語の

める。 先方も驚くだろう。) 承知の旨をたどたどしいサモア語でしたた 聖書を唯一の参考にして(「我誠に汝らに告ぐ」式の手紙だから、 一週間の中に、 王と、 其の対立者とに会う訳だ。

四月×日

実が挙がれば良いと思う。

身体の工合余り良からず。

営に身を投じ、

軍艦に載せられて見知らぬ土地に連れ行かれた時

の話である。

素朴な表現が心を打った。

のラウペパの話は面白かった。 何時もながら、 約束故、 ムリヌウの、 直ぐ向いの政務長官官邸が眼障りでならぬ。 みすぼらしき王宮へ御馳走になりに行く。 五年前悲壮な決意を以て独逸の陣 今日

われた。 いていた。 しく暑い土地で、 「………昼はいけないが、夜だけは甲板に上ってもいいと言 長い航海の後、一つの港に着いた。 其処には浜の真砂のように数多くの黒人がいた。 足首を二人ずつ鉄の鎖で繋がれた囚人等が働 上陸すると、 恐ろ

思議な海岸を見た。

見渡す限り真白な崖が陽に輝いているのだ。

独逸も近いと言われた頃、

……それから又大分船に乗り、

っている硝子屋根の巨きな建物の中を歩いた。それから、 三時間も経つと、それが天に消えて了ったので、 …独逸に上陸してから、中に汽車というものの沢山はい 更に驚いた。

色が眩しく赤々と流れる時刻に、 泊った。 たいに窓とデッキとのある馬車に乗り、 い海を船がゆっくり進んだ。聖書の中で聞いていた紅海だと教 放ばしい好奇心で眺めた。それから、 ………独逸を離れて大分航海してから、 別の軍艦に乗移らせられた。 五百も部屋のある家に 海の上を夕陽の 川の様な狭

の話は、 古い、 美しいサモア語の発音で、ゆっくりゆっくり語られる此 大変面白かった。

光と風と夢 自覚が無いのである。 話好きな、 王は、 私がマターファの名を口に出すことを懼れているらしい。 人の善い老人だ。ただ、 明後日、又、 是非訪ねて呉れという。 現在の自分の位置に就いての マタ

角承知して置く。以後、 同氏の宅で明後日、 通訳は、 王と落合うことに決める。 牧師のホイットミイ氏に頼もう

ファとの会見も迫っているし、身体の工合も良くないが、兎に

四月×日

東の会見の為なり。十時迄待ったが、王は来らず。 早朝馬で街へ下り、八時頃ホイットミイ氏の家へ行く。王と約 使が来て、

は今、

政務長官と用談中にて来られぬとのこと。夜七時頃なら来

は、

まるで成っていない。マターファが長々としゃべるのに、此

の監視を逃れて、こっそりやって来ることさえ、弱気なラウペパ 八時頃迄待ったが、竟に来ない。 無駄骨折って疲労甚だし。長官

られるという。一旦家に戻り、夕刻又ホイットミイ氏の家に来て、

五月×日

午前五時半出発、ファニイ、ベル、

同道。

通訳兼漕手として、

には出来ないのだ。

ぐれず。 料理人のタロロを連れて行く。七時に礁湖を漕出す。 ニイ、ベル、共に余が妻と思われたらしい。タロロは通訳として マリエに着きマターファから大歓迎を受く。 但し、ファ 気分未だす

用談 進 捗

せず。

0) っても 通訳は、 「驚いた」 唯、 「私は大いに驚いた。」としか訳せない。 点張。 余の言葉を先方に伝えることも同然ら 何を言

ファと散歩。余の貧弱なるサモア語の許す範囲で語合った。婦人 カヴァ酒を飲み、 アロウ・ルウトの料理を喰う。食後、マター

連の為に、

家の前で舞踏が行われた。

イから帰る数隻の捕鯨ボートに追越される。 底が方々にぶっつかる。 暮れてから帰途に就く。 繊月光淡し。大分沖へ出た頃、 此のあたり、 礁湖頗る浅く、 灯をつけた・十二丁 サヴァイ ボートの

四十人乗の大型ボート。どの船でも皆漕ぎながら合唱してい

五月××日

泥 溶 溶 み 四方の壁の明けっぱなしの建物だ。 か リエに着いた時は、 午後から、 なり在る。 朝 家 の中は既に暗く、 雨中を馬でアピアへ。今日の通訳サレ・テーラーと待合せ、 馬の頸に達する雑草。 又マリエへ行く。今日は陸路。 高いドーム型の茅屋根をもち、 既に薄暮。マリエの村には相当立派な民家が 椰子殻の灯が中央に灯っていた。やしがら 豚小舎の柵も八ケ所程飛越す。 マターファの家も流石に立派 七哩の間ずっと土砂降。 床に小石を敷いた 四 人の

107

召使が出て来て、

マターファは今、

礼拝堂にいるという。

其の方

角から歌声が洩れて来た。

光と風と夢 正式の挨拶あり。 やがて、 主人がはいって来、 カヴァ酒が出る。 我々が濡れた着物を換えてから、 列座の諸

等は以後ツシタラと親しみ、 マターファが余を紹介する。「アピア政府の反対を冒して、余 (マターファ)を助けんが為に雨中を馳せ来りし人物なれば、 如何なる場合にも之に援助を惜しむ い、 きょう

べからず。」と。

が作られた。 えられなくなった余のために、家の一隅が囲われ、 た護衛兵と、 ディナー、 政談、 五十枚の極上のマットを並べた上で独り眠る。 他に幾人かの夜警が、 歓笑、 カヴァ、 徹宵家の周囲に就いている。 夜半迄続く。 其処にベット 肉体的に堪 武

日没から日の出まで彼等は無交代である。

から響いて来る。 暁方の四時頃、 眼が覚めた。細々と、柔らかに、 快い音色だ。和やかに、甘く、 消入りそうな 笛の音が外の

が為に。 といわれた位、 とになっているのだそうだ。家の中に眠れる者に良き夢を送らん あとで聞くと、此の笛は、 何たる優雅な 贅 沢! 小禽共の声を愛していたそうだが、 毎朝きまって此の時刻に吹かれるこ マターファの父は、「小鳥の王」 其の血が彼に

朝 :食後テーラーと共に馬を走らせて帰途に就く。 乗馬靴が濡れ

も伝わっているのだ。

て穿けないので跣足。 朝は美しく晴れたが、道は依然どろんこ。

光と風と夢 110 と驚い 草のために腰まで濡れる。余り駈けさせたので、テーラーは豚柵 所で二度も馬から投出された。 蟹。 街に入ると、パテ(木の小太鼓)が響き、華やか 黒い沼。

緑のマングロオヴ。

赤

十六の柵を跳び越えて二十哩の騎行(しかも其の前半は豪雨の

な服を着けた土人の娘達が教会へはいって行く。今日は日曜だっ

街で食事を摂ってから、帰宅。

中。 の様にちぢかんでいた曾ての私とは、 六時間の政論。 スケリヴォアで、ビスケットの中の穀象虫 何という相違だろう!

致を見たと思う。 マターファは美しい見事な老人だ。 我々は昨夜、完全な感情の

の芽も充分水を吸っていよう。 聝 醎 聝 前の雨季の不足を補うかのように降続く。ココア 雨の屋根を叩く音が止むと、急流

の水音が聞えて来る。 「サモア史脚註」完成。 勿論、 文学ではないが、公正且つ明確な

アピアでは白人達が納税を拒んだ。政府の会計報告がはっきり

る記録たることを疑わず。

しないからだ。委員会も彼等を召喚する能わず。

た。がっかりして、 朋 輩 の誰彼に一々共謀の疑をかけていたよ 最近、 我が家の巨漢ラファエレが女房のファアウマに逃げられ

111 うだが、今はあきらめて新しい妻を見つけに掛かっている。

光と風と夢 112 破船引揚業者」は余りに低調だった。(尤も、割に良く読まれて、,,,, に専念できる。「 誘 拐 」の続篇だ。何度か書出しては、 中で放棄していたが、今度こそ最後迄続け得る見込がある。「難 「サモア史」の完結で、 愈 々 、「デイヴィッド・バルフォア」いょいょ

デイヴィ青年に対する作者の愛情は、一寸他人には解るまい。 は「マァスタア・オヴ・バラントレエ」以来の作品となり得よう。 いるというから不思議だが)「デイヴィッド・バルフォア」こそ

の吹廻しやら。うちの者と何気ない世間話をして帰って行った。 C ・ J ・ツェダルクランツが訪ねて来た。どうした風

五月××日

六月×日

り大きい・物凄い体躯をもっている。)通訳の混血児サレ・テー の 酋 長 夫人。母と私とベルと、三人を合せたより、もう一周しゅうちょう マターファの 大 饗 宴 に招かれているので、 -母、ベル、タウイロ(うちの料理番の母で、近在の部落 少年二人。 朝早く出発。 同

113 中で動かなくなって了う。仕方がない。跣足になって岸まで歩く。 カヌーとボートとに分乗。途中でボートの方が、 遠浅の礁湖の

光と風と夢 114 約一哩、 る らけになって、 白 め い・縁とりのドレスも、さんざんの目に逢う。 る滑る。 干潟の徒渉。 シドニイから届いたばかりの私の服 やっとマリエに着く。母達のカヌー組は既に着い 上からはかんかん照付けるし、 も、 午 過、 いるすぎ イソベルの 下は泥でぬ 泥だ

だけだった。 ていた。 (といっても、 最早、 たっぷり二時間はかかったが)見ることが出来た 戦闘舞踊は終り、 我々は、食物献納式の途中から

纏 が にとりどりな色彩の服装だ。タパを纏った者、パッチ・ワークをまと った者、 並び、大きな矩形の三方に土人達が部落別に集まっている。 家 の前面の緑地の周囲に、 粉をふった 白 白 檀 を頭につけた者、びゃくだん 椰子の葉や、 荒布で囲われた仮小舎 紫の花弁を頭一 実

115

げて衆に示され、接収役が 鄭 重 な儀礼的誇張を以て、品名とていたよう シタラ・オ・レ・アリイ・オ・マロ・テテレ」(物語作者酋長・ 贈呈者とを呼び上げる。この役人は頑丈な体格の男で、全身に良 て歌を唱いながら贈物を次々に運び入れる。其等は一々高く振上 頭上に振廻しながら、滝の様な汗を流して叫んでいる有様は、 く油が塗り込んであるらしく、てらてら光っている。 人に立てられた 傀 儡 ではない)彼等の心から推服する真の王者 へと贈られた・大小酋長からの献上品だ。役人や人夫が列をなし である。我々の持参したビスケットの缶と共に、「アリイ・ツ 中央の空地には、 食物の山が次第に大きさを増して行く。(白 豚の丸焼を

ダンテにそっくりだ。彼は、

此の島特有の職業的説話者の一人、

大政府の酋長)と紹介される声を私は聞いた。

の葉を頭に載せて坐っている。 我 々の為に特に設けられた席の前に、 少し暗い・けんのある其の横顔は、 一人の老いたる男が、

坐っており、 同僚達が坐っている。 しかも其の最高権威で、 時々彼の唇が動き、 我々の右手、 名をポポという。彼の傍には、息子や、 手頸の数珠玉の揺れるのが見えてくび かなり離れて、 マターファが

る。

とに、 した。こんな不思議な声は、 同はカヴァを飲んだ。王が一口飲んだ時、 ポポ父子がとてつもなく奇妙な 吠 声 を立てて、之を祝福 ***** まだ聞いたことがない。 全く驚かされたこ 狼の吠声の

げては、 あろう。 ポポ父子がマターファの許に来てツイアツアの名を讃えたからで ぐに又消去るのを、 非公認の王の面上に、一瞬、 様だが、 頭」「大海亀三匹」…… された。 た。マターファが喰終ると、 既に食物搬入は済んだ。贈物は順々に注意深く数えられ、 「ツイアツア万歳」の意味だそうだ。やがて食事になっ ふざけた説話者が、 聴衆を笑わせている。 私は見た。ラウペパとの分離以来、 若々しい誇と野心の色が生動し、 品名や数量を一々変な節廻しで呼上 又しても奇怪な吠声が響いた。 「タロ芋六千箇」

始めて、

此の

それから、未だ見たこともない不思議な情景が現れた。 「焼豚三百十九

117

光と風と夢 礼は、 して、 息子は地に蹲まり、 ポポ父子が立上り、 マターファに献上された。 スケットも、 て怪しげな情ないものに変った。 けのものは、 の 踊 大部分の食物は、一度己のものなることを宣した上で、再び |の画く円は次第に大きくなって行った。彼等のとび越えただ 流石にサモア人の間にさえ笑声を呼起した。 奇妙な踊を始めた。 物語作者酋長 の番が来た。ル・アリイ・ツシタラ 生きた一頭の犢も、 彼等の所有になるのだ。 長い棒を手に、 父親は腕を伸ばし棒を廻しながら舞 ポポにとび越えられて了った。 此の古式の(又、 食物の堆く積まれた庭に飛出 中世のダンテが 忽 然とし 地方的な) 私 の贈ったビ

儀

此

彼は踊らなかったが、

五羽

鱶一尾、 鳥の群を見る如し。 を以て、 食物の山の上に屈み込んだかと思うと、忽ち、 着けた数人の若者によって、食物群中から運び出される。 物」である。之等は、合図の下に、ラヴァラヴァを褌ほども短く物」である。之等は、合図の下に、ラヴァラヴァを褌にとし 別の離れた場所へ綺麗に積上げる。その巧みさ! 麦畑にあさる の生きた雞、 命ぜられた品と数量とを拾い上げ、サッと、それを又、 及び大海亀一匹を贈られた。之は「王より大酋長への贈 紫の腰布を着けた壮漢が九十人ばかり現れて、 油入 瓢 箪 四箇、筵四枚、タロ芋百箇、 あやまり無き速さ 焼豚二頭、 我々の前 彼等が

119 に立停った。と思うと、彼等の手から、それぞれ空中高く、 稚 雞 が力一杯投上げられた。百羽に近い雞が羽をばたつかせ 生き

光と風と夢 120 ながら落ちて来ると、それを受取って、又、空へ投げ返す。それ も面白いが、しかし一体何羽の雞が死んだことだろう! られる逞しい銅色の腕、 幾度も繰返される。 腕、 騒音、 腕、 歓声、 雞の悲鳴。 振廻し、 振上げ

良 みんな唱い出す。小山の如く 厖 大 なタウイロ夫人が素晴らしく たボートとカヌーとに分乗。水の上に夜が落ち、 スコール襲来、 い声なので一驚する。その途中、 家の中でマターファと用談を済ませてから、水辺へ下りて行く 既に貰い物の食物は舟に積込まれてあった。 再び家に戻り、 半時間休んでから、 又スコール。母もベルもタウ 乗ろうとすると、 岸の灯が美しい。 五時出発、

イロも私も海亀も豚もタロ芋も鱶も瓢箪も、みんなびしょ濡れ。

弾丸の穴があいている。二つの頭蓋骨を並べた時、

私の親指二本はいる位の

召使達は、一

ボートの底に溜った生ぬるい水に漬りながら、 アピアに着く。ホテル泊まり。 九時近く、やっと

六月××日

うだ。 時の経ったものだ。此の島の成人としては、どうも小さ過ぎるよ 付かなかったのだろう。そこらを掻廻している中に、 みんなを連れて行って見る。成程、 召使達が、 (今度は頭だけ)が見付かった。 藪の・ずうっと奥の・薄暗く湿った辺なので、今迄人目に 裏山の藪の中で骸骨を見付けたと言って騒ぐので、 骸骨には違いないが、大分、 又 別 の 頭^ず

光と風と夢 122 を負うていたので、味方にそれを見せることが出来ず、 っては来たが、空しく敵の首を抱いたまま死んで了ったのだろう 敵の首を取った(サモア戦士の最高の栄誉)のだが、 寸ロマンティックな説明を見付けた。 此の気の毒な勇士は戦場で 自らも重傷 此処迄這

帽子(大きなカラマク人の帽子)、髭、 の横顔をはっきり現していた。 大きな雲を見た。それは、 夕方六時頃、 馬で裏の丘を下りようとした時、 甲 虫 の如き額をした・鼻の長い男かぶとむし 顔の肉に当る部分は絶妙の桃色で、 前面の森の上に

眉毛は青がかった灰色。

のことか?)ラファエレ達が直ぐに骨を埋めにかかった。

と。(とすれば、十五年前の・ラウペパとタラヴォウとの戦の時

中に表情が変った。たしかに片眼を閉じ、顎を引く様子である。 子供じみた此の図柄と、色の鮮明さと、そのスケールの大きさ (全く途方もない大きさ)とが、私を 茫 然とさせた。見ているぼうぜん

私 は他の雲々を見た。はっと思わず息をのむばかりの・壮大な 鉛色の肩が前にせり出して、 顔を消して了った。

の頂きは天頂距離三十度以内にあった。何という崇高さだったろ 明るい・雲の巨柱の林立。それ等の脚は水平線から立上り、其 下の方は氷河の陰翳の如く、上に行くにつれ、暗い藍かいがの方は氷河の陰翳の如く、上に行くにつれ、 インディゴオ

ら曇った乳白に至る迄の微妙な色彩変化のあらゆる段階を見せて 背後の空は、既に迫る夜のために豊かにされ又暗くされた

青一色。その底に動く藍紫色の・なまめかしいばかりに深々とし

され 其の清浄無垢の華やかな荘厳さは、 か な柔かい明るさを以て、 る如何なる高さよりも高い所にある。 世界を明るくしている。 驚異以上である。 下界の夜から眺める それは、 想像

に、 鳥共の疳高い夕べの合唱。 雲に近く、 月と殆ど同じ明るさに光る星を見た。 細い上弦の月が上っている。 黒み行く下界の森では、 月の西の尖りの直ぐ

八時頃見たら、 月は先刻より大分明るく、 星は今度は月の下に

廻っていた。 明るさは依然同じくらい。

七月××日

「デイヴィッド・バルフォア」漸く快調。

キューラソー号入港、

艦長ギブソン氏と会食。

英国領事がダウニング街に訓令を請いたる由。余の存在は島内の 巷間の噂によれば、 こうかん R・L・S・は本島より追放さるべしと。

治安に害ありとや? 余も亦偉大なる政治的人物にあらずや。

八月××日

昨日又、マターファの招により、マリエに赴く。 通訳はヘンリ

(シメレ)。会談中マターファが私をアフィオガと呼んで、ヘン

リを仰天させた。今迄私はススガ(閣下に当ろうか?)と呼ばれ ていたのだが、アフィオガは王族の称呼である。マターファの家

形 文字的典礼。老人の 白 髯 を集めて作った兜の飾り毛を風にた にカヴァ酒を灌ぐのだ。此の島に於てさえ半ば忘れられた 楔 くさびが 今朝、 朝食後、 大 灌 奠 式 を見る。 王位を象徴する古い石塊ローヤル・カヴァ

靡がせ、 獣歯の 頸 掛 をつけた・身長六呎五吋の筋骨隆々たる赤 マズかけ

銅色の戦士達の正装姿は、全く圧倒的である。

九月×日

アピア市婦人会主催の舞踏会に出席。ファニイ、ベル、ロイド、

同行。 威厳を失墜すること夥し。 なってカドリルを踊る。珍妙にして恐るべきカドリルよ! つつ、手を組み足を蹴上げて跳ね廻る時、大法官も大作家も共に、 それぞれ、 アド曰く、 月前不得要領な訪問を受けて以来の対面なり。小憩後、 及びハガァド(例のライダア・ハガァドの弟。快男児なり、)も 一会半ばにして 裁 判 所 長 ツェダルクランツ現る。 厖 大 にして尊敬すべき二人の婦人に抱きかかえられぼうだい 「奔馬の跳躍にさも似たり」と。我等二人の公敵が、 彼と組に 数ケ

週間前、チーフ・ジャスティスは混血児の通訳をそそのかし

朝も、 私に不利な証拠を掴ませようとあせっていたし、私は私で今 此の男を猛烈に攻撃した第七回目の公開状をタイムズへ書

128

ていた。

我 人々は、 今微笑を交しつつ、 奔馬の跳躍に余念がない!

九月××日

たりして了った。 て来た労作のようなものは、まさか、ノルウェーでは出来まいに。 じられない。この一年間、 「温帯人を傷める」性質に就いての説明を聞かされる。どうも信 「デイヴィッド・バルフォア」漸く仕上。と同時に、 医者に診て貰うと、決って、 煩わしい政治騒ぎの中で持続的にやっ 此の熱帯の気候の 作者もぐっ

オア」に就いては、

大体満足。

兎に角、

身体は疲労の極に達している。「デイヴィッド・バルフ

「眼を輝かして帰って来た。マライタ部落の少年等と決闘、三・ 日の午後街へ使にやったアリック少年が、昨夜遅く 繃 帯 をほの午後街へ使にやったアリック少年が、昨夜遅く 繃 帯 を

四人を傷つけて来たと。今朝、

彼はうち中の英雄になっていた。

から来た当座は、うちの食事が旨いとて無闇に食過ぎ、腹が凄くから来た当座は、うちの食事が言いとて無闇に食過ぎ、腹が凄く 彼は一本糸の 胡 弓 を作り、自ら勝利の唄を奏で、 興奮している時の彼は中々美少年である。ニュウ・ヘブリディス 且つ踊った。

ふくらんで了って苦しんだことがあったが。

十月×日

朝来、 我が精神は所有者未定の状態にあり。 胃痛劇し。阿片丁幾十五滴服用。この二三日は仕事をせば、 あへんチンキ

光と風と夢 何も、 が 想も文体も、今では最も厭わしいものになって了った。 ばかりではいられない。「ヴァージニバス・ピュエリスク」の思 私は最早何事にも希望を抱かぬ。 の誰もが、 曾て私は華やかな青年だったらしい。というのは其の頃、かっ たようだったから。しかし、人は何時迄もエァリエルやパック 何時も溺れることを確信して行くのと同様に。ということは、 ル 落着いた絶望を以て這入って行く。 自暴自棄になっているのではない。 私の作品よりも私の性格と談話との 絢 爛 さを買って 死蛙の如くに。 変も、 それ所か、 海へ行く場合、 私は、凡ての事 私は、 実際イエ 死ぬ 友人

私

信がある。 生を支えて行くに足るもの――信念に幾いものだ。快楽も要らぬ。 さえある。それは、意識せる・勇気ある・楽しさを以て、以後の **迄快活さを失わぬであろう。此の確信ある絶望は、一種の愉悦で** インスピレーションも要らぬ。 蟻の心構を以て、 蝉の唄を歌い続け得る自信が。 義務感だけで充分やって行ける自

頭上にリボンは 翩 翻と靡く。私は太鼓をとどろと鳴らす私は太鼓をとどろと鳴らする。 街頭に

新しい戦士を求めて

生きる希望と、死ぬ勇気とを。 わが伴侶に私は約束する 私は太鼓をとどろと鳴らす

Ŧ

なると、 ら生じたものか、 家となるべく生れついている、という信念は、 満 十五歳以後、 既に、 それ以外の職業に従っている将来の自分を想像 自分でも解らなかったが、 書くことが彼の生活の中心であった。自分は作 兎に角十五六歳頃に 何時、 又 何処か

ち、 ウンの一 の読んだ書物の中で「適切な表現」と思われたものが悉く書抜い に脱した頃、 はハズリットの、 つの文章を読むと、それと同じ主題を種々違った作家の―― てあった。 其の場で文字に換えて見ることを練習した。其のノートには又彼 少年時代の数年に亘って倦まずに繰返された。 路上で見るもの、 の頃から、 -文体で以て幾通りにも作り直してみた。 諸家のスタイルを習得する稽古も熱心に行われた。 未だ一つの小説をも、ものしない前に、 彼は外出の時いつも一冊のノートをポケットに持 或いはラスキンの、 聞くもの、考えついたことの凡てを、 或いはサア・トマス・ブラ 少年期を纔かれず こうした習練 彼は、 一或い 直

133

の名人が将棋に於て有つような自信を、

表現術の上に有っていた。

光と風と夢 エンジニーアの血を享けた彼は自己の途に於ても技術家としての

誇を早くから抱いていた。

ても、 スをとらせているのであること。」「我々の中にある我々の は間違わないものであること。仮令一見して間違ったように見え こと」を知っていた。それから「頭は間違うことがあっても、 彼は殆ど本能的に「自分は自分が思っている程、 結局は、 それが真の自己にとって最も忠実且つ賢明なコー 自分ではない 知ら Ш.

り賢いものの導いて呉れる其の唯一の途を、

最も忠実、

勤勉に歩

我々よ

自らの生活の設計に際しては、其の唯一の道

我々以上に賢いのだということ」を知っていた。そ

ないものは、

0) った。 に於てのみは、終始一貫、修道僧の如き 敬 虔 な精進を怠らなか から死の瞬間に至るまで続けた。 俗衆の 嘲 罵 や父母の悲嘆をよそに彼は此の生き方を、 った時、 せることは出来なかった。 むことにのみ全力を払い、他の一切は之を棄てて顧みなかった。 肉体をさいなんだ肺結核、 は最早肉体的な習慣の一部だった。 「鼻持のならぬ気取りや」の彼が、この書くという一筋の道 「好色漢」で、「自惚や」で、「好色漢」で、「自惚や」で、 彼は殆ど一日としてものを書かずには過ごせなかった。そ 彼は、 眼に繃帯を当て、 肺炎と坐骨神経痛と風眼とが同時に起 神経痛、 「うすっぺら」で、 絶対安静の仰臥のまま、 胃痛も、 絶間なく二十年に亘って彼 「がりがりの利己主義者」 此の習慣を改めさ 「不誠実」 少年時代

光と風と夢 136 き声で「ダイナマイト党員」を口述して妻に筆記させた。 死に対する覚悟に就いてだけは、この未熟で気障な青年も、大悟 る 手 巾 の中に紅いものを見出さないことは稀だったのである。 彼は、 死と余りに近い所に常に住んでいた。咳込んだ口を抑え

徹底した高僧と似通ったものを有っていた。平生、

彼は自分の墓

に行かむ」 碑銘とすべき詩句をポケットにしのばせていた。 静かに我を眠らしめ。 云々。彼は、 自分の死よりも、友人の死の方を、寧 楽しく生きし我なれば、 「星影繁き空の 楽しく今は死

ろ恐れた。自らの死に就いては、 彼は之に馴れた。というよりも、

死の冷たい手が彼をとらえる前に、どれだけの美しい「空想と言 一歩進んで、死と戯れ、死と賭をするような気持を有っていた。 運命を辿ったのだが)が、彼の寿命の短いであろうことを知って、 ティヴンスンの守護天使(その導きによって彼が、作家たる彼のティヴンスンのジュニアス 読者は、 家さ。」と、多くの人がそう言う。しかし、スティヴンスンの愛 の如き。 葉との織物」を織成すことが出来るか? 之は大変 豪 奢 な賭の 要するに、深味のないお話だ。スティヴンスンなんて結局通俗作 ン・ジャネット」の如き、「マァスタア・オヴ・バラントレエ」 ように思われた。出発時間の迫った旅人の様な気持に追立てられ 「空想と言葉との織物」を残した。「オララ」の如き、 彼はひたすらに書いた。そうして、実際、 「成程、其等の作品は美しく、魅力に富んではいるが、 決して、それに答える言葉に窮しはしない。「賢明なス 幾つかの美しい 「スロオ

光と風と夢 みな話法との習練に(之ならば仮令早世しても、少くとも幾つか の代りに、 可能であろう所の・)人間性 剔 抉 の近代小説道を捨てさせ、そ (何人にとっても四十歳以前に其の傑作を生むことが恐らくは不 此の上なく魅力に富んだ怪奇な物語の構成と、その巧

夏の間に大急ぎで花を咲かせ実を結ばせる・あの自然の巧みな案 之こそ、一年の大部分が冬である北国の植物にも、 の良き美しきものは残せよう)向わせたのである」と。「そして、 の一つなのだ」と。人、或いは云うであろう。 極く短い春と ロシア及びフ

ヴンスンと同年、或いは、より若く死んでいるではないか、と。 ランスのそれぞれ最も卓れた最も深い短篇作家も、 しかし彼等は、スティヴンスンがそうであった様に、 共に、スティ 絶えざる病

ある。 気は、 迄成功したかに見える。) 従って其の主人公たる自己の住む雰囲 せぬとに拘わらず)自分の一生を以て、自己の作品中最大のロマ 苦によって短命の予覚に脅され通しではなかったのである。 写の大家たる彼は、実生活に於て自分の行動する場面場面が、 ロマンス的効果に富んだものでなければならなかった。 ンスたらしめようとしていた。(そして、実際、それは或る程度 小 説とは circumstance の詩だと、彼は言った。ロマンス 彼の霊妙な描写の筆に値する程のものでなければ我慢がなら それに依って生ずる幾つかの場面の効果を、 常に、彼の小説に於ける要求と同じく、 ロマンス作家を以て任じていた彼は、(自ら意識すると、 詩をもったもの、 彼は喜んだので 事 件より 雰囲気描

光と風と夢 飾をつけ、 無用 をする必要があるか? な 士の爪弾き者だった。 スンは、 う婦人論を弁じなければ気が済まぬのか? った調子で「人形は美しい玩具だが、 かったのである。 かねばならぬか? 何 0) 気取 1の為に酔狂にも驢馬なんか連れて、 気障のか (或いはダンディズム)の正体は、 長い赤リボンのついた古帽子をかぶって放浪者気取 たまり、 傍人の眼に苦々しく映ったに違いない・彼の 厳しい宗教的雰囲気の中に育てられた白面 何だって又、 何 厭味な無頼漢、 の為に、良家の息子が、 中味は 歯の浮くような・やにさが 南仏蘭西の山の中をう ・ 鋸がくず エディンバラ上流人 二十歳のスティヴン 半夜、父の邸を抜やしき 正 しく此処に だ」などとい よれよれの襟 あっ

病弱

の坊ちゃんが、急に、

自らの純潔を恥じ、

空迄届いているのを、彼は見た。 ヴァを気取る此の軽薄児も、しかし、唯一筋の道を選んで、之に け出して紅灯の巷をさまよい歩いた。ヴィヨンを気取り、カサノ いことを、 己の弱い身体と、 常に 耿 々 と、ヤコブの砂漠で夢見た光の梯子の様に高く星 こうこう 良く知っていた。緑酒と脂粉の席の間からも、 、短いであろう生命とを賭ける以外に、 救いのな 其の道

郵船日とてベルとロイドとが昨日から街へ行って了ったあと、

八九二年十一月××日

光と風と夢 142 療法では駄目らしい。夕食後騎馬で医者の所へ行く。 に黄斑が出来始めた。 て夫の許に戻って来た。 イオプは脚が痛くなり、)は肩に腫物が出来、 ファアウマのは丹毒の懼があるから素 ファアウマ(巨漢の妻は再びケロリとし ファニイは皮膚 朧 月 夜 。

飲み、 無風 点 々と光る。 独逸文学を談ず。 山の方で雷鳴。 医者の所で明日の来診を頼んだ後、 森の中を急ぐと、 例の茸の蒼い灯が地上に 九時迄ビールを

場 所はラムマムーアのハーミストン附近及びエディンバラ。 昨日から新しい作品の構想を立て始める。 「ブラックスフィールド」? 「ウィア・オヴ・ハーミス 時代は一八一二年頃。 題は

十二月××日

増築完成。

本年度の year bill が廻って来る。 約四千磅。今年はどうやら収ポンド

支償えるかも知れぬ。

逮捕護送されることになっているらしい。 夜、 砲声を聞く。英艦入港せりと。街の噂では、 私が近い中に

カッスル社から「壜の悪魔」と「ファレサの浜辺」とを合せ、

違い過ぎて、おかしくはないか? 「島の夜話」として出そうと言って来る。此の二つは余りに味が 「声の島」と「放浪の女」と

143 を加えてはどうかと思う。

放浪の女」を入れることには、ファニイが不服だという。

一八九三年一月×日

「デイヴィッド・バルフォア」の校正刷、 引続いて微熱去らず。 胃弱も酷い。 未だに送って来ない。

どうした訳か? もう少くとも半分は出ていなければならない筈。

天候はひどく悪い。雨。飛沫。霧。寒さ。

ないのに。ロイドと毎月頭を絞るのだが、一つ穴を埋めれば、外 ちは斯んなに金がかかるのか? 払えると思っていた増築費、半分しか払えない。どうして、う 格別 贅 沢 をしているとも思えぜいたく

に無理が出来てくる。やっと巧く行きそうな月には、決って英国

145 が、之は仕方がない。私は族長だ、ヴァイリマ部落の 酋 長 な だろうと。明らかに中傷の目的で言ったには違いないが、冗談も うちの女中達が島民の標準よりは幾らか顔立が良いとかで、ヴァ それに実際、土人が何程いても其の食費は知れたものなのだから。 な数は判らない。(それでも百人を多くは越さないだろう。)だ イリマをサルタンの後宮に比べた莫迦がいる。だから金がかかる 大酋長は、そんな小さな事にかれこれ云うべきではない。

光と風と夢 146 誕生日に百人以上の客を招ぶのは 贅 沢 だという人もある。 良い加減にするがいい。このサルタンは精力絶倫どころか、辛う 聖パオロになったり、カリグラになったりするかも知れぬ。 ハルン・アル・ラシッドにしたり、色んな事をいう奴等だ。今に、 じて生きながらえている ・ 痩 男 男 だ。ドン・キホーテに比べたり、

そんなに沢山の客を招んだ覚えはない。向うで勝手に来るのだ。

私は、

私に、 呉れる以上、之も仕方が無いではないか。 (或いは、少くとも私のうちの食事に)好意をもって来て 祝宴等の際に土人をも

に入れて、尚、 ても彼等を招んでやり度い位だ。其等凡ての費用を初めから計算 招ぶからいけない、などと言うに至っては言語道断。白人を断っ 結構やって行ける積りだったのだ。何しろ斯んな

ら、大した事はなかろう。

った。 は昨年中に四千磅以上は書捲くった。それでなお足りないのだ。 なかった・晩年のスコットを。彼には、 サー・ウォルター・スコットを思う。突然破産し・次いで妻を失 ・絶えず債鬼に責められて機械的に駄作を書き飛ばさねばなら 墓場のほかに休息は無か

島のこととて、贅沢はしようにも出来ないのだから。

兎に角、

私

そうでいて燃えず、 度も、 又も戦争の噂。 ツツイラの西部で酋長等の間に小競合があったばかりだか 実に煮え切らないポリネシア的な紛争だ。 消えかかっていて、猶、くすぶっている。今 燃え

と罗 1

一 月 × 日

な喀血まで伴って。 インフルエンザ流行。 うち中殆どやられる。 私の場合には余計

いた。 毎晩敢然と汚物のバケツを提げては蚊帳をくぐって捨てに行って く賤しい者でも汚物を運ぶことを嫌うのに、小酋長たるヘンリがいや 熱を出している。近頃彼のことを戯れにデイヴィ(バルフォア) ヘンリ(シメレ)が実に良く働いて呉れる。元来サモア人は極 みんなが大抵快くなった今、最後に彼に感染したらしく、

病中、 又新しい作品を始めた。ベルに書取らせる。 英国に捕虜

と呼ぶことにしている。

ヴス」にも、両方に必要だから。図書館の無いこと。本屋との交 られる煩わしさの無いのは良いが。 渉に手間どること。此の二つには全く閉口する。記者に追いかけ 代の仏蘭西及びスコットランドの風俗習慣、殊に監獄状態に就い と題しようと思う。ローランドソンの「文章法」と、一八一〇年 ド・サント・イーヴ。それを英語読みにして「セント・アイヴス」 んでやる。「ウィア・オヴ・ハーミストン」にも「セント・アイ ての参考書を送って呉れるよう、バクスタアとコルヴィンとに頼 政務長官も、 裁判所長も辞職説を伝えられながら、アピチーフ・ジャスティス

となった一仏蘭西貴族の経験を書くのだ。主人公の名がアンヌ・

不安、 政治的な事に立入るのは煩わしい。 この島の経済的疲弊は加わる一方である。 此の方面に於ける成功は、

成功するにしても、しないにしても、白人の不人気、人心の

ることがあるのだ。しかし、 るので、 長く 病 臥 し喀血などすると、自然、 …私の政治的関心(この島に於ける) 、格毀損以外の如何なる結果をも齎さない、 此の上にも貴重な時間をとる政治問題が少々うるさくな 気の毒なマターファのことを考える 創作に割く時間が制限され が減った訳ではない。 とさえ思う。

じっとしていられないような気がする。

精神的援助しか与え

か? 的な同情を。 的な同情をマターファに注いでいるに過ぎないのか? れとも、 すれば、一体どうしてやり度いのだ? マターファを王にする? ることの出来ぬ腑甲斐なさ! だが、お前に政治的権力があると 宜しい。そうなればサモアは立派に存続できると思っているの 哀れな文学者よ。お前は本当にそう信じているのか? 近い将来に於けるサモアの衰亡を予想しながら、唯感傷 最も白人

る。ブラックス・アンド・チョコレーツに対する関心が私の制作 黒色人及び褐色人」のことを書き過ぎる、と言って来ていブラックス・アンド・チョコレーツ コルヴィンからの手紙の中に、私の書信が余りに何時も「君の

151 時間を奪い過ぎては困るという・彼の気持は解らぬことはない。

光と風と夢 152 の一般に就いても、 ているかが本当には解っていないのだ。 クス・アンド・チョコレーツに対して如何に親身な気持を有っ かし結局、 彼 (並びに他の在英の友人達) には、 四年間も会わないで全然違った環境に身を置 この事ばかりでなく、 私が私のブラ

他

案外、 ないか? 良くないことだ。 は 々は何たる怪物であるか! ないか? ている中に、 双方ともあじきなく此の溝を意識しなければならぬ 恐ろしいが、之は本当かも知れぬ。 此の考は恐ろし 彼等と私との間に、 泣き度い程会いたく思いながら、 親しい者が長く離れているのは 越え難い溝が出来ているので 人は変る。 会った途端に、 刻々に。 のでは

二月××日 シドニイにて

それでも当市では、プレスビテリアン教会総会と芸術倶楽部と、 りを歩けば、人々が振返って私を指さし私の名をささやく。名声 都合二回講演をした。写真を撮られ、 シドニイへ遊びに来たのだが、同行のイソベルは歯痛、ファニイ は感冒、 自分で自分に休暇を与え、五週間位の予定でオークランドから 変なものだ。曾て自分がそれに成上ることを卑しんだ名士に、 自分は感冒から肋膜炎。何のために来たのだか解らぬ。 像 牌を作られ、街の通メダリョン

何時 政策上の敵か味方か、いずれかだ。その方が遥かに健全な状態だ。 の眼からは、大邸宅に住む白人酋長。アピアの白人連にとっては、 しか成上っているのか? 滑稽な話だ。サモアでは、土人こっけい

光と風と夢 154 輝かしさ! 此の温帯地の・色彩の褪せた幽霊然たる風景と比べる時、 アイリマの森の、 何という美しさ! 我が・風吹く家の、 我がヴ 何たる

彼が人間であることを――マオリ族に最も博大な人間愛を注いだ ジ・グレイに会った。政治家嫌いの私が彼に面会を求めたのは、 てやった。 知っている。 人だった。彼は実に良く土人を――その微妙な生活感情に至る迄、 人間であることを信じたからだ。 此 の地に隠退している、ニュージーランドの父、サー・ジョー 植民地総督として全く異例のことだ。彼は、マオリ人 彼は真にマオリ人の身になって、彼等のことを考え 会って見ると、 果して立派な老

に英人と同等の政治上の権力を与え、土人代議士の選出を認めた。

なる場合にも絶望が無用であることを真に悟る迄長生した少数者 民地になっているのだ。 そのため白人移民に欣ばれず、職を辞したのである。しかし、 して、尚、 の一人なのだ。」と。自分も大分元気になった。俗悪を知り尽く して呉れた。曰く、「決して絶望するものではない。 も尽くそうとしていること等を語った。老人は一々共鳴し、 でないとするも兎に角、土人の将来の生活、その幸福の為に今後 ようと欲したこと、其の政治的自由に就いては自分の力の及ぶ所 の斯うした努力のお蔭で、ニュージーランドは今最も理想的な植 高きものを失わない人間は、貴ばれねばならぬ。 私は彼に、サモアで自分のしたこと、 私は、 激励 如何 彼

光と風と夢 156 うな色に見える。 緑色と違って、 木の葉一枚をとって見ても、サモアの脂ぎった盛上るような強 此処のは、まるで生気のない・薄れかかったよ 肋 膜 が治り次第、早く、あの・空中に何時も^ヘヘホメ

属のぶつかり合う硬い機械の音の、いらだたしさ! 文明世界の大都市の中では窒息しそうだ。騒音の煩わしさ! 緑金の微粒子が光り震えているような・輝かしい島へ帰りたい。

金

行以来の私とファニイとの病気も漸く治った。

沈黙は、 此の朝の快さ。空の色の美しさ、深さ、新しさ。今、大いなる ただ遠く太平洋の呟きによって破られるのみ。

ている。 挑戦的態度が目立って来た。土人の所有せる武器を凡て取上げる 支配権の拡充を考えるだけだし、土人、殊にその青年共は戦争と いる者がないのに驚かされる。白人官吏は之を利用して自分等の い。一年前と比べて、情勢はマターファに著しく不利だ。 ことになるだろうという。今や政府側の軍備が充実したに違いな 急迫して来ている。 **酋**長達に会って見ても、 小旅行と引続いて病気をしている間に、島の政治情勢はひどく ただけで、ただもう興奮して了う。マターファは案外落着 彼は形勢の不利を自覚していないのだ。彼も、彼の部下 政府側のマターファ或いは叛乱者側に対する 戦争を避けようと真面目に考えて 役人達

戦争を、

自分等の意志を離れた一つの自然現象と考えている

が。

ようだ。

を斥けた。面と向っている時は極めて愛想の良い男だのに、 ないでいると、直ぐ斯うだ。彼自身の意志でないことは明らかだ ラウペパ王は、彼とマターファとの間に立とうとする私の調停 会わ

力を有つのは善い事だ。もし、それが、それを濫用しない理性のも とを唯一の頼として、 ポリネシア式の優柔不断が戦争を容易に起させないであろうこ 拱 手 傍観している外はないのか? 権

ロイドに手伝わせながら「退 エッブ 潮 」遅々として進行中。 下にある時は。

五月×日

るべき速さを考えると厭になる。)第一、これは作品としても下 らぬものだ。昔は、前日書いた分を読返して見るのが楽しかった も全部に亘って、もう一度書直しを要するのだ。(スコットの恐 ・退・潮 ボッブ・タイド 潮 」に苦吟。三週間かかって、やっと二十四頁。それ

のに。

せることにした。毎日往復十四哩では大変だから。但し、この事 アへ通っていると聞いて、彼等をうちへ引取って、此処から通わかよ マターファ側の代表者が政府と交渉の為、 毎日マリエからアピ

によって、私は今や公然と叛乱者側の一員と認められるようにな

った。私への書簡は一々チーフ・ジャスティスの検閲を受けねば

光と風と夢

ならぬ。

夜、ルナンの「基督教の起原」を読む。

素晴らしく面白い。

五月××日

郵

葉のヴェイルがあり過ぎる。もっと裸の筆が欲しい。

送れない。もう此の仕事は厭になった。スティヴンスン家の歴史

でも又続けようか? それとも、「ウィア・オヴ・ハーミストン」

退 潮 」には全く不満だ。文章に就いて云っても、言エッブ・タイド

1	6

べて見ても、中々気に入るのが見付からない。

斯んな莫迦げた苦

部を受取る。 収税吏に新宅の税を督促さる。 挿絵を見て驚いた。 挿絵画家は南洋を見たことがな 郵便局へ行き、「島の夜話」六

いのだ。

六月××日

らぬ。 きり掴めない。 消化不良と喫煙過多と、金にならぬ過労とで、全く死にそうだ。 退 潮 」百一頁迄漸く辿りつく。一人の人物の性格がはっェッブ・タイド 一つの文句に半時間かかる。色々な類似の文句を無闇に並 それに近頃は文章に迄苦労するんだから、 話にな

光と風と夢 162 労は、 っていたら、ふと、 って流れた。 今日は朝から西風、 何ものをも産みはせぬ。 くだらぬ 蒸 私は文字通り、よろめいた。それから、やっと説明 或る異常な(一見根拠のない)感情が私を通 醎 飛ぶき 冷々した気温。 溜だ。 ヴェランダに立

を何時しか、そんな状態に変えていたのだ。ハイランドの小舎。 は が な精神や肉体の状態を見出したからだと悟った。平生のサモアと 似てもつかない・この冷々した・湿っぽい・鉛色の風景が、 ついた。 私は、スコットランド的な雰囲気とスコットランド的 私

泥炭 処から聞えるヴァイトゥリンガの水音までが、ハイランドの急流 の煙。 濡れた着物。ウイスキイ。鱒の躍る渦巻く小川。今此

のそれの様な気がして来る。 自分は何の為に故郷を飛出して、こ

も、 たか? 遠くからそれを思出すために、か? ひょいと、 を留めて置きたいと考える。下らぬ慰みだ。 も――それでも人間は、ほんの暫しの間でも人々の心に自分の姿 いと望むのか? ほんの僅かの時が経てば、私も、 んな所迄流れて来たのか? 妙な疑念が湧いた。自分は今迄何か良き仕事を此の地上に残し わが子孫の骨も、みんな記憶から消えて了うだろうに。しか と。之は怪しいものだ。何故又私は、そんな事を知りた 胸を締めつけられる様な思慕を以て 何の関係もない 英国も、 英語

の苦しみとの結果だ。 こんな暗い気持にとりつかれるのも、過労と、

六月××日 退 潮 」は一時暗礁に乗上げたままにして置いて、「エンェッブ・タイド

ジニーアの家」の祖父の章を書上げた。

退 潮」は最悪の作品に非ざるか? エッブ・タイド

小説という文学の形式――少くとも私の形式―

-が厭になって

医者に診て貰うと、少し休養をとれ、と云う。 執筆を止めて軽

い戸外運動だけにすることだ、と。

来た。

時

165 一週間に為され得る成果を見よ。我々が意義ある労作を讃

而

うべきは、

完成されたる仕事に於てのみではない。

光と風と夢 之ばかりはどうにもならぬ現実である。(けれども、おかしいこ るのには、 しかし、 少しの過労が直ぐに応えて、 彼も閉口した。 如何に彼が医者の言を無視しようとも、 倒れたり 喀 血 したりす

とに、

彼は、 る 腎 臓 炎 だったら、どんなに彼は厭がったことであろう。) 血の中にすら彼は自ら、 の満足(?)を覚えていたのである。之が、顔の醜くむくんで来 それが彼の制作を妨げるという実際的な不便を除いては、 自分の病弱を、 余り不幸と感じていないらしく見えた。喀 R・L・S・式なものを見出して、些かいささ

られた時、 斯くて、若くして自分の寿命の短かいであろうことを覚悟させか 当然、一つの安易な将来の途が思浮かべられた。ディ

れた。 彼は、 があった。しかし、結局、或るのっぴきならぬものが、彼を其の 教養は凡て鑑賞と享受とに用いること。何と美しく楽しい生き方すべ それが生命をすり減らすであろうとの懸念は、 れる子供の様に、 恍 惚 として其の勢に身を任せるほかはない。 楽しい途から、さらって行って了った。正しく、彼でない或るも 楽な生業に就き、(彼の父は相当に富裕だったのだから)知能や のが。そのものが彼に宿る時、彼は、ブランコで大きく揺上げら であろう! ッタントとして生きること。骨身を削る制作から退いて、何か 養生したとて、どれ程長く生きられようぞ。たとえ長生し 満身に電気を孕んだような状態になり、唯、 事実、彼は鑑賞家としても第二流には堕ちない自信 何処かへ置忘れら 書きに書いた。

光と風と夢 168 たとて、 云った四十の歳を最早三年も生延びたのである。 さて、そうして茲に二十年。 斯の道に生きるに非ずして、何の良きことがあろうぞ! 医者が、それ迄は生きられまいと

趣味と該博な知識とを有った・端ののすべからざる才人だった。 想上趣味上の直接の教師であった。 歳年上のこの従兄は、二十歳前後のスティヴンスンにとって、 かも彼は何を為したか? スティヴンスンは彼の従兄のボッブのことを何時も考える。 何事をもしなかった。 絢 爛 たる才気と洗錬された 彼は今パリで、

をいうのではない。彼の精神が其処から成長せぬことをいうのだ。 をも為さぬ・一介のディレッタントである。名声の挙がらぬこと 二十年前と同じく、依然、あらゆる事を理解して、しかも、何事

デエモンは讃えらるべきであった。 二十年前、スティヴンスンをディレッタンティズムから救った

び上って来る。次々に何十という紙芝居の舞台面が、其等を繋ぐ 情景が浮かび、その雰囲気にふさわしい事件や性格が、次に浮か 自ら演出して遊ぶのだが)の影響であろうか、スティヴンスンの ら色つき」の紙芝居(それを玩具屋から買って来て家で組立て 創作は何時でも一つ一つの情景の想起から始まる。初め、一つの 「アラディン」や「ロビン・フッド」や「三本指のジャック」を 子供の時の最も親しい遊道具だった「一片なら無彩色・二片な子供の時の最も親しい遊道具だった「ぺニイ

物語を伴って頭の中に現れ、目前にありありと見える其等の一つ

光と風と夢 170 批評家のいう所のものが。 出来上るのだ。 的観念を例証せんとの目的の下に全体の構想を立てるとか、一つ 一つを順々に描写し続けることによって、 薄 っぺらで、 他の制作方法― 無性格なR・L 彼の物語は誠に楽しく ―例えば、一つの哲学 ・S・の通俗小説

スティヴンスンにとって、 路傍に見る一つの情景は、 未だ何人

考えることも出来なかった。

の性格の説明の為に、

事件を作上げるとか、――

は、

彼には全然

真夏の夜の夢の文句ではないが、 明確な表現を与えるのが詩人― の顔、一つの素振も、 によっても記録されざる一つの物語を語る如くに思われた。一つ 同様に、 知られざる物語の発端と見えた。 其等、名と所とを有たぬものに、 -作家だとすれば、スティヴンス

其 縦横に活躍させたものだ。ガイ・マナリングやロブ・ロイやアン それにふさわしい事件を頭の中に組立てることは、 である。 ドルウ・フェアサーヴィスなどを。蒼白い、ひよわな少年の頃の 合いそうな物語を拵えて、ウェイヴァリ・ノヴルス中の諸人物を 子供の時から、 母方の)祖父の所へ行く時は、 は確かに生れながらの物語作家に違いない。一つの風景を見て、 L の癖が未だに抜けきらない。 S 雲のように湧起る空想的情景。 ・氏は斯うした幼稚な空想以外に創作衝動を知らないの 食慾と同じ位に強い本能だった。コリントンの というよりも、 何時も其の辺の森や川や水車に 万華鏡の如き影像の乱舞。 哀れな大小説家R 彼にとって、

それを見た儘に写し出す。

(だから、あとは技巧だけの問題だ。

光と風と夢 ない。 0) しかも其の技巧には充分自信があった。)之が、彼の・唯一無二 此の上なく楽しい制作方法であった。之には、 他に方法を知らないのだから。「何と云われようとも、

良いも悪いも

俺

蝠り 共の気に入るために、面白くもない深刻な借物の作品を書く 人間は所詮 Pulvis et Umbra じゃ。何を苦しんで、 牡蠣や 蝙ャ こうも

は俺の行き方を固執して俺の物語を書くだけのことだ。人生は短

ろうとも、俺という最大の愛読者がある限りは。愛すべきR・L ことがあろう。俺は俺の為に書く。たとえ、一人の読者が無くな

S・氏の独断を見よ!」

の作品の愛読者になった。 事実、 作品を書終えるや否や、彼は作者たることを止めて、 誰よりも熱心な愛読者に。 彼は、 まる

戦争近かるべし。

だろうか? 彼は、殆ど習慣の力だけで、とぼとぼと稿を続けて行った それが他の誰か(最も好きな作家)の作品であるかのように、 心から楽しく読 耽るのである。それが、今度の「 退 エッブ・ 其の作品のプロットも帰結も何も知らない一人の読者と 肉体の衰弱による自信の減退だろうか? 喘ぎなが

十· 二

八九三年六月二十四日

見たという。

何用のためか、 昨 夜、 我が家の前の道を、ラウペパ王が面を覆み、 あわただしく走り過ぎた。料理人が確かにそれを 騎乗して、

昨夜迄は無かった新しい白人の箱(弾薬箱のこと)に取囲まれてゆうべ るのを見出すという。 一方、マターファはマターファで、 何処から集まって来るのか、 毎朝眼を覚ますと、必ず、 彼にも分ら

ないのだ。

武装兵の行進、 「 酋 長 の来往、漸く繁し。

六月二十七日

街へ下りてニュウスを聞く。 流説紛々。 昨夜遅く太鼓が響き、

今の所、 街から西の渡し場迄行って、マターファ側の村々の様子を見よ 々は武器を取ってムリヌウに馳せつけたが、何事もなかったと。 アピア市には、事なし。 市参事官に尋ねたが、 情報なし

うたのみ。 いる。近づいても、 たごた立騒いでいたが、武装はしていない。川を渡る。三百碼で Ιĺ 馬に騎る。ヴァイムスまで行くと、路傍の家々に人々がご 対岸の木蔭にウィンチェスターを担った七人の 歩 哨 が 私は馬に水を飲ませ、「タロファ!」と挨拶して其処 動きもしなければ声を掛けもしない。目で追

を過ぎた。

は武装兵が一杯に詰めかけている。支那人商人の住む洋館一棟あ

歩哨隊長も「タロファ!」と応えた。

之から先の村に

光と風と夢 ヴァイムスに着く。 が 銃を担い弾薬筒を帯び、 らティヴォリ・ホテルに避難したそうだ。)途で土民兵の一隊が 打って変って、若々しく活気づいて見えた。少し休んで一緒にス 見知り越しの 老「鱼」長 の所へ寄ったが、 中にも人々が満ち、 としている。 かりではなく、 って外を眺めている。 大声でしゃべっている。誰の顔にも歓ばしげな 昂 奮 がある。 中立旗が門の所に翻る。ヴェランダには人々、 (チーフ・ジャスティスと政務長官とがムリヌウか 島に住む外国人は皆自己の資財を守るに汲った。 村の広場には武装した男達が充満。 その出口の所から外を向いて、一人の演説者 中には銃を持った者もいた。 生々した様子で行進して来るのに遇う。 此の前会った時とは 此の支那人ば 女達が多勢立 会議室の

争時の儀礼みたいなものであろう。 めて見せた。 妙な踊をして見せ、小刀を空高く投上げて、それを見事に受けと うしろを捲上げて臀部の入墨をあらわした一人の男が進み出て、まきましてんぶ にも少年がこんな事をするのを見たことがあるから、 ルイを吸う。帰ろうとして外へ出た時、 家に帰ってからも、彼等の緊張した幸福げな顔が、 野蛮で幻想的で、生気に溢れた観ものである。 顔を黒く隈どり、 之は屹度戦 頭の中に渦 腰布の 以前

巻いている。 らぬ。今となっては、どうにもならない。私が手出をしない方が、 するのだ。 彼等哀れな人々にとって、尚、何等かの役に立ち得るかも知れぬ しかし、 我々の中なる古き蛮人が目覚め、 私は、 騒乱をよそに、じっとしておらねばな 種馬の如くに昂奮

光と風と夢 178 のだ。 し得る見込が、まだ、 無力な文人よ! 膿がつぶれた後の後始末に就いて、 私は心を抑え、税を納めるような気持で原稿 ほんの少しはありそうだから。 我々が多少の援助をな

を書き継ぐ。 ちらつく。戦争は確かに大きな 頭の中には、ウィンチェスターを持った戦士の姿が 誘惑惑だ。

六月三十日

人のいない道。人のいない家。 リエの方角へ行って見る。先日とは違って今日はまるで静かだ。 ファニイとベルを連れ街へ下りる。 銃も見えぬ。アピアへ帰って公安 国際倶楽部で昼食。 食後マ

委員会に顔を出す。夕食後、

舞踏会に一寸立寄り、

疲れて帰宅。

たのだから、彼、 舞踏会場で聞く所によれば「ツシタラが今度の紛争の原因を作っ 及び彼の家族は当然罰せらるべきだ」と、レト

ヌの酋長が言っている由。

外へ出て戦に加わろうという子供じみた誘惑に勝たねばならぬ。

先ず家を守ること。

艦へ避難することになっているとか。目下、 アピアの白人連の中にも恐慌が起りつつある。いざといえば軍 独艦二隻在港。オル

ランドオも近く入港の筈。

七月四日

此の二三日政府側の軍隊(土民兵)が続々アピアに集結。 赤銅

180

光と風と夢 色の戦士を満載して風上から入港して来るボートの群。 とんぼ返りをして景気をつける男。 戦士等が舟の上から発す その船首

る妙な威嚇的な喊声。 アピア市中では赤い 手 巾 が売切になって了った。 太鼓の乱打。 調子外れな喇叭。 赤ハンカチ

をさした少女と、 どった赤鉢巻の青年達で、市中はごった返している。 の鉢巻が、マリエトア(ラウペパ)軍の制服なのだ。 異様な戦士との連立って行く様は、 中々面白 欧風の洋傘 顔を黒く隈

七月八日

夕食後、 戦は遂に始まった。 使が来て、 負傷者等がミッション・ハウスへ運ばれて

て騎乗。 来ている旨を告げた。ファニイ、ロイドと一緒に かなり冷えるが、星の多い夜。タヌンガマノノに提灯は . 提 灯 り ちょうちん を持つ

ア ~ う う う 、 仏 目 身 ら 、 置 き 、 あ と は 星 明 り で 下 る 。

憂 鬱 な・残忍なものであり、 アの街も、 私自身も、 妙な昂奮の中にある。 他の人々のは、 呆然たる、 私の昂奮は、

は、憤激せるそれである。

0) 手術台があり、十人の負傷者がいずれも、 隅 臨 時に当てられた仮病院は、 々に横たわっていた。小柄な・眼鏡をかけた看護婦のラージ 長いがらんとした建物で、中央に 附添人に囲まれ、 部屋

嬢が、 今日は大変頼もしく見えた。独艦の看護卒も来ていた。

医者は未だ来ていなかった。患者の一人が冷たくなりかかって

光と風と夢 いた。 をさすっていた。 風 の鷲型の風貌をしていた。七人の近親者が取囲んで、 それは、 実に立派なサモア人で、色飽く迄黒くアラビヤ人 肺を射ち貫かれたらしい。 独艦の軍医が大急ぎ 彼の手足

で呼びに行かれた。

等が言うので、 者 に加わるようになったので)人々を叩き起し、 の収容の為に、公会堂を使わせて貰い度いと牧師のクラーク氏 私 には私の仕事があった。 街中を走り廻って、 続いて運ばれて来るに違いない負傷 (極く最近、 緊急委員会を開き、 私が公安委員会

す。)この事に就いての費用の拠出も可決。

公会堂を提供することに決めた。(一人の反対者あり。

遂に説得

夜半、 病院に戻る。 医者は来ていた。二人の患者が死に瀕して

いる。 一人は腹部をやられた者。 顔をゆがめつつ、しかし沈黙せ

る・傷々しき人事不省。

突然、 ものの如く見えた。 先刻の・肺を射たれた酋長は、一方の壁際で最後の天使を待つ 一人の女が、 死に行く者の膝を抱いて 慟 哭 した。 家族等が其の手足を支えていた。 みな無言。 慟哭の

声は五秒も続いたろうか。再び、いたいたしい沈黙。

二時過帰宅。 街の噂を綜合すると、 戦は、マターファに不利だ

七月九日

ったらしい。

漸く戦の結果が明らかになった。

光と風と夢 ころか、 ーファ軍とぶっつかった。但し、 昨日アピアから西に進撃を始めたラウペパ軍は、 両軍の将士が相擁してカヴァを酌みかわし、 滑稽なことに、 正午頃、マタ 初めは戦争ど 盛んな交

忽ち乱闘に変じ、本ものの戦争になった。夕刻になって、マター

が行われたらしい。それが、突然の不注意な一発の偽砲から、

たちま

今朝になって終に潰えた。 イイへ逃れたという。 ファ軍が退き、マリエ外郭の石壁に拠って昨夜一晩中防戦したが、 長い間此の島の精神的な王者だったマターファの没落に対して、 マターファは村を焼いて、 海路サヴァ

人政府をも容易に一掃し得ただろうに。マターファと共に、我が 言うべき言葉を知らぬ。一年前だったら、彼は、ラウペパをも白

したか? 今後も、何を為し得るか? 褐色の友の多くが災害を受けたに違いない。俺は彼等の為に何を 昼食後、 街へ。病院へ行って見たら、ウル(肺をやられた酋長 蔑むべき気象観測者
さげす !

でいた。

の 名)

は、

まだ不思議に生きていた。

腹をやられた男は既に死ん

驚き懼れたことに、其の首の一つは、少女のであった。しかも、 った。 サヴァイイの或る村のタウポウ(村を代表する美しい娘)の首だ 斬取られた十一の首がムリヌウに持込まれた。土人等の大いにきりと 南海の騎士を以て任ずるサモア人の間に在って、之は許す

- 寧 な陳謝状と共に、早速、マリエへ送り返されたそうだ。少女ぃねぃ べからざる暴行である。此の首だけは、最上等の絹に包まれ、

光と風と夢 186 彼 川 は 父親の兜の飾り毛にする為に自分の髪を刈ったらしく、 女の美にふさわしき、選ばれたる最期でありしよ! 上げだったので、 父の手伝に弾薬でも運んでいた所を射たれたものに違いな 首を取られたのだともいう。しかし、 男 何と、 0)

様な

謝する演説をした。 マターファの甥のレアウペペだけは、 ムリヌウの大通りでラウペパがそれを閲見し、 首と胴と両方とも運ばれ 部下の功労に

枕 0) 美青年がいた。二人の少女が彼をいたわり、 家族だけだった。 に枕しておった。 度目に病院に寄った時、 他の一隅には、 患者も附添人も木枕で昼寝をしていた。 看護婦や看護卒は一人もいず、 誰も附添っていない一人の負 共に左右から彼の 軽傷 患者

度の、

なかった。 年に比べて、遥かに立派な態度と映ったが、彼の容貌は美しくは 傷者が、 打捨てられ、毅然たる様子で横たわっていた。 顔面構造の極微の差が齎す何という甚だしい相違! 前の美青

| |-|-

今日は疲れて動けない。

を証し得るか?」又、「ダヴィッドがゴライアスを退治した時、 させるのは容易なことではない。「之以外のどんな方法で勇敢さ 更に多くの首がムリヌウに持込まれたそうだ。首狩の風をやめ

彼は巨人の首を持帰らなかったか?」と彼等はいう。しかし、今

少女の首を取ったことだけは、全く恐縮しているようだ。

光と風と夢 が本当か、まだ判らない。サヴァイイに迎えられたとすれば、 アイイへの上陸を拒絶されたという説とが行われている。どちら マターファは無事にサヴァイイに迎えられたという説と、サヴ

大規模な戦争が続けられよう。

七月十二日

へ向け進発したと。

確かな報道は入らず。 流言のみ頻りなり。ラウペパ軍はマノノ

七月十三日

マターファがサヴァイイを追われ、マノノに戻った由、 確報あ

1)

1月十七日

最近 投 錨 したカトゥーバ号のビックフォード艦長を訪う。

彼は、 航すると。マターファの為、 マターファ鎮圧の命を受け、 艦長の能う限りの好意を約束して貰 明朝払暁、マノノへ向けて出

う。

統は武装解除に甘んずるだろうか?

マターファはおめおめと降伏するだろうか?

彼の一

マノノへ激励の書信をやるすべもない。

-

間 に !の期限付で降服を促した。マターファは投降し、 明かであった。マノノ島へ急航したビックフォード艦長は三時 独 ・英・米三国に対する敗残の一マターファでは、 同時に、 帰趨は余り 追撃

の村々への科料六千六百磅。 下の 酋 長 十三人もそれぞれ他の島々に追放された。 ターファは称号 剥 奪 の上、遥かヤルート島へ流謫され、 はくだっ ムリヌウ監獄に投ぜられた大小酋長 叛乱者側 彼の部

して来たラウペパ軍のためにマノノは焼かれ

掠 奪 された。マ

躍気になったスティヴンスンの奔走も無駄になった。

二十七人。之が凡ての結果であった。

彼であった。首狩禁絶を主張する少数の白人の説を用いて、真先 離され、 のため、 罪を犯したのか? サモアの古来の習慣に従って当然要求すべき 山渓流に富むサモアの人間は鹹水に一番閉口する。)彼はどんな はマターファへの書信と贈物とをカトリックの僧に託そうとした 彼等を訪ねることの出来るのは牧師だけである。スティヴンスン たのである。最後迄忠実にアピア政府に税金を納めていたのは は家族の帯同を許されず、又、何人との文通をも禁ぜられた。 拒絶された。マターファは凡ての親しい者、親しい土地と切 北方の低い珊瑚島で、鹹気のある水を飲んでいる。 敵に乗ぜられ、喧嘩を売付けられ、叛逆者の名を宣せら 遠慮して気永に待ち過ぎたという罪を犯しただけだ。そ (高

光と風と夢 192 | 言を吐かぬ人間だ。しかも、斯うした男の不幸を救う為に、ょげん| つ ティヴンスンは何一つして遣れなかった。マターファは彼をあん 全サモア居住者の中で(とスティヴンスンは主張する。)最も嘘き に之を部下に実行させたのは彼であった。彼は、白人をも含めた

なに信頼していたのに。文通の手段の絶たれたマターファは恐ら かったのだと、失望しているのではないか? 何一つ実際にはして呉れない白人(ありきたりの白人)に過ぎな スティヴンスンのことを、 親切そうなことを言いながら結局

げる。 げる。 戦死者の一族の女が、戦死の場所へ行って 花 蓆 蝶とか其の他の昆虫が来て、それにとまる。一度追う。 又追う。逃げる。それでも三度目に其処へとまりに来たら、 を其処に拡

逃

自らを、 う噂もあった。こうした事を見聞するにつけ、 それは其処で戦死した者の魂と見做される。 女は其の虫を 叮 寧 でいねい 活 溌 とに加えて、自己に対し、かっぱっ タイムズへの公開状も再び書始められた。肉体の衰弱と制作の不ふ に見られた。一方、 に捕え、 家に持帰って祀るのである。こうした傷心の風景が随処 何の役にも立たぬ文士として責めた。久しく止めていた 投獄された酋長達が毎日答打たれているとい 世界に対しての、名状し難い憤 スティヴンスンは、

十四四

彼の日々を支配した。

灰色の影。 一八九三年十一月×日 、やな雨もよいの朝、 朝七時だというのに、 巨きな雲。 海 まだ灯をつけている。 の上に落ちた其の巨大な藍

る 小喀血。 ベルはキニーネを必要とし、ロイドは腹をこわし、 私は瀟洒た

ものに内在せる悲劇が作用いて救い難い暗さに迄私を塗込める。 生は常に麦酒と九柱戯ばかりではない。しかし、 何 か不快な朝だ。 我を取囲む錯雑せる悲惨の意識。 私は結局、 事物その

うとも、 物の究極の適正を信ずる。 私の此の信念は変るまい。しかも、 私が一朝眼覚めた時地獄に堕ちていよ それにも拘わらず、

依然として此の生の歩みは辛い。

私は私の歩み方の誤を認め、

後の表現が之だ。私は再び私の・心進まぬ制作に立返る。「ウィ 果の前に惨めに厳粛に 叩 頭 せねばならぬ。………さもあらば ア・オヴ・ハーミストン」を又取上げ、又もてあましているのだ。 あれ、Il faut cultiver son jardin. だ。憐れむべき人間共の智慧の最

期にあるのだという事を知っているが故に、絶望はしない。しか 私は、自分が、今、知的生活を送る人間に通有の、一つの転換

「セント・アイヴス」も遅々として進行しつつある。

「セント・アイヴス」にも自信が持てない。安っぽい 小 説 だ。 私が、私の文学の行詰りにぶっつかっているのは事実だ。

若い時に、何故、着実平凡な商売を選ばなかったかと、今、ふ

195 と、そんな気がする。そういう商売にはいっていたら、今の様な

光と風と夢 196 が永い間の英雄的な努力によって習得したスタイル迄が失われた スランプの時にも、立派に自分を支えて行けたろうに。 私 の技巧は私を見棄て、インスピレーションも、それから、

私

働かしていた不随意筋を、一々意志を以て動かさねばならないの

ように思われる。スタイルを失った作家は惨めだ。今迄無意識に

だから。

しかし、 一方「難破船引揚業者」の売行が大変良いそうだ。

評で、 「カトリオーナ」(デイヴィッド・バルフォアの改題)の方が不 あんな作品の方が売れるなどとは、皮肉だが、 兎に角余り

絶望しないで二番芽生を待つことにしよう。今後私の健康が回復 頭の方まで快くなるようなことは、到底あり得まいが。 但

ことにしよう。 の有無多少によって計られるのだそうだから、私も希望を失わぬ いのだ。エマアソンに言わせれば、人の智慧は其の人の有つ希望 文学なるものは、考え方によれば、多少病的な分泌に違いな

年間の刻苦と、 の職人と考えて来た。さて、今、 うことが出来ぬ。限界が余りに明かなのだ。私は自分を単に昔風 だが、私は、どうしても芸術家としての自分を大したものと思 今や私は、 病気とだ。この二つが、 何の役にも立たぬ厄介者だ。原因は唯二つ。二十 其の技術が低下したとあっては 牛乳から乳精をすつか

り絞りつくして了ったのだ。

音高く、森の向うから、雨が近附いて来る。忽ち、 屋根を叩く

光と風と夢 198 きつけている。 ぎたが、 窓から外を見れば、 猛烈な響。 まだ近処を襲っている音だけは、ザアーッと盛んに聞え 湿った大地の匂。 風。 風が快い涼しさを運んで来る。 驟 しゅうう の水晶棒が万物の上に激しい飛沫を叩しぶき 変かに、 何かハイランド的な感じだ。 雨はじきに過

は を屋根から、 ている。 っきりしない。 私の心の中にある何かに応えるもののようである。 雨垂の一滴が 日 本 簾 を通して私の顔にはねた。 まだ雨水が小川のように落ちている。 沼沢地の雨の古い記憶? 快し! 何に? 窓の前 それ は

ことを。 たくなる。 世界は一つの誤謬であることに就いて、など。 何を? 何か、 こう苛烈なことを。 雨垂の音を聞く。 何かおしゃべりがし 自分の柄にもない 何故の

私はヴェランダに出て、

ら又、 から。 持に寝ころがって、二年間も制作から離れていられる所があった かねばならぬという永遠の重荷に比べられるものはない。 誤謬? だが、其の、うるさい重荷の中でも、絶えず収入を得て行 仮令それが癲狂院であっても、たとえ てんきょういん 大小様々の、余りに多くの下らないうるさい事が耳に入る 別に仔細はない。私が作品を巧く書けないから。それかしさい 私は行かないであろう いい気

か?

· 一月××日

五. 頭の仔豚の蒸焼。百ポンドの牛肉。 我 が誕生日の祝が、 下痢のため一週間遅れて今日行われた。十 同量の豚肉。 果物。レモネ

光と風と夢 か。 花・花。 ドの匂。 三時頃から来て、七時に帰った。 ゙ コーヒーの香。クラレット・ヌガ。 六十の馬繋ぎ場を急設する。 海嘯の襲来のようだ。大いなみ 客は百五十人も来たろう 階上階下共に、

十一月××日 **酋 長 セウマヌが自分の称号の一つを私に贈って呉れた。**ゅうちょう

共に堂々と監獄へ乗りつけた。マターファ部下の囚人達にカヴァ アピアへ下り、 街で馬車を雇って、ファニイ、ベル、ロイドと

長ウルムブラント氏と共にカヴァを飲んだ。酋長の一人が、カヴ と煙草との贈物をする為に。 鍍金鉄格子に囲まれた中で、 我々は、 わが政治犯達及び刑務所

集りの美しさよ !但し、我々の贈ったのは、・フェシラフアイガ・ネイ 調子で斯う言った。 アを飲む時、先ず腕を伸ばして盃の酒を徐々に地に灌ぎ、祈祷のでを飲む時、先ず腕を伸ばして盃の酒を徐々に地に灌ぎ、祈祷の (カヴァ) と云われる下等品なのだが。 「神も此の宴に加わり給わんことを。このラ・タウマファ・エ・レ・アトウア・ウァ・マタゴフイエ・レ スピット・アヴァ

ヴァイリマの使用人だけは別だが。」と言った一白人の言葉に、 比べれば決して怠惰とは云えまい。 近頃、 召使共が少々怠けるので(といっても一般のサモア人と 「サモア人は一般に走らない。

けた男の給料を半減する旨言渡した。其の男は大人しく頷いて、 私は誇を感ずる。)タロロの通訳で彼等に小言を言った。一番怠 てれた笑い方をした。初めて此処へ来た頃、 召使の給料を六志減

私を酋長と見做しているらしい。給金を減らされたのは、じたら、其の男は直ぐに仕事を止めた。しかし、今では、 という老人で、サモア料理(召使達の為の)のコックだが、 ティア 彼等は

かしたサモア戦士の典型と思われる体躯と容貌だ。しかも、之が、 完 璧 といっていい位見事な風貌の持主だ。 昔、 南海に武名を轟とどろ

箸にも棒にもかからない山師であろうとは!

十二月×日

等は自分達のウラ うな四哩半を騎乗、 快晴、 恐ろしく暑い。 (深紅の種子を沢山緒に通した頸飾) 獄中の宴に赴く。先日の返礼の意味か? 監獄の酋長達に招かれ、 午後、 灼けるよ を外して 彼

果して、

う。 も、 是非、 枚、 私 アの街の群集の驚嘆の中を悠々と帰った。 頸飾りを着け、 けが囚人酋長等の目的の一つなのだ。 のとしては頗る自由な盛んな宴であった。 の頸に掛けて呉れ、 とても持ちきれないから、 元々ラウペパの欲しがっていたものだそうだ。王へのあてつ 豚五頭、 屹きっと 、 之等のものを積んでラウペパ王の家の前を通って帰って下 彼が嫉妬を覚えたか、どうか。 王が嫉妬をやくから。」と。私の頸に掛けたウラやきもち 魚類の山、 馬に跨がって、サーカスの行列宜しく、 「我等の唯一の友」 タロ芋の更に大きな山を、 と断ると、 贈物の山を車に積み、 彼等の日く、 花筵十三枚、 と私を呼ぶ。 王の家の前をも通った 土産として貰 団扇三十 私はアピ 獄中のも 「いや、 紅い

X 日

近頃引続いてモンテエニュの第二巻を読んでいる。曾て二十歳なった。 難航の「

前に、

文体習得の目的を以て此の本を読んだことがあるのだから、

全く呆れたものだ。

あの頃、

此の本の何が私に判ったろう?

斯うしたどえらい書物を読んだ後では、どんな作家も子供に見っ

えて、

私は、

小説が書物の中で最上(或いは最強)のものであることを

読む気がしなくなる。それは事実だ。しかし、それでも尚、

疑わない。

読者にのりうつり、

其の魂を奪い、

其の血となり肉と

小説の他にない。

他の書物にあ

化して完全に吸収され尽すのは、

十二月

ェ 退ッ ブ

潮」やっと終る。

悪作?

204

プに喘いでいるのは一つの事、私が斯の道に限無い誇を感ずるの。。 何かしら燃焼しきれずに残るものがある。私が今スラン

は他の事である。

長も近く辞める筈。 彼のポケットのみは、 ように、英米独領事の三頭政治だ。 後任はイイダ氏と内定の由。とにかく新政務長官来任迄は、 とで、遂に政務長官フォン・ピルザッハが辞職した。 土人、白人の両方に於ける不人望と、 まだ俸給を受けるべく開かれている。 目下の所彼の法廷は既に閉じられているが、 相続く紛争に対する引責 裁判所 昔の 彼の

アアナの方面に暴動の起りそうな形勢がある。

+

マターファがヤルートへ流された後も、土民の一揆は絶えなかい。

った。

族を率いて兵を挙げた。小タマセセは、王及び全白人の島外放逐 或 一八九三年の暮、 いは 殲 滅)を 標 一榜 して起ったのだが、 曾てのサモア王タマセセの遺児が、 結局ラウペパ王 トゥプア

麾下のサヴァイイ勢に攻められ、 所罰としては、銃五十梃の没収、 アアナで潰えた。 未納の税金徴収、 叛軍に対する 二十哩の道路

勿論な

独逸人に

ティヴンスンは、早速、 首を斬取った者に対する所罰を要求した。 首狩反対論者のス

光と風と夢 208 る。 が ンは憤った。 此の乱の始まる直前に、 議会を通じて首狩禁止令を出しているのだから、 しかし、 島の宗教家共が案外首狩に就いて無関心なのにも、 此の所罰は実際には行われなかった。 新任のチーフ・ジャスティスのイイダ氏 スティヴンス 之は当然であ

いるが、ツアマサンガ族は首の代りに耳を斬取るだけで我慢して 彼は腹を立てた。目下の所サヴァイイ族は飽く迄首狩を固執して るのだ。 かつてのマターファの如きは、部下に殆ど絶対に首を

ツェダルクランツの失政のあとを受け、今度のチーフ・ジャス

彼は考えていた。

取らせなかった。努力一つで必ず此の悪習は根絶できるのだと、

人への脅迫は、一八九四年を通じて、何時も絶えることがなかっ あるかに見えた。しかし、小規模の暴動や、土民間の紛争や、 ティスは次第に白人や土人の間に於ける政府の信用を回復しつつ

八九四年二月×日

が 提 灯 とファニイからの紙片とを持ってやって来た。うちのちょうちん

昨夜例の如く離れの小舎で独り仕事をしていると、ラファエレ

209 森の中に暴民共が多く集まっているらしいから、至急来て欲しい

光と風と夢 ピストルを持って、下男部屋へ行く。みんな未だ起きていてスウ 蒼白い幅広の 光 芒 を闇空に旋回させて、美しかった。床に就い 鼓と 喊 声 とが聞えた。遥か下の街では月光(月は遅く出た)のかんせい とした時、 たが頸部のリウマチスが起って中々眠れない。九度目に寝つこう て不気味だ。 でいるらしいが、不思議に騒がない。ひっそりしている方が却っ 下で狂乱を演じていたようだ。うちの森にも確かに土民共が潜ん りて行く。途中でファニイの上って来るのに会う。一緒に家に入 気味の悪い一夜を明かす。タヌンガマノノの方から終夜、 書かれている。跣足でピストルを携え、ラファエレと共に下 怪しい 呻善声 が下男部屋の方から聞えた。頸を抑え、 月の出ない前、 碇 泊 中 の独艦のサーチライトがていはくちゅう

袈裟な呻声を発したのだ。 〔骨牌賭博〕をやっている。 莫迦者のミシフォロが負けて大ばかもの

森 大人しくアピア街道の方へ行進して行った。 い五十名位のものだ。ビスケットとカヴァを馳走してやったら、 出て来た。彼等は一緒になって、うちへ、はいって来た。 から現れた。 今朝八時、 太鼓の音と共に 巡 邏 兵 風の土民の一隊が、 と、ヴァエア山に続く右手の森からも少数の兵が 左手の せいぜ

莫迦げた威嚇だ。 それでも領事連は昨夜一晩中眠れなかったろ

された。 先日街へ行った時、 脅迫状だ。白人は、 見知らぬ土人から青封筒の公式の書状を渡 王側の者と関係すべからず。 彼等の

贈物をも受取るべからず………私がマターファを裏切ったとで も思っているのだろうか?

三月×日

ばならなくなった。 書が漸く到着。一八一四年当時の囚人が斯くも珍妙な制服を着せょうや ャムの生涯」は今なお南海に於ける我が愛読書の一つだ。 「セント・アイヴス」進行中の所へ、六ヶ月以前に註文した参考 メレディス氏より 鄭善重 な手紙を戴く。光栄なり。「ビーチ 一週二回ずつ髭を剃っていたとは! すっかり書きかえね

毎日オースティン少年の為に歴史の講義をしているほか、

最近、

く有難い。しかし、目次を一見して、若い時分の汗顔もののエッ

の作家であるか、どうかは、些か疑問だが、友人達の好意は全

続くか分らぬ。 今から菓子や懸賞などで子供達を釣っている始末だから、何時迄 日曜学校の先生をもしている。頼まれて面白半分しているのだが、

十巻、 紙を使うのだそうだ。生前に、こんな 贅 沢 なものを出して貰う 八巻のウェイヴァリ・ノヴルズと同じ様な赤色の 装 釘 で、全二 ャトオ・アンド・ウィンダス社から言って来る。スコットの四十 バクスタアとコルヴィンとの立案で、私の全集を出そうと、チ 千部限定版とし、私の頭文字を透かし入りにした特別の用

光と風と夢 愚かしいのか? 未だに大衆を信ずることが出来ない。 セイだけは、どうしても削って貰わねばならぬと思う。 私 の今の人気(?)が何時迄続くもの 混 沌 の中からイリアッドやエネイドを選び残こんとん 彼等の批判は賢明なの

か、

私は知らな

私は

か

数者 彼等 理 み褒められ、 た彼等は、 な の為に、 の為に、 いのだ。 も賢明といえるだろうか? その代り大衆に顧みられなくなったとしたら、 などというのは、 賢いといわねばなるまい。しかも、 彼等に読んで貰う為に書くのだ。 しかし、それなら私は一体誰の為に書く? 私は彼等を軽蔑し、 明らかに嘘だ。 正直な所、 私は彼等を信用して 少数の批評家にの その中の優れた少 現実の彼等が義 矢張 私 は

明らかに不幸であろう。

しかも全身的に彼

く ま 予告し、バアンズは其の偉大なものを成しとげ、私は唯其の 糟子告し、バアンズは其の偉大なものを成しとげ、私は唯其の 暑らは 等に凭りかかっている。我が儘息子と、無知で寛容な其の父親?** ウイス・スティヴンスン。ファーガスンは来るべき偉大なものを ロバァト・ファーガスン。ロバアト・バアンズ。ロバァト・ル

偉大なるバアンズは別として、ファーガスンと私とは余りに良く 粕 を嘗めたに過ぎぬ。スコットランドの三人のロバァトの中、< アーガスンの詩に 惑 溺 していた。彼は私と同じ都に生れ、同じ 似ていた。青年時代の或る時期に私は(ヴィヨンの詩と共に)フ

215 は違うが) 癲 狂 院 で死んで行った。そして彼の美しい詩も今

様に病弱で、身を持ち崩し、人に嫌われ、悩み、果は、(之だけ

されようというのだ。この対比が心を傷ませてならぬ。 R では殆ど人に忘れられているのに、 L・S・の方は兎も角も今迄生きのび、 彼よりも遥かに才能に乏しい 豪華な全集まで出版

五月×日

痺れるような感じが頻りにする。 朝 胃痛ひどく、 阿片丁幾服用。 部分的錯乱と、 ために、 咽喉が涸き、 全体的痴呆。 手足の

最近アピアの週刊御用新聞が盛んに私を攻撃し出した。しかも、

ひどく口汚く。近頃の私は最早政府の敵ではない筈で、 長官のシュミット氏や今度のチーフ・ジャスティスとも、かなり 事実、

新

事など、 巧く行っているのだから、 彼等の越権行為を私が 屡 々 攻撃しているからだ。今日の記 実に 陋 劣 だ。 初めは腹が立ったが、近頃は寧ろ光栄を 新聞を唆しているのは領事連に違いな

何と彼等が俺一人を目の敵にやっきとなることか! 「見よ。これが俺の位置だ。俺は森の中に住む一平凡人だのに、 彼等が毎週

覚えるくらいだ。

繰返して、俺には勢力が無いと 吹 聴 せねばならぬ程、 俺は勢

力を有っている訳だ。」

攻撃は街からばかりではない。 海を越えて遥か彼方からもやっ

217 て来る。こんな離れ島にいても尚、 批評家共の声は届くのだ。

何

光と風と夢 218 者も、 に拘わらず兎に角私の作品に完全な理解を示して呉れるのは、かか ンリイ・ジェイムズ位のものだ。(しかも、彼は小説家であって、 と色々な事を言う奴が多いことだ! 共に誤解の上に立っているのだから遣り切れない。 おまけに、 褒める者も貶す

ゴスが言っているそうだ。「チャリング・クロスの周囲三哩以内」マイル に良く解るような気がする。此の地の生活の齎した利益の一つは、 批評家ではない。)優れた個人が或る雰囲気の中に在ると、個 ヨーロッパ文明を外部から捉われない眼で観ることを学んだ点だ。 いう事が、 としては想像も出来ぬような集団的偏見を有つに至るものだ、 斯うして、 狂える群より遠く離れた地位にいると、 人

の地にのみ、文学は在り得る。サモアは健康地かも知れないが、

は本当かも知れぬ。が、 極端な写実を喜ぶ人達からと、である。 に対する非難は、大体、二つの立場から為されているようだ。 創作には適さない所らしい。」と。或る種の文学に就いては、之 今日の郵船で着いた雑誌類の評論を一わたり見ると、 性格的な或いは心理的な作品を至上と考えている人達からと、 何という狭い捉われた文学観であろう! 私の作品

性格的乃至心理的小説と誇称する作品がある。何とうるさいこ。

と私は思う。何の為にこんなに、ごたごたと性格説明や心

なら、そうするだろう。 吃 水 の浅い船はぐらつく。氷山だって よってのみ描くべきではないのか? 少くとも、嗜みを知る作家 理説明をやって見せるのだ。性格や心理は、表面に現れた行動に

光と風と夢 舞台のような、 水面下に隠れた部分の方が遥かに大きいのだ。楽屋裏迄見通しの さて、又一方、ゾラ先生の煩瑣なる写実主義、はんさ 精巧な機械程、 足場を取払わない建物のような、 一見して単純に見えるものではないか。 そんな作品は

西欧の文壇に横

革より成ると雖も、しかも単なる革ではないのだ。 は選択だ。 然の真実を写し得たりとなすとか。その陋や、哂うべし。文学と 行すと聞く。目にうつる事物を細大洩らさず列記して、以て、 誰か全き現実を捉え得べき。 作家の眼とは、 選択する眼だ。 現実は革。 絶対に現実を描くべし 作品は靴。 靴は

筋の無い小説」という不思議なものに就いて考えて見たが、よ

脊椎 決っている。宜しい。確かに、それは真実である。 後者は通俗も通俗、幼稚なお伽話じゃないか」と、 蔑視ということは、子供が無理に成人っぽく見られようとする時べっし 個にとっては、作品の「筋」乃至「話」は、 早若い人達の言葉が理解できなくなって了ったのだろうか。私一 ラリッサ・ハアロウを一度でも通読したことがあるか、どうか。 を絶対に支持する。ただ、此の言を為した所の人が、果して、ク ンソン・クルーソーとを比較せよ。「そりゃ、前者は芸術品で、 に示す一つの擬態ではないのか? クラリッサ・ハアロウとロビ く解らぬ。文壇から余りに久しく遠ざかっていたため、私には最 の如きものとしか思われない。 「小説中に於ける事件」への 脊 椎動物に於けるせきつい 誰でも云うに 私も此の意見

光と風と夢 うか、それが些か疑わしいだけのことだ。 又、ロビンソン・クルーソーを五回以上読んだことがないか、ど 之は非常にむずかしい問題だ。ただ云えることは、

之をモツァルトの音楽に聴け。 味性とを共に完全に備えたものが、真の叙事詩だということだ。 真実性と興

は、 ントレエ」を書いた時と同じ真剣さで、私はあの書物を書いた。 作品に私が全力を注いだという事を大抵の人が信じて呉れないの になる。あの作品の価値に就いては暫く之を措くとするも、 ロビンソン・クルーソーといえば、当然、私の「宝島」が問題 不思議だ。後に「「誘」 拐」 や「マアスタア・オヴ・バラー あの

おかしいことに、あれを書いている間ずっと、私は、それが少年

でも、 は 子供を認める人達は、 の為の読物であることをすっかり忘れていたらしいのだ。 解って呉れないのだ、 私の最初の長篇たる・あの少年読物が嫌いではない。 今度は、 私が子供であることを。 私が同時に成人だということを理 所で、 私の中の 私は今 世間

解して呉れないのだ。

説が巧いんだろう?)マダム・ボヴァリイは疑もなく傑作だ。 仏蘭西の巧い小説に就いて。(仏蘭西人はどうして、あんなに小フランス うま リヴァア・トゥイストは、 子供、 ということで、もう一つ。英国の下手な小説と、 何という子供じみた家庭小説であるこ

りも、 子供の物語を残したディッケンズの方が、成人なのではな しかも、 私は思う。成人の小説を書いたフロオベェルよ

斯かる意味の成人かかる意味の成人

は、 と。但し、此の考え方にも危険はある。

光と風と夢 ム卿が成長して名も無き一市井人となる。(?) イクスピア氏が成長してアール・オヴ・チャタムとなり、チャタ 結局何も書かぬことになりはしないか? ウィリアム・シェ

迦らしさが一層はっきりして来る。心理学も認識論も未だ押寄せゕ きずに争論を繰返している。文明から離れていると、この事 て来ない此の離れ島のツシタラにとっては、リアリズムの、ロマ を各々違った、しかつめらしい言葉で表現したりして、 同 じ言葉で、 めいめい勝手な違った事柄を指したり、 人々は飽 同じ事柄 すの 莫ば

ンティシズムのと、

所詮は、技巧上の問題としか思えぬ。

読者を

引入れる・引入れ方の相違だ。読者を納得させるのがリアリズム。 読者を魅するものがロマンティシズム。

七月×日

帰途、 中 のキューラソー号へ遊びに行っている。今朝は早く街へ下り、ちゅう れた。それから揃ってキューラソー号に行き、昼食も艦上で済ま ロイドと共に政務長官エミイル・シュミット氏の所で朝食をよば 先月来の悪性の感冒も漸く癒え、この二三日、続けて、 碇 泊ってい このここ 日、続けて、 でいはく 私一人ホテル泊りの積りで、遅く迄話し込んだ。さて、その 夜はフンク博士の所でビーア・アーベント。ロイドは早く帰 頗る妙な経験をした。面白いから、書留めて置こう。

光と風と夢 ば」と自分で警戒する気持も多少はあったのだが、それが何時の りで四五十歩あるいた頃迄は、「酔っているぞ。 氏の家を辞した時は、 ビールの後で飲んだバーガンディが大分利いたと見え、フンク かなり 酩 酊していた。 ホテルへ行くつも 気を付けなけれ

らと眼覚めかけた私の意識に、遠方から次第に大きくなりつつ近 いた。 間にか緩んで、やがて、あとは何が何やら、まるで解らなくなっ 土臭い風が 生 温 く顔に吹きつけていた。その時、うっす 気がつくと、 私は黴のにおいのする暗い地面に倒れて

ら考えると全く不思議だが、私は、 自分がエディンバラの街にいるものと感じていたらしいのだ 地面に倒れていた間中、ずっ

づいて来る火の玉の様に、ピシャリと飛付いたのは、

227

光と風と夢 ばかり行くと切れていて、その向うには、どうやら薄黄色い光が こととて何処も彼処も真暗だが、此の高い塀は、其処から二十碼ャード る鼻の先には、高い黒い塀が突立っている。夜更のアピアの街 に私の経験したことだが………ハッと気がつく。私の倒れてい

たヘルメット帽を拾って、 流れているらしい。私はよろよろ立上り、それでも傍に落ちてい 其の黴臭い・いやなにおいのする塀―

過去の、 を伝って、光のさす方へ歩いて行った。 おかしな場面を呼起したのは、此のにおいかも知 塀は間もなく切れて、 れ め

鏡で見た位に、ハッキリと見える。そこは、やや広い往来で、

向うをのぞくと、ずっと遠くに街灯が一つ、ひどく小さく、遠眼

の片側には、今の塀の続きが連なり、その上に覗き出した木の茂

大脳の組織の何処かに間隙でも出来ていたような気がする。

みが、 自分は今フンク氏の家からホテル迄歩いて行く途中で、 アだぞ、此処は。——すると、鈍い光に照らされた往来の白い埃 中に、ひょいと、しかし今度は確かに眼が覚めた。そうだ。アピ オット・ロウ(自分が少年期を過したエディンバラの)の我が家 の街にいる積りになっていたらしい。暫く光に向って進んで行く に帰れるように考えていた。再びアピアということを忘れ、 ということなしに、私は、其の通を少し行って左へ曲れば、ヘリ 其処で、やっと完全に私は意識を取戻したのだ。 自分の靴の汚れにもハッキリ気が付いた。ここはアピア市で、 下から薄い光を受けながら、ざわざわ風に鳴っている。 故郷 何

或 いは、こんな変な事を詳しく書留めて置こうとすること自体

既に幾分病的なのかも知れない。

っただけで倒れたのではないような気がする。

八月×日

毎朝二三時間畑で過すことにしている。 医者に執筆を禁じられた。全然よす訳には行かないが、近頃は ココア栽培で一日十磅も稼げれば、文学なんか他人に呉れてポンド 之は大変工合が良いよう

豌 豆、オレンジ、パイナップル、グースベリィ、コール・ラビ、^{えんどう} うちの畑でとれるもの――キャベツ、トマト、アスパラガス、 やってもいいんだが。

バーバディン、等。

難航だ。目下、オルムのヒンドスタン史を読んでいるが、 「セント・アイヴス」も、そう悪い出来とは思わないが、 兎角、

十八世紀風の忠実な非抒情的記述。

航してアトゥア叛民を砲撃することになった由。一昨日の午前中、 ロトゥアヌウからの砲声が我々を脅した。 今日も遠く 殷 々 たる 二三日前突然、 碇泊 中でいはくちゅう の軍艦に出動命令が下り、 沿岸を廻

八月×日

砲声が聞える。

ヴァイレレ農場にて野外乗馬競技あり。 身体の工合が良かった

232 とは欲望を感ずることだ。」と、 への訴え。 ので参加した。十四哩余り乗廻す。 昔日の欣びの再現。 十七歳に還ったようだ。 草原を疾駆しながら、 愉快極まりなし。 野蛮な本能 馬上、 「生きる

惑を、 然と私は思うた。「青春の頃女体に就いて感じたあの健全な誘ぅぜん 所で、 あらゆる事物に感じることだ。」と。 日中の愉快に引きかえて、夜の疲労と肉体的苦痛とは全

くひどかった。久しぶりに有つことのできた楽しい一日の後だけ。 此の反動はすっかり私の心を暗くした。 私は、 自分のした事に就いて後悔したことはなかった。

なかった職業、

自分の敢てしなかった(しかし確かに、

する機会

何時も後悔を感じていた。自分の選ば

なかった事に就いてのみ、

がずきずきと襲って来るにつけても、いやでも、そう思わない訳 しつこい咳が 喘 息 の発作のように激しく起り、 ないのではないかと思う。夜、 今日の昼間のような曇りのない歓びも、もう二度と訪れることが は最早、そうした行為への純粋な慾求が次第になくなって来た。 考えることが、慾の多い私をいらいらさせたものだ。所が、近頃 に行かない。 のあった)冒険。自分のぶつからなかった種々の経験 寝室に退いてから、疲労のための、 又 関節の痛み ―其等を

極度の貧困と極度の衰弱との中に、友人や肉親との交通も一切断 ことがある。ファニイの後を追うてカリフォルニア迄渡って来、 私は長く生き過ぎたのではないか? 以前にも一度死を思うた

光と風と夢 まだ、 たれたまま・ し自分を支えて来て呉れた貴い友人達(私は肉親よりも先ず友人 れを書かない中は、何としても死なれない。それは、自分を励ま 我が生の記念碑ともいうべき作品を書いていなかった。 その時私は 屡 々 死を思うた。しかし、 の貧民窟の下宿に 呻 吟していた時の 私は其の時迄に、

達のことを考えた。)への忘恩でもある。それ故、 も事欠くような日々の中で、歯を喰縛りながら、「パヴィリヨン 私は、食事に

それが記念碑として優れたものか、どうかは別として、 に角書けるだけのものを書きつくしたのではないか。無理に、 に私は、 ・オン・ザ・リンクス」を書いたのだ。所が、今は、どうだ。既 自分に出来るだけの仕事を果して了ったのではないか。 私は、 兎

私の生

何の目

疲労と

235 変形するのだ。蛾になって、繭を喰破って、飛出すのだ。」こ

れ 繭を喰破るだけの力が残っているか、どうかである。 は大変結構な譬喩だ。しかし、 問題は、 私の精神にも肉体にも、

+

八九四年九月×日

何 酋長等の 一人だ。 彼等は 先月の末、 マターファ側の政治犯、 か 昨 御相談に上るそうです。」と言った。 日料理番のクロロが 我々を獄中のカヴァの宴に招いて呉れた 「義父が他の」 漸く釈放されたのである。 の

個 長 彼の義父、 達と一 老ポエ 緒に、 は、 明日、

エの入獄中は、

私も相当面倒を見させられた。

医者を獄中に向け

サモア流に車座になって蹲んだ。 ポエが他の八人の酋長と共にやって来た。 彼等の代表者が話し始 彼等は喫煙室

てやったり、

病気のためとて仮出獄の手続をしてやったり、

る時の条件として今尚、 シタラの厚情への謝意を表したいと、 今や自分達も、やっと無条件で釈放された訳だが、 「我々の在獄中ツシタラは一方ならぬ同情を我々に寄せられた。 我々より先に出獄した他の酋長等の中には、 政府の道路工事に使われている者が随分 出獄後直ぐに皆で相談した。 何とかしてツ その釈放され

237

光と風と夢 うというのである。 を心からの贈物としようと相談が一決したのだが、 贈物を受けて貰い度い。」と。 公道と私の家とを繋ぐ道路を作ろ 誰しも斯かる話を余りあてに出 是非とも此の

土人を良く知っている者なら、

来ないと思うのだが、兎に角、 実をいうと、之は、私自身が、道具や食事や給金(之は、 私は此の申出に非常に感激した。

先方では要らないというだろうが、 結局、老人や病弱者への慰問

ぬことになるのだ。 併し、 彼等はなお此の計画の説明を進めた。彼等酋長達は、こ

やらねばなるまい)のために少からぬ金を使わねばなら

の形で、

れから自分の部落に立帰り、 一族の中から働く者を集めて来る。 燃える様な純粋な感情を露したかに思われた。

自 惚 ではないつ

もりだ。ポリネシア人の仮面――全く之は白人には竟に解けない

之は驚くべき非サモア的勤労だ。もし之が実際に行われるとすれ 青年の一部はアピア市にボートを持って来て住み、 で都合して貰うが、決して贈物をして貰わないこと………等。 恐らく此の島では前代未聞であろう。 働く連中に食糧を供給する役をする。道具だけはヴァイリマ 海岸通を通っ

が彼等の獄中での唯一の友であったことを語る段になると、急に、 初めの挨拶の時は極めて他処行きであったが、進んで、ツシタラ は個人的に良く知らない)と面を合せて腰掛けていた。彼の顔は、 私は彼等に厚く謝辞を述べた。私は彼等の代表者(此の男を私

九月×日

快晴。

朝早く彼等が来た。逞しい、

顔立も尋常な青年ばかりが

彼等は直ちに我が新道路の工事に着手した。老ポエ

とって毫も問題でない。

彼等の衝動が、

道路完成迄永続きするか、どうか、それは私に

彼等がそれを企てたということ。そして、

方々歩き廻っている。

は頗る上機嫌。 揃っている。

言い、ヴァイリマの家族の友なることを青年等に誇示するかの如

この計画で若返ったように見える。

頻りに冗談を

ことがない。 太平洋の謎だが

が斯くも完全に脱棄てられたのを、

私は見た

240

サモアでは未だ曾て聞いたこともない様な事を進んで実行し始め 乱の原因となるもの。金銭を以てしても刑罰を以てしても容易に モア人の最も忌み嫌うもの。此の土地では、 ――之だけで充分だ。試みに思え。之は道路工事― 税の取立に次いで叛

を成したのだと、 子供のように嬉しいのだ。 この一事で、私は、 自惚れていいように思う。私は嬉しい。 自分がサモアで少くとも何か或る一つの事

彼等を誘うことの出来ない道路工事なのだ。

十八

き勤勉と、速度とであった。 の争いも殆ど起らなかった。 十月に入って、道路はほぼ完成した。サモア人としては驚くべ 斯うした場合にありがちの、 部落間

た。 を以て、 白人及び白人に親しい土人達の一部から彼が受取った返辞は、悉 く断り状だった。子供の如く無邪気なスティヴンスンの喜びの宴 招待状を送った。所で、驚いたことに、宴の日が近づくにつれ、 スティヴンスンは工事完成記念の宴を華やかに張りたいと思っ 彼は、白人と土人とを問わず、島の主だった人々には残らず 彼等は皆、政治的な機会と見做し、つまり、彼が叛徒を

えたのである。

彼と最も親しい数人からも、

理由は書かずに、

糾合し、

政府に対する新しい敵意を作上げようとしている、と考

席できない旨を言って来た。宴は殆ど土人ばかりが来ることにな った。それでも、列席者は夥しい数に上った。

英文の原稿を或る牧師の所へやって、 当日スティヴンスンはサモア語で感謝の演説をした。 土語に翻訳して貰ったもの 数日前、

である。

彼は先ず八人の 酋 長 達に厚く謝辞を述べ、次いで公衆に、

此 に脅されており、又、 此の美しい申出の為された事情と経過とを説明した。自分が初め |の申出を断ろうかと思ったこと。それは、此の国が貧しく饑餓 現在、彼等酋長達の家や部落が、長い間の

知っているからだ、ということ。しかし結局之を受けたのは、此 主人の不在のために、 整理を必要としていることを、自分が良く

光と風と夢 て堪らなく嬉しかったからだ、ということ。 の工事の与える教訓が一千本のパンの木よりも有効だと思ったか 「酋長達よ。諸君が働いて下さるのを見ていて、 それに、 かかる美しい好意を受けることが、 私の心は温かく 何ものにも増し

希望からでもあります。 なる様な気がしました。それは感謝の念からばかりでなく、或る 果樹園を作り、 です。今や、サモアを守る途はただ一つ。それは、道路を作り、 に対する勇敢な戦士としての諸君の時代は既に終ったということ であろう約束を読んだのです。 植林し、其等の 売 捌 を自らの手で巧くやるこうりさばき 私は其処にサモアの為、良きものを齎す 即ち、 私の申上げたいのは、 外敵

一口にいえば、自分の国土の富源を自分の手で開発すること

です。之をもし諸君が行わないならば、 皮膚の色の違った他の人

間共がやって了うでしょう。 イで? ウポルで? ツツイラで? 自らの有てるものを以て、 諸君は何をしているか? サヴァイ 諸君は、 それを豚共の

蒔 手放題をしているではないか。彼等は蒔かざるに刈り、蒔かざる に収穫れておるのだ。 かれたのだ。 に任せているではないか。豚共は家を焼き、 豊かな土地と、美しき太陽と、 併し、 神は君達の為にサモアの地にそれを 充ち足りた雨とを、 果樹を切り、 勝

諸君や諸君の子孫は、皆、外の暗闇にほうり出され、唯泣くより それを開発しなければ、やがて他の者に奪われて了うのです。

君達に授け給うたのだ。

繰返して言うけれども、

諸君がそれを保

光と風と夢 246 私は、 ほ かはなくなるのです。 スティヴンスンは、 此の眼でそうした実例を見て来たのです。」 自分の見たアイルランドや、 私はいい加減に言っているのではない。 スコットラン

褌一番すべきであると。 ド高地や、 て語った。そして、其等の轍をふまないために、今こそ我々は緊 「私は、 サモアとサモアの人々とを愛しております。 或いはハワイに於ける原住民族の現在の惨めさに就い 私は心から

戒と思ってはいけないのだ。 固く決めているのです。だから、 此の島を愛し、生きている限りは住居に、 私の言うことを、 死んだなら墓地にと、 口先だけの警

今や諸君の上に大きな危機が迫って来ている。今私の話した諸

家に火を放つことによ

黒く隈取って戦うことによってではない。 金であるか? 来るに違いない。 は其の時です。 するでしょう。すると、 る土地委員会とチーフ・ジャスティスとは、 に使おうと自由になるのです。 ようになるか、その最後の危機が迫っているのですぞ。 の子孫が此の父祖伝来の地で、 民族の様な運命を選ばねばならぬか、 真のサモア人は之を切抜けねばならない。 土地測量器を手にした者共が、 鉛の屑であるか? 諸君の試錬の火が始まるのです。 土地は諸君に戻され、 諸君の記憶を讃えることが出来る 奸悪なる白人共の手の伸びるのかんあく 或いは之を切抜けて、 間もなく任期を完了 如何にして? 諸君の村へやって 諸君はそれを如何 諸君が果して 条約によ 顔を 諸君

光と風と夢 真にサモアを救う者とは、 なりません。こういうのが真の勇者、真の戦士なのです。酋長達 ではない。そんな事は、 つまり神の与え給うた豊かな資源を開発する者でなければ 豚を殺し、 諸君を一層惨めなものにするだけです。 傷つける敵の首を刎ねることによって 道路を開き、 果樹を植え、 収穫を豊か

よ。 御礼を申上げる。そうして、全サモア人が範を貴方方に取れば良 の開発に、 民が残らず、道路の開拓に、 いと思うのです。 貴方方はツシタラの為に働いて下さった。ツシタラは心から 全力を注いだら、 即ち、此の島の酋長という酋長、 ――それも一ツシタラへの愛の為で 農場の経営に、子弟の教育に、 島民という島 資源

諸君の同胞、

子弟、更に未だ生れざる後代の為に、そうし

た努力を傾けたら、どんなに良かろうと思うのです。

嬉しがって、 完全に諒解されたらしいことが、彼を悦ばせた。彼は少年の様に スティヴンスンが案じた程難解ではなく、彼等の大部分によって 謝辞というより警告乃至説諭に近い此の演説は、 褐色の友人達の間をはしゃぎ廻った。 大成功だった。

新道路の傍には、 次の様な土語を記した標が立てられた。

「感謝の道路」

我等が獄中 呻 吟 の日々に於けるツシタラの温かき心に報いん 我等 今 この道を贈る。 我等が築けるこの道 常 に 泥ぬ

濘まず 永久に崩れざらん。 かる とは

+

八九四年十月×日

る者は又、にやにや笑い出す。下劣な笑だ。何は措いてもマター ファの事件を 可 嗤 的 なものとしてはならぬと思う。一作家の

妙な顔をする。丁度、去年の芝居の噂でも聞いた時のように。

私がまだマターファの名を挙げるのを聞くと、人々(白人)

は

時でも、 奔走だけでは、どうにもならぬ。(小説家は、 物語を語っているのではないかと思われるらしい。)誰 事実を述べている

実際的な地位を有つ人物が援けて呉れなければ駄目だ。

の余りに偏頗なことを。 した。 を見ても、 に流謫され、一方、島内白人の殲滅を標榜 の中で、 相当この問題に関心を抱いているものと見られるし、 彼は再三に亘ってサモアの内紛についての質問をしている たJ・F・ホーガン氏に宛て、 全然面識の無い人物だが、英国下院でサモア問題に就いて質問 いわば喧嘩を売られたに過ぎぬのだから)が千浬離れた孤島 殊に、 私は繰返し、マターファの処刑の厳に失する所以を説明がえん かなり事情にも通じているらしい。 最近叛乱を起した小タマセセの場合と比較して、 何等罪状の指摘できないマターファ 手紙を書いた。 此の議員宛の書面 して立った小タ 新聞によれば 質問の内容 から、 彼彼

光と風と夢 252 今ヤルートにいるマターファの所へはカトリックの牧師以外に誰 も行くことが許されない。 マセセは小銃五十梃の没収で済んだ。こんな莫迦な話があるか。 手紙をやることも出来ぬ。 最近、

ねばならぬなんて、妙な話だ。 千浬以内にいる彼を救う為に、 数万浬彼方の国の輿論を動かさ

連戻されるのだろう。

一人娘が敢然禁を犯してヤルートへ渡ったが、発見されれば、又

彼の

ジイ島位まで来られたら、そうして、故郷のそれと違わぬ食事、 した人柄でもあるのだから。サモア迄は望めずとも、せめてフィ に入るだろう。彼は其の方面の教育を受けてもいるし、又、そう もしマターファがサモアへ帰れるようだったら、 彼は屹度僧職

にか有難いのだが。 飲料を与えられ、慾には時々我々と会うことが出来たら、どんな

十月×日

オヴ・ハーミストン」を続け度くなって、又、取上げた。一昨年、 「セント・アイヴス」も完成に近くなったが、急に、「ウィア・

筆を起してから、何度取上げては、何度筆を投げたことやら。今

度こそ何とか纏まりそうだ。自信というよりも、何だか、そんな

十月××日

気がする。

光と風と夢 程に、 うな感じを深くする。 見ることに、聞くことに、 の世に年を経れば経る程、 上品にとりすました生の表面と、下卑て狂気じみた其の底 私は慣れることが出来ない。 斯かる生殖の形式に、か 私は一層、途方に暮れた小児のよ 斯かる成長の過 この世に

めないものだ。 部 事も益々分らなくなるばっかりだ。 く言い聞かされたものだが、あれは正しく嘘であった。自分は何 うな気がする。 との対照に――之等は、 私は年をとればとる程、 「大きくなれば解るよ。 如何に年をとっても、 ……之は確かに、不安で と、 段々裸に、 子供の時分に、 私には慣れ親し 愚かになるよ ょ

ある。

しかし又一方、このために、生に対する自分の好奇心が失

われないでいることも事実だ。全く、

世の中には、

「自分にとっ

る。 うだけで、自分の意見への尊重を相手に強いようとする・あのも っの短かさで計る計算法によれば、決して若くはあるまい。) 軽いべ ぶべき何ものも無いよ。」といった顔をした老人が、実に沢山い 遊星の上に生れ出ることが、たかだか二三十年早かったからとい めての経験に違いないではないか。悟ったような顔をした老人共 のだ? どんな高齢者だって、 者は」といった式の、やにさがったものの言い方を(単に此の 此の人生は、もう何度目かの経験だよ。最早自分は人生から学 一体、どんな老人が此の人生を二度目に生活しているという 私は(私自身は所謂年寄ではないが、年齢を、いわゆる 嫌悪する。 其の好奇心のない眼付を、 彼の今後の生活は、彼にとって初 殊には、「今の若 死との距離

iserunt.「彼等驚きによりて認めたるものを、傲りによりて失いた りき」病苦が私に、さほど好奇心の磨滅を齎さなかったことを、 のの言い方を)嫌悪する。Quod curiositate cognoverunt superbia am

十一月×日

私は喜ぶ。

起伏を見せてずっと北迄続き、その果には、燃上る 濃 藍 色 ののうらんしょく らちらと白い炎が立っていた。眩しかった。 太平洋が 雲 母 末 のような小皺を畳みながら、 円く大きく膨れ上 も人一人見えなかった。道の右側は、 甘 蔗 畑 が緑の緩やかな 午後の日盛りに私は独りでアピア街道を歩いていた。道からち 街道の果迄見渡して

っていた。 青 焔に揺れる大海原が瑠璃色の空と続くあたりは、せいえん

- 線 が眩しい靄の中から覗いている。静かだった。甘蔗の葉摺^{ぅせん} - *** 金粉を交えた水蒸気にぼかされて白く霞んで見えた。道の左側に の上に、タファ山の頂であろうか、 突 兀 たる 菫 色 の稜の上に、タファ山の頂であろうか、 とっこっ すみれいろ り 巨大な羊歯族の峡谷を距てて、ぎらぎらした豊かな緑のい。

の外、 何も聞えなかった。私は自分の短い影を見ながら歩いてい

た。 かなり長いこと、歩いた。ふと、妙なことが起った。私が、

私 前は何者だ? に聞いたのだ。俺は誰だと。名前なんか符号に過ぎない。一体、 この熱帯の白い道に痩せ衰えた影を落して、と

くに去り行くであろう汝、 ぼとぼと歩み行くお前は? 名無き者は? 水の如く地上に来り、やがて風の如

光と風と夢 258 る。 私はぞっとした。 眺めているような工合であった。 俳 お前は誰だと。そして 執 拗 にじろじろ睨めまわしている。 優の魂が身体を抜出し、 私は眩暈を感じて倒れかかり、 見物席に腰を下して、 魂が、 其の抜けがらに聞 危く近所の土人 舞台の自分を

の家に辿りつき、

休ませて貰った。

期 悩ましたことのある永遠の謎「我の意識」への疑問が、 の後、 こんな虚脱の瞬間は、 突然こんな発作となって再び襲って来ようとは。 私の習慣の中には無い。 幼い頃一時 長 V 潜伏 私を

しても、 て身体の調子もずっと良いのだ。 生命力の衰退であろうか? しかし近頃は、二三ヶ月前に比べ 精神の活気も大分取戻しているのだ。 気分の波の高低はかなりあるに 風景などを眺めて

力を(誰でも三四年熱帯に住めば、それを失うものだ)再び感じ 近頃は、 強烈な其の色彩に、始めて南海を見た時のような魅

していた姿の或る情景などが、焙り出しの絵の様に、 ている位だ。生きる力が衰えている筈はない。ただ最近多少 昂 し易くなったことは事実で、そういう時、 数年間まるで忘却 こうふ

る。 りと、 其の色や匂や影まで鮮やかに頭の中に蘇って来ることがあ 突然ありあ

何だか少し気味が悪い位に。

十一月×日

神 の異常な昂揚と、 異常な沈鬱とが、 交互に訪れる。

もひどい時は一日に数回繰返して。

光と風と夢 260 て海に続く迄の風景が、 途端に、 · た時 昨日の午後、 突然、 見はるかす眼下の森、 或る 恍 惚 たるものが心を掠めたように思った。 スコールが過ぎたあとの夕方、 雨あがりの落暉の中に、 巌から、 其等が大きく傾斜し 丘の上を騎乗して 見る見る鮮明さ

を加えて浮かび上った。

画

0)

如き 輪 廓を以て一つ一つはっきりと見えて来た。

極く遠方の屋根、

窓、

樹木までが、

銅

版

視覚ばか

曲も、 と思われた。 のが精神に宿ったことを、 りではない。 どんな微妙な心理の 陰 翳 も、今は見遁すことがあるまい あらゆる感覚器官が一時に緊張し、 私は殆ど幸福でさえあった。 私は感じた。どんな錯雑した論理の委 或る超絶的な ŧ

昨夜、

私の「ウィア・オヴ・ハーミストン」は大いにはかどっ

結局は、

南海の果で、

嘲笑を買い、

家庭の中では年上の妻のために絶えず圧迫を受け、

泣き度い程北方の故郷を思いながら、惨めない。

所で、 今朝その酷い反動が来た。 胃のあたりが鈍く重苦しい感

気障な見栄坊で、きざ · た頃、 身体を酷使しては、 一人の惨めな男の生涯の幻影が頭の中を通り過ぎた。 ひどい肺病やみで、 実生活に於ては、 気分が冴えなかった。 私 の筆は止った。 才能もないくせに一ぱしの芸術家を気取り、 スタイルばかりで内容の無い駄作を書きま 気ばかり強く、鼻持ならない 自 惚 やで、 其の子供っぽい気取のため事毎に人々の 行悩んで頬杖をついていた時、 机に向って昨夜の続きを四五枚も書 その男 ひよい 弱

に死んで行く。

ちらりと一瞬、 閃 光のように斯うした男の一生の姿が浮かんせんこう

私ははっとみぞおちを強く衝かれた思いがし、 椅子の上にく

ずおれた。冷汗が出ていた。

莫迦な考が浮ぶなんて。 暫くして私は回復した。之は何か身体の工合のせいだ。こんな

しかし、 自分の一生の評価の上に、ふと、さしたかげは中々拭

い去れそうもない。

Ne suis-je pas un faux accord

Dans la divine symphonie?

神のあやつる交響楽の中で

の今迄書溜めた分を読みかえす。悪くない。 夜八時、すっかり元気になった。ウィア・オヴ・ハーミストン 悪くないどころか!

がうすっぺらだの、哲学が無いのと、言い度い奴は勝手に言うが るんだ。 実際に俺の作品を読んで見れば、 今朝はどうかしていたんだ。俺が下らない文学者だと? 要するに、文学は技術だ。 俺は俺の作品の愛読者だ。 概念で以て俺を軽蔑する奴も、 文句なしに魅せられるに決って 書いている時は、 すっかり、 思想

でも、 厭な気持になり、こんなものの何処に価値があるか、いゃ 翌日読返して見れば、俺は必ず俺の作品の魅力にとらわれ と思える時

264

なに詰まらないものが出来る筈はないのだ。安心しろ! のを描く技術に自信を有っていいのだ。 て了う。仕立屋が衣服を裁つ技術に自信を有つように、

お前の書くものに、そん

R · L

俺は、

光と風と夢

十一月××日

真

の芸術は

(仮令、ルソーのそれの如きものではなくとも、

んだ。

自分の子供の自慢話と、(もう一つ、昨夜見た夢の話と)---

色々な事を言う人があるものだ。自分の恋人ののろけ話と、

人には面白かろうが、他人にとって之くらい詰まらぬ莫迦げたも

等かの形で)自己告白でなければならぬという議論を、

雑誌で読

何

のがあるだろうか?

が 0) 訂正せねばならなくなった。自己告白が書けぬという事は、 ルドが書けるか、どうか、考えて見た。書けないのだ。 非常にむずかしい問題だ。或る人々にとっては極めて簡単な自明 問題らしいが。)早い話が、俺にデイヴィッド・カパァフィー 追記 同時に、作家としての欠陥になるか、どうか、之は私にとって ての致命的欠陥であるかも知れぬことに思い到った。 ――一旦、床に就いてから、 種々考えた末、 右の考を稍々やや 何故? (それ 人間

信が有てないから。単純平明な、あの大家よりも、遥かに深刻な

俺は、

あの偉大にして凡庸なる大作家程、

自己の過去の生活に自

光と風と夢 苦悩を越えて来ているとは思いながら、 大いに書けるし、又書きもした。青年時代の乱痴気騒ぎや、父親 ことは、 ・S・)自信が無い。幼年少年時代の宗教的な雰囲気。それは 現在に、ということにもなるぞ。 俺は俺の過去に(という しっかりしろ!

R

君を悦ばせる程、 は欣ぶかも知れぬ。 何を為していたかを書くことは? イとの結婚を心に決めながら、 いとしよう。 との衝突。 之を書くのは頗る辛いことには違いないが) しかし、ファニ 之も書こうと思えば書ける。 (老年に近く、 深刻に。 深刻無比の傑作現るとか何とか。 結婚の事情。 最早女でなくなった妻を前に見なが 同時に俺が、他の女達に何を語り 勿論、 むしろ大いに、 これも書けないことはな 書けば、 併し、 部の批評家 批評家諸 俺に

ら。 嘯いたものだが、今は、 ぬ。 。)それを肯定できぬ。では、 でも何でも、俺の倫理観は(俺の場合、倫理観は審美感と同じだ には解らぬ。 (俺は、単純 闊 達 を愛する。 ハムレットよりドン とはない。(少くとも他人の場合に、なら。)だが結局、全身的 の複雑性を底まで見極めようとする其の見方も、一応は解らぬこ く薄っぺらだからだ、という見方もあるのは承知している。人間 は書けぬ。俺には残念ながら当時の生活や行為が肯定できないか キホーテを。ドン・キホーテよりダルタニアンを。)薄っぺら 肯定できないのは、お前の倫理観が、凡そ芸術家らしくもな 全く分らぬ。 昔は、 裸になり、両手を突き、満身の汗をかい よく、「弁解は神様だけが御存じだ」と 当時何故そんな事をした? 分ら

光と風と夢 268 て、「分りませぬ」と申します。 一体、俺はファニイを愛していたのか? 恐ろしい問だ。

しい事だ。之も分らぬ。兎に角分っているのは、私が彼女と結婚

恐ろ

おお、 ティヴンスン氏は、何と、齢四十にして未だ愛の何ものなるかを 之からして分っているのか? 定義を求めているのではない。 小説の中で幾多の愛人達を描いた小説家ロバァト・ルゥイス・ス 己の経験の中から直ぐに引出せる答を有っているか、というのだ。 して今に到っているということだけだ。 (抑 々 愛とは何だ? 満天下の読者諸君! 諸君は知っておられるか? 幾多の

ゆる大作家を拉し来って、面と向って此の単純極まる質問を呈し

解せぬということを。だが、驚くことはない。試みに古来のあら

俺は、 俺の作品のだしがら? スウプのだしがらの様な。今にして思う。 ウィフトもモリエールもラブレエも、更にはシェイクスピア其の の中から其の直接の答を求めて見給え。ミルトンもスコットもス の目的に向って統一された生活を美しいとさえ自ら感じていた。 に比べて、悲しいことに、生活が(人間が)余りに低い。俺は、 に違いないから。) 人さえもが、意外にも、驚くべき非常識、乃至、未熟を曝露するばくる て見給え。愛とは何ぞや? と。して、彼等の心情経験の整理箱 所で、 物語を書くことしか今迄考えたことがなかった。その一つ 問題は要するに、 作品と、作者の生活との開きだ。作品

勿論、

作品を書くことが、同時に、人間修業にならなかった、と

光と風と夢 270 怯ぅ は病弱な自分に対して閉されていたから、 に資する所の多い途は無かったか? いうまい。 な遁辞であろう。一生病床にいても、猶、 なお 確かに、 なった。しかし、 (他の世界 それ以上に、 などというのは、 修業の途はある。 -行為の世界 人間的完成

勿論、そうした病人の達成する所のものは、余りに偏ったものに なりがちだが)自分は余りにも物語道(その技巧的方面)にのみ

険は、 没入し過ぎてはいなかったか? して生活に一つの実際的焦点を有たぬ者(ソーローを見よ) 充分考慮に入れた上で、この事を言っているのだ。曾て大 漠然とした自己完成のみを目指 の危 南海

の我が乏しき書庫に其の作物が一冊も並んでいないからだが)あ 嫌いだった・之からも好きにはなれまい(というのは、今、

なのだ。 俺の人間的完成(もしくは未熟)を追越し過ぎたのだ。 もスウプのだしがらではない。いや、逆に、作品が彼のだしがら のワイマアルの宰相のことを、ひょいと思う。あの男は、少くと ああ! 俺の場合は、文学者としての名声が、不当にも、 恐るべき

か。 俺の従来の作品の凡てを廃棄しなければならなくなるのではない ここ迄考えて来て、妙な不安を覚える。今の考を徹底させれば、 之は絶望的な不安だ。今迄の俺の生活の絶対専制者「制作」

危険だ。

よりも権威あるものが現れるということは。

271 欣ばしさ、気に入った場面を描写することの楽しさが、自分を捨 しかし一方、習、ならい 性となった・あの文字を連ねることの霊妙な

あろうし、 去るとは、 又、そうあって差支えないのだ。 ゆめゆめ思えない。 執筆は何時迄も俺の生活の中心で けれども

変化を懼れずに迎えねばならぬ。 恐れることはない。 今迄自分の織成した美しい繭を無残に喰破らねばならぬのである。 俺には勇気がある筈だ。 蛹が蛾となって飛廻るためには、 俺は俺の上に起った

十一月××日

郵 .船日、エディンバラ版全集の第一巻到着。 装^{そうて}い 紙質その

他、 大体満足。

の間の考え方の距離が益々大きくなって来ていることを感じる。 書簡、 雑誌等を一通り読終った後、 欧羅巴にいる人達と私とョーロッパ

欧米、 嗜好を神聖なる規則の如きものに迄祭上げ、他の世界には通用ししこう からだ。 を勉強する輩を嗤った。 り狭い考え方に捉われているか、どちらかだ。曾て私は法律など そうもない其の特殊な狭い約束の下に於てのみ、 ろで、それは普遍的な人間的価値をもつものではない、と考えた 威をもつもの。 私が余り通俗(非文学的)になり過ぎたか、或いは本来彼等が余 るのだから、 英国の文学、仏蘭西の文学、独逸の文学、 所で、今、 白人種の文学。彼等はそういう縄張を設け、 その複雑な機構に通暁することを誇って見たとこ おかしいが)法律とは或る縄張の中に於てのみ権 私は、文学圏についても、 (そのくせ私自身弁護士の資格を有って せいぜい広い所で、 それを言おうと思 優越を誇ってい 自己の

光と風と夢 274 ない。 やの評価の上にも、 を絶対普遍のものと信じている。そういう限られた評価法しか知 るように見える。之は白人種の世界の外にいる者でなければ判ら 勿論、このことは文学にだけ限るのではない。 西欧文明は、 或る特殊な標準を作上げ、めやす 人間や生活

それ

らない奴に、太平洋の土着民の人格の美点や、その生活の良さな 十一月 てんで解りっこないのだ。 × × 日

0) 、勿論、 型の人間を見出すことがある。 南 海の島から島へと渡り歩く白人行商人の中には、 大部分は我利我利の 奸 譎 な商人ばかりだが)次の二つ その一つは、 小金を溜めて、 極く稀に 立は鋭く知的である。 候、 十歳前後の男で、 でもいった虚無的な人間。 に白眼視し、 は同様だが、 止めないといった様な人間。 洋行商人の目的だ)を全然持合せず、唯、 んだ膝頭の辺をがくがく顫わせながら。)服装はひどいが、 へ帰り余生を安楽に暮らそうというような量見(之が普通の南 航海を愛し、 街 の酒場で、 之はずっと拗ねた烈しい行き方で、文明社会を故意 いわば、 南海を離れたくないがためにのみ、今の商売を 私の隣の 卓 子 で独り飲んでいたのだ。 生きながら骨を南海の風雨に曝していると 目の赤く濁っているのは明らかに酒のせい この第二の型の人間の一人に出遭っ 第二は、 南海と放浪とを愛する点で 南海の風光、 (足を た。

兀

気

275

僅か

光と風と夢 276 ラウスへ渡るという。 ることだけは確かに分った。こんな港町には珍しい・完全な英語 である。 一時間足らずの会話だったが、 荒れた皮膚に脣だけいやに紅いのは少々気持が悪い。 雑貨行商人だといい、トンガから来たが、 (彼は勿論、 此の男が英国一流の大学を出てい 私が誰であるかを知りはしな 次の船でトケ

質の病気のことを少し話した。それから、 しゃるが、今の生活だって、そう特殊なものでもないでしょう? 小説めいた原因なんかありませんよ。それに、こんな生活とおっ せたか、という私の愚問に就いては、 い。)商売のことは何もしゃべらない。 子も、 家も、 健康も、 希望も。 何といって名指せるような、 何が彼をこんな生活へ入ら 島々に白人の移入した悪 自分には何もないこと。

人間という形態をとって生れて来たという一層特殊な事情に比 と笑いながら、軽い空咳をした。

べればね、 之は抗い難きニヒリズムである。

家に帰って寝に就いてからも、

此の男の言葉の・極めて 叮 嚀 な・しかし救いの無い調子が耳にていねい

ついて仕方がない。Strange are the ways of men

此 |処に定住する前、スクーナーで島々を経廻っていた間にも、

私は実に色々な人間に遇った。

作り、 白人は愚か、土人さえ稀なマルケサスの裏海岸に自分で小舎を 唯一人(海と空と椰子樹の間に全く唯一人) 一冊のバアン

悔もなく其の地に骨を埋めようとしている)亜米利加人もいた。

ズと一冊のシェイクスピアを友として住んでいる(そして少しの

光と風と夢 278 ると、 彼は詩を作って贈って呉れた。 彼は船大工だったのだが、 で熱帯 の海 其の儘住みついて了ったのだ。 への憧憬に堪えかね、 若い頃南洋のことを書いた書物を読ん 竟に故国を飛出して其の島に来っい 私が其の海岸に寄った時

を勤 な偶像が無数に、 スター島(其処では、 或るスコットランド人は、太平洋の島々の中で最も神秘的なイ めた後、 再び島から島への放浪を続けた。 全島を蔽うている。)に暫く住んで死体運搬 今は絶滅した先住民族の残した怪異巨大 或る朝、 船上で髭びげ

を剃っているとき、 付くと、 どうしたんだ? 彼は自分の耳を剃落しており、 彼は背後から船長に呼掛けられた。 君は耳を剃落しちゃったじゃないか!」気が しかも、 それを知らなか 「おい!

欺した者」。私の帆船が彼の島を立去る時、

豪毅朴直な此の独裁ごうき

を聞 が訪ねた時、 其処で、不平もなく悔もない余生を送った。その呪われた島を私 たのだ。 かせて呉れた。 彼は直ちに意を決して、癲病島モロカイに移り住み、 此の男は極めて快活な様子で、 過去の自分の冒険譚

を少しく欺した者」「余を相当に欺した者」「余を余りにも酷く 欧羅巴式の 脚 絆 を巻いた、この南海のグスターフ・アドルフは ゲートル 冠の代りにヘルメット帽をかぶり、スカアトの様な短袴を着け、 こたま買込まれていた。 大変に珍しいもの好きで、 アペママの独裁者テムビノクは今、どうしているかと思う。 彼は白人を三通りに区別していた。 赤道直下の彼の倉庫にはストーヴがし 余

光と風と夢 280 たのだから。 訣別の歌をうたった。 殆ど涙を浮かべて、「彼を少しも欺さなかった」私の為に、 彼は其の島で唯一人の吟遊詩人でもあっ

を夢見た彼も、今は自国の衰亡を目前に、 に物悲しげなカラカウア。太平洋人種の中で私と対等にマックス ミューラアを論じ得る唯一の人物。曾てはポリネシアの大合同 ハワイのカラカウア王はどうしているか? 静かに諦観して、 聡明で、しかし常

アバアト・スペンサーでも 読 耽っているのであろう。 半夜、 眠れぬままに、 遥かの濤 声 に耳をすましていると、

蒼な潮流と爽やかな貿易風との間で自分の見て来た様々の人間の

姿どもが、次から次へと限無く浮かんで来る。

違いない。それにしても、其の夢夢の、何と多様に、又何と、も の哀れにもおかしげなことぞ! まことに、人間は、夢がそれから作られるような物質であるに

十一月××日

この仕事も漸く軌道に乗って来たことを感ずる。やっと対象が ウィア・オヴ・ハーミストン第八章書上。

はっきり掴めて来たという訳だ。書きながら自分でも何かどっし

ッドナップト 」の場合も恐ろしく速く書けたが、書いている最中に確 分厚なものを感じている。「ジィキルとハイド」や「誘

かな自信はなかった。もしかしたら素晴らしいものになっている

量によって。之は、最低の見積りによっても、「カトリオーナ」 判るように思う。 綱をしっかり抑えているのだ。 速く進行してはいるが、今度は明かに自分が凡ての作中人物の手 廻されている 恰 好 だったからだ。 今度は違う。 昂 奮 した 自 惚 によってでなく、落着いた計こうふん 出来栄の程度も、 自分ではっきり 同じく、 楽に、

る」と。 確 か である。 島の諺にいう。 「鮫か鰹か、は、 尾を見ただけで判

より上に位するものとなろう。

まだ完結はしていないが、これは

十二月一日

夜はまだ明けない。

私は丘に立っていた。

断目から時折、 未だ色彩を有たぬ。 る大傾斜の彼方、 夜来の雨は漸くあがったが、 暁近い鈍い白さが、海と野の上に流れる。 鉛色の海を掠めて西へ逃げる雲脚の速さ。 北欧の初冬に似た、冷々した感じだ。 風はまだ強い。 直ぐ足下から拡が 天地は 雲の

支え、辛うじて私は立っていた。 湿気を含んだ烈風が、 まともに吹付ける。大王椰子の幹に身を 何かしら或る不安と期待のよう

昨夜も私は長いことヴェランダに出て、荒い風と、 それに交る

なものが心の隅に湧いて来るのを感じながら。

光と風と夢 284 立っている。何か烈しいもの、 自分を一つの制限の中に閉込めている殻を叩きつぶしたいのだ。 に、ぐっとぶっつかって行きたいのだ。そうすることによって、 雨粒とに身をさらしていた。今朝も斯うやって強い風に逆らって 兇暴なもの、 嵐のようなもの

何という快さだろう! 四大の 峻 烈 な意志に逆らって、雲と ヒロイックな気持になって行った。 水と丘との間に 屹 然 と独り目覚めてあることは! O! Moments big as years. 私は次第に

声は風に千切られて飛んで行った。明るさが次第に、野に丘 I die, I faint, I fail. とか、とりとめない文句を私は喚い

に海に加わって行く。何か起るに違いない。生活の残渣や 夾 雑 を掃出して呉れる何かが起るに違いないという欣ばしい予感

の村、

紅いココア殻の山等の美しさ。

に、私の心は膨れていた。

時間もそうしていたろうか。

やがて眼下の世界が一瞬にして相貌を変じた。

色無き世界が忽たちま

ちにして、 東の巌 鼻の向うから陽が出たのだ。 溢れるばかりの色彩に輝き出した。此処からは見えなぁ。。 何という魔術だろう!

薇ら 色、 今迄の灰色の世界は、今や、濡れ光るサフラン色、硫黄色、 金の花粉を漂わせた朝の空、 繻子の光沢を帯びた・其等の・目も眩む色彩に染上げられしゅす 丁子色、朱色、土耳古玉色、オレンジ色、トルコだま 崖、 芝地、 群青、菫色-椰子樹の下やしじゅ

瞬の奇蹟を眼下に見ながら、私は、今こそ、 私の中なる夜が

昂 然として、

私は家に戻った。

遠く 遁 逃し去るのを快く感じていた。

_ _ r

十二月三日の朝、スティヴンスンは何時もの通り三時間ばかり、

餐 の支度をしている妻の傍で冗談口をききながら、サラダを掻^さん きまぜたりした。それから、 葡 萄 酒 を取出すとて、 せた。午後、書信を数通したため、夕方近く台所に出て来て、 「ウィア・オヴ・ハーミストン」を口授して、イソベルに筆記さ 地階へ下り

手から落し、 て行った。 瓶を持って妻の傍まで戻って来た時、 「頭が! 頭が!」と言いながら其の場に 昏 倒し 突然、 彼は瓶を

直ぐに寝室に担ぎ込まれ、 三人の医者が呼ばれたが、 彼は二度

と意識を回復しなかった。

翌朝、 ヴァイリマは、 土人の弔問客達から贈られた野生の花

花・花で埋められた。

明から、ヴァエア 山 巓 への道を斫り拓いていた。 イドは、 自発的に勤労を申出た二百人の土人を指揮して、 其の山頂こそ、

スティヴンスンが、 風 の死んだ午後二時、 生前、 棺が出た。 埋骨の地と指定して置いた所だった。 たくま 逞しいサモア青年達のリレ

る。 によって、 叢 林中の新しい道を、 山巓に向って運ばれるのであ

ティヴンスンの身体は埋められた。 四時、六十人のサモア人と、十九人の 欧 羅 巴 人との前で、ス

海抜千三百呎、フィート シトロンやたこの木に取囲まれた山頂の空地で

ある。

気の中で、会衆は静かに頭を垂れた。 故人が、 唱えられた。 生前、 噎せる程強いシトロンの香の立ちこめる熱い空 家族や召使達の為に作った祈祷の一つが、その 墓前を埋めつくした真白な

百合の花弁の上に、天鵞絨の艶を帯びた大黒揚羽蝶が、 て、息づいておった。...... 翅を休め

赤銅色の皺だらけの顔に涙の筋を見せ

ながら、 に対して抱く絶望的な哀傷を以て— ―生の歓びに酔いしれる南国人の・それ故にこそ、 -低く眩いた。

「トファ (眠れ)! ツシタラ。」

底本:「昭和文学全集 第7巻」小学館

底本の親本:「中島敦全集 1989(平成元)年5月1日初版第1刷発行 第1巻」筑摩書房

1976(昭和51)年3月初版発行

※「李陵 山月記 檸檬 愛撫 外十六篇」文春文庫を参照して、

「卓子《テーブル》」「輪索《わな》」「稜鏡《プリズム》」 榕樹《ガジマル》」のルビを補った。

入力:kompass

291 校正:伊藤時也

2001年8月3日公開

2013年10月1日修正

##	
萝	

夢	
9	

夢	2

光と風と

青空文庫作成ファイル:

w.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたった

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(http://ww

のは、ボランティアの皆さんです。

光と風と夢中島敦

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL http://www.aozora.gr.jp/

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL http://aozora.xisang.top/

BiliBili https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks 青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/ ※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。 http://tokimi.sylphid.jp/